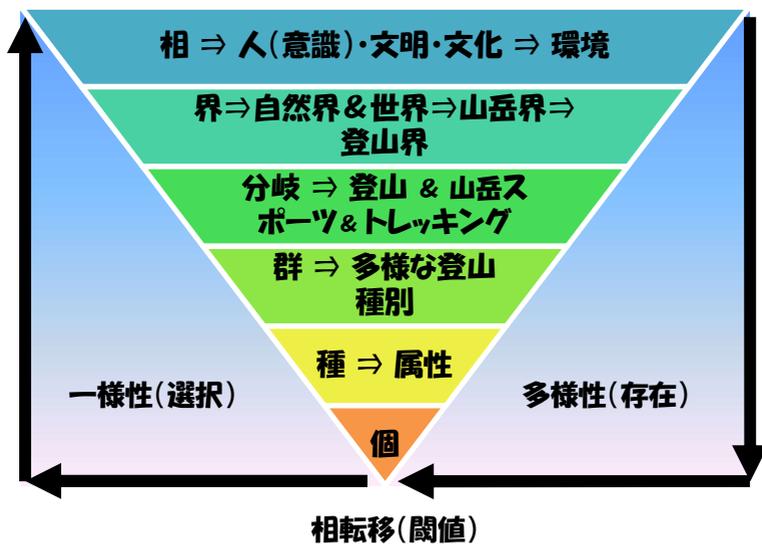


# 登山の生態分類(学)

登山と山岳スポーツのちがい



田中文夫





## はじめに

# 登山の生態分類(学)

『登山は戦争の抑止力となり、スポーツは戦争へのガス抜きとなる』と、大胆な前提仮説を立ててみました。半世紀以上にわたる登山経験と論考を繰り返した末の、到達点です。戦後70年を過ぎた登山界にあり、今もなお「登山はスポーツである」、とする定説は不動のものです。近年益々その傾向は強まり、2020年東京オリンピック追加競技種目の一つ「スポーツクライミング」は、あたかも登山の一種であるかのように受け止められています。国民体育大会の「登山」部門にあっても、参加するだけの時代から、今は「スポーツクライミング」へと統一され、得点種目となっています。

しかし私はその定説にくみせず、「登山はスポーツ的要素が大きいものの、それだけでない人間総合力の取り組みである」と理解し、半世紀前から小論も公表してきました。しかし論争になるまでもなく、論考は「ドグマ(論)」と受け取られていたのでしょう。ヒマラヤ登山遭難体験を経ても、半世紀以上過ぎた今でも私の認識は初期と変わらず、登山はより一層人間統合行為である実感と整理ができるようになりました。その成果は、『登山の総合人間学』(私製版、2015.12)にまとめました。

もちろんのこと私も、「スポーツクライミング」を否定するものではありません。18歳から登山を始め、そのほとんどは岩壁クライミングでしたから、内容は「スポーツクライミング」に近いものでした。両者の違いは「死への感性」です。スポーツクライミングは安全確保を条件として競技します。登山は高度になるほどに安全確保ができません。墜落や雪崩は常に死に至る可能性を秘め、自然を読み切れない地理的・気象的条件が悪い中で、途中リタイアできない恐怖心もあります。

老いを迎えた今、闘争心、競争心や嫉妬心が静まる中で、静かに、かつ客観的に「登山」を振り返ることができます。すると、「登山」と「山岳スポーツ」は、明らかに異なる世界であることが見えてきました。40年以上前に分岐派生した「トレッキング」も、やはり登山とは別分野(群)な認識となります。

そこで今、「登山の生態分類(学)」として、ここに分類・整理を試みた次第です。

# 登山の生態分類(学)

## もくじ

【別表-1-1】現代登山と山岳スポーツ等の生態分類表（左側）… 1

【別表-1-2】現代登山と山岳スポーツ等の生態分類表（左側）… 2

はじめに …… 3

もくじ …… 4

1 章. 登山の社会的背景 …… 5

半世紀前の小論 / 近代から現代に至る日本登山の流れ

2 章. 登山分類の基礎事項 …… 23

多様性と一様性 / 種の位置づけ / 旧来の分類例

3 章. 登山の生態分類 …… 34

方法論 / 構成と構造 / 単位としての個

4 章. 登山の種別 …… 47

これまでの登山や登山者組織の分類 / 登山と山岳スポーツ等の新たな分類

5 章. 登山の方向性 …… 59

複素的視野から示す登山様式 / トレッキング / 山岳スポーツ

アルピニズムと生の弁証法 / 山岳スポーツと死の排除

6 章. 登山と山岳スポーツのちがひ …… 80

スポーツの社会性 / 登山のスポーツ意識普及と第二次 RCC / アルピニズムの

衰退 / アルピニズムへの希望

7 章. アルピニズムの変貌 …… 99

世界の背景から / 登山の弁証法的再認識 / アルピニズムの終焉とプロ意識

の錯誤

8 章. 星の王子さま(登山) & かもめのジョナサン (山岳スポーツ)

& 山岳文化 …… 119

おわりに …… 130

# 1 章 . 登山の社会的背景

(2016 年)

次の1節は、1970年3月発行の山岳同人雑誌、『山岳展望 第14号』（発行＝山岳展望の会）に掲載された【登山の社会的背景 ～ 登山学確立へのアプローチ～】と題した拙著の小論です。

半世紀前のテレビ普及に始まるアナログ映像文明・文化は、現代に入ってからデジタル化され、革新的変化を遂げています。アナログ技術とデジタル技術との違いによる、文明・文化への影響を考察した書を、浅学な私は未だ把握していませんが、思考よりも先に、実相の端末機器は便利さが先立ち、広く普及しています。パーソナルコンピュータ(PC)やスマートフォン(スマホ)によるソーシャル・ネットワーク(SNS)や、人工知能(AI)は、短期間で社会生活に浸透しています。約半世紀前に記した次節の見立て論旨は、今、さらなる深みと連携の広がりによって、論考の手直しをする時ともいえます。

そこでこのたび1節において、過去の小著に若干の加筆・修正の推敲を加えながら半世紀前の小論を復刻させ、2節でさらなる論考を積み上げ、自身の登山体験に即した修正論を試みることにしました。

さらに1章、1節で「登山の終焉」に言及していたことにより、5章で「登山の方向性」、6章で「登山と山岳スポーツのちがひ」、という登山の社会的背景の変遷を加えて考察してみます。

## 1節. 半世紀前の小論 『山岳展望 第14号』1970.3発行

### 【登山の社会的背景 ～ 登山学確立へのアプローチ】

#### (1) 登山の史的背景 (社会と個人の問題)

発生へのアプローチ ～ 表音文字

「登山」と「mountaineering」を並べると、我々は同じような意味で、「山へ登ること」と理解している。しかし各々の言葉を分解してみると、「登」は何かに向かって「のぼる」様式を表す。一方で「m」は、何の意味も示していない。前者を表意文字といい、後者を表音文字と呼んでいる。日本にもカナ文字のような表音文字があるにしても、カナ文字よりも漢字使用のほうが古く、いまだ文章の中核は漢字である。

近代文明をリードしていたヨーロッパにあつては、アルファベットを主体とした表音文字である。この表音文字こそが、人間の意識を分離させたのではなからうか。いわゆる即時存在としてあるがままの「私」と、「私」自身も「私」の意識の対象になってしまう対自存在としての「私」である。いわゆる【I, my, me】を区別して用いる意識となる。一方で漢字は、一字の中に微妙な意味をも含め、人間の複雑な意識をその一字の中に込めることができた。

「山」という一文字の要素は、やまがもつあらゆるものを含んでいる。ましてや一つの山に限らず、二つとも、無数とも解釈できる。しかし英語などの表音文字にあつて、「m」という文字は単なる記号にすぎず、何の意味も形象も含んでいない。であるから、「mount」と記号を連ねた構造化することにより、「山」という意味を与える(定義する)言語となる。意識することにより言語として構造化する(定義=プロトコル)、つまり「見る私」という主体意識が、「見られる私」という客体化を言語構造として認識する。デカルト(1596~1650)の有名なことば、『コギト・エルゴ・スム(我思う、ゆえに我あり)』はそのことを良く表象する。

山のふもとに立ってみよう。「見る私」は、「私」の感覚の色眼鏡を通して山を分析する。そして大脳に五感を通した情報を刻み込む。入力情報そのものには具体的な行動を指示する意味はなく、大脳にセットされた論理思考を経て、行為への指令となる。脳における論理思考が私自身であり、知・情・意の「意識と意思=論理思考」の部分となってくる。人間も自然もその要素を知識の断片化、細分化、局所単位化によって認識し、それを構造化へと組み直して世界の再認識をおこなう。この西欧型(表音文字社会)意識構造は、人間の身体同様自然をも、意識と意思の客体として、それらを論理的思考(定義づけ)によって制御しようとする。

「初登頂」という概念は、歴史の流れの中における一つの定義づけとして、そのことの意味は「初めて」という価値の付与にあり、そのことを成し遂げた力への賞賛ともなる。1787年、ド・ソシュールによるモンブラン初登頂は、華々しい山頂への幕開けとなった。

グーテンベルクの発明した印刷機は活字の表音文字を量産することにより、知識の普及蓄積が容易になった。その結果実存の意識を拡大させ、知識の力による社会統治を展開させてゆくこととなる。そのような状況の下、初登頂の成果はまた「対自然」における「征服」の概念をも形成することとなる。

一方で東洋においては、まだ「登山概念」は発生していない。西欧型意識構造と異なり、表意文字による東洋型意識構造は、「私」そのものも自然の内に含まれる一元論に帰着して、「空」という言葉の中にそれら全てを含むものとした。仏教を例とする東洋思想からは、自己矛盾(パラドックス)という概念が生じない。したがって矛盾そのものを考察する弁証法など生まれようもない。そして山を自然に存在する客体として観測や、征服といった感覚すら持ち得なかったのである。

## (2) 登山の展開 (遊びの文化)

### 1) 山頂の時代 ~ 力の誇示

ド・ソシュールによるモンブラン初登頂から、ウインパーによるマッターホルン初登頂までを「アルプスの黄金時代」と呼ばれている。初登頂に成功した瞬間、こんにち我々が味わう山頂の感覚とは、異なるものがあっただろう。それは先にも記した「征服」の心理であったと思われる。

ヨーロッパ中に広がった百年戦争は、ナポレオンが討たれて終結となる(1815年)。戦争という力の拡大を背景に、モンブランは登られた。啓蒙思想によるフランス革命は、市民の実行力の誇示とともに、権威という架空な概念の圧力を切り刻んだ実存意識の高揚が、知識の力を拡大させた。

この時代の登山には梯子あり、縄や斧を使用する人工登攀の原型があった。しかも彼らは、それが良いとも悪いとも考えず、登るためには当然使わざるを得なかつ

た道具なのである。自然の征服や科学的探求のために、最善の道具の使用は目的達成のアイデアであった。あるときは手となり、あるときは足の代用となる道具の使用に、善悪の判断はともなわない。人工登攀における道具の使用の善悪は、後の時代の遊びのルールに由来する。登山における探検要素は、知識を活用した最善の道具立てにより、自然に対する人間の力をもって未知な領域を解明し、その要素により自然を再構成し直して理解・説明することとなる。表音文字による西欧文明の論理知(定義)の特徴である。

ヨーロッパ文化圏にあるアルプスの初登頂は、個人レベルにおいての探検、探査、力の誇示の範囲にあった。しかしヒマラヤ初登頂の場合にはその規模の大きさから、イギリスがエベレストを、フランスがアンナプルナを、ドイツがナンガ・バルバットを、日本がマナスルをというように、およそ国と国との力の誇示競争となった。このことは登山を楽しむ遊びからの発想ではなく、「人類初」を獲得し合う「パイオニアワーク」として、文明の覇権争い同様な、世界、国家レベルの競い合いとなった。

山頂の時代にはパイオニアワークの初登頂が登山の主要価値であったが、有限な地上の山岳にあって、この価値観は時代とともに変わっていく流れの中にある。登山の黄金期も後半を過ぎると、世の思想はヘーゲルからニーチェへと移り、個の意識はますます研ぎ澄まされていく。征服して頂きに立った人間は、果たして何を見たのだろうか……。 「虚無」という、やりようもなく深くて暗い谷間ではないか。

だが、困難なときほど、「私」は無心となり、その集中が逆に「私」の心を充実させる。「定立～反定立～合意」というヘーゲルの弁証法は、次なる世代へと受け継がれることになる。登山は山頂の理念に取って代わり、登路と高峻さの中に「より高く、より困難を目指す(マンメリーイズム=アルピニズム)」という、次なる時代を迎えることになるのである。それはまた、パイオニアワークの文明競争から、遊びとして楽しむ文化の時代への変遷である。

## 2) 登路、高峻さの時代 ～ 遊び

マンメリーによって打ち立てられた登路の概念と高峻さこそ、現在日本で主流をなす「アルピニズム」の柱である。バリエーション・ルートから、より困難な登攀を

求めていった。登頂の時代は登山者の主体と、それをサポートする従者によって組織化され、主体たる登山者は社会においてもエリートであった。庶民意識としては山と私を対峙させ、組織だって立ち向かう実施力がもてなかった時代にある。初登頂されてしまった後、マンメリーはより困難なバリエーション・ルートをよじ登って山頂に達した。コーカサスからヒマラヤのより高峻さに挑み、ついにはヒマラヤのナンガ・バルバットで帰らぬ人となる。

山頂の時代、力の誇示が「対社会」であったのに対し、アルピニズムのより高く、より困難なルートから山頂へ至る考えは、「私」が「私」に対して力の拡大を認めていくこととなる。いわゆる「対自意識」の問題として、実存意識の中へと侵入していくのである。そのような困難な岩壁を攀じ登ることが、「私」として生きる実存的確認意識となり、ニヒリズムの虚無を否定する弁証法的「生の実感」を確認することとなった。虚無の意識に切りさいなまれた身と心が、困難な登山を克服することにより、全人格一体となった「私に統合」できるのであった。それゆえに個の時代にあっては、「なぜ山に登るのか」という問に対し、哲学的回答を得ることができることとなった。「個の時代」である。

アンケート表1(山岳展望第十四号・「登山に関する実態調査」1970年)に見られるように、「なぜ山に登るのか?」の回答の中で、自然鑑賞・自然との融合が54.5%と過半数以上を占めるように、東洋的登山観は「自然即私」といった主体・客体を一体的に自然と捉える思考が定着している。より高く、より困難を求める登山者は20.4%と、五分の一に過ぎない。しかしアンケート表10の回答では、より高く、より困難を求める登山を積極的に希望する登山者は46.5%と半数に迫っている。ということは、近代登山始めの頃の登山者層は知的レベルが高く、登山はインテリ層や支配階級に普及した。それが「山頂の時代」の登山者層であったのだが、次の「アルピニズムの時代」に入ると登山は一般庶民へと普及をはじめ、誰でもが比較的容易に困難な登山形態へ取り組めるようになったのである。

登山用具においても、「山頂の時代」にあっては積極的に道具を使用したことは先に述べた。しかし登路が問題になると、用具使用への規制意識、つまり「遊びのルール」が問題となる。そのことは困難度にも関係し、「より困難」を求める思

想の中では安易に道具を用いてはならない、共通認識(ルール)が成立してくる。より困難に立ち向かう「私」と、安易な解決に頼ってしまう「私」との、相克が生じる。この相克の矛盾を理性的な「私」によって乗り越えるところに、ニーチェのいう「力への意思」や、「超人」の思想に習い、実践的解決が図れるのである。

アンケート表8の人工的手段の使用についての回答で、「**使用制限のルールが確立されるべきだ**」の回答が39.5%と一番多いのも、いまだ「**登路、高峻さの時代**」にあるといえよう。「**積極的に使用すべき**」が23.2%と次に多いのも、「**山頂の時代**」がいまだ影響を残していると理解できよう。

いつの時代にあっても、登山行為そのものは交換による「商品」となりえない。行為そのものである登山は、唯物的交換価値ではなく、衣・食・住・道具・エネルギーを知恵と技術を用いて消費を享受する中で、「**文化的価値**」を見出してきた。山岳写真、山岳文学、山岳雑誌等々である。しかし今、山岳プロガイドの成立をもってようやく、「**登山の労働対価をお金と交換する職業(プロ&スペシャリスト)**」が芽生えてきた時代にある。そしてガイドされる登山者は、これまでの自主・自立的登山意識と異なり、契約的金銭対価をもって山岳自然に向き合う「**他力依存形登山者**」が増えてきたことは、**さらなる時代変遷となるのである**。観光登山、鑑賞登山、巡礼登山等々、次なる「**分化の時代**」の序章にある。

### 3) 分化の時代 ~ パーソナリティ

世界大戦という文明圏の覇権争いは流通の市場も広げ、いまや一国、一大陸にとどまらない世界市場へと発展していった。それは主に欧米意識の分化による他者への支配欲求願望であり、自己(国家・世界)統合欲求でもあろう。しかしそれがうまくできないのは、パーソナリティの持つ「**自己矛盾**」への良心があるからだろう。

ニュートンの古典力学から量子力学へ、アインシュタインの相対性理論、ルイセンコの遺伝における環境条件説、フロイドの精神分析、エレクトロニクス急速な発展……等々、科学の分析結果を再構築(人工化)した高度な物質文明が、まさに展開されている。「私」を取り除いた「**存在**」そのものを分析し、再構築し直す(人工化)客観的手法は、表音文字文化ならではのものである。

登山においても同様に、主要な要素を軸として分岐する、必然な進化過程があるのだろう。その主たる要素は大きく分けて、次の三つが考えられる。

I) 対他への力の誇示 (社会性)

II) 対自への力の誇示 (実存性)

III) 遊び (文化性)

一人の登山者がどこに属するかではなく、各々人間が備えている人間の欲求を構造的にとらえたものである。それらのうちのどの部分が強調されるかにより、その時々の「登山の生態」が決められる。それゆえ、歴史という文化変遷過程の中で、その時、その人の環境により、どんな登山を選択するか、認識基準となる。

I) は主に探検的で、初登頂を目指す。

あるいはパイオニアワークと呼んで、社会的存在の確認となる。

II) は主に冒険的で、初登攀を志す実存的私への統合確認となる。

III) は無目的な「遊び」の享受となる。身体運動の発露は「スポーツ」と呼ぶが、他者相関の社会性を帯びると「競技スポーツ」や「ゲーム、ギャンブル」へと転化する。

一人の登山者にあってもこの三つの要素をその時々に応じて使い分けるのだから、登山者生態を構造化し「登山学((後に=登山の生態分類(学)))」として整理するならば、その複雑な生態の中で登山者とその登山の位置付けが理解できるだろう。

アンケート表 9 に見られる、「これからどんな形式の登山をしたいと思うか？」の問に対し、「難しい理屈抜きで楽しい登山をおこなう」という回答が 51.1%と過半数を超えることは、自主・自立による自己矛盾を弁証法的に理解・解決するような「登山の本質」としてきた考えは、もはや終焉を迎えることになるのだろう。山岳自然は観光資源と化し、スポーツ競技場へと化する運命なのかもしれない。

しかしごく少数においては、人間の実存的自己矛盾を理解しようと、山岳自然に普遍的修養の場を求め続けるかもしれない。

#### 4) 登山の終焉 ～ 映像文化

登山の変遷を表音文字の主客分離～再構築から考えてみたが、その終末は象形文字が進化した、**電子(デジタル)映像文化**から考えることとなる。「文化」が人間の生命をより充実させる生命の衣ならば、文化を裁断し、かつ再構築するのは**コミュニケーション・メディア**(現代=SNS)となる。**電子化文明**(現代=SNS)において言語や映像は、人間の脳機能以上に知識を長期に正確に大量保存でき、その知識は同質、均一に、短時間で、大衆の間に普及できる。今、**テレビ**(現代=SNS)による**映像文化**は、これまでと抜本的に違う文化変容を招いている。**電子(デジタル)映像文化**の変遷は、これからの更なる論考が必要となり人間の心の変化へ大きく作用する。

ふたたび、自主・自立・自己負担・自己責任を「登山の本質」とし、**実存の自己矛盾**を弁証法的に**理解・解決**するような登山生態は、もはや大衆の共感を得ないことになるのだろう。しかしそれまでに「**登山学**(後に=登山の総合人間学)」を確立させ、人類の本質的存在にとっての有効性を提示できればと思う。



＜ 山岳展望 第14号（1970年3月発行） ＞

#### 【注記】

『山岳展望 第14号』の20P～27Pに亘り【**登山の社会的背景 — 登山学確立へのアプローチ —**】と題し、掲載されています。

本文中、「**アンケート表〇**」とありますが、同書における「**登山に関する実態調査報告**」(編集部)6P～19Pを指しますが、内容は省略します。

## 2節. 近代から現代に至る日本登山の流れ

日本の山岳は富士山の 3,776mを最高峰としたそれ以下の低山であり、3,000mを超えるアルプスの岩稜帯を除くほとんどが、森林や植生に覆われ、古来修験の場でもありました。富士山はその山容からして、江戸時代の山岳信仰詣での対象となり、庶民の間で「富士講」がおこなわれます。「講」は成人への通過儀礼的な扱いから、江戸時代も後期になると、御師(おし)の世話による現代のツアー登山のような、物見遊山(レジャー)の側面が強まります。他方槍ヶ岳のその山容は、世俗の対象でなく「山岳修験道」の領域となります。槍ヶ岳は1,828年(文政11年)、播隆上人によって槍沢から登頂されますが、その後も庶民を寄せ付けるものではありません。

明治の開国にともない、日本の山岳においては西欧人による「近代登山」が展開されるようになります。「日本アルプス」の名付け親とされるイギリス人＝ウイリアム・ゴーランド(William Gowland)、東京開成学校で教鞭をとったイギリス人＝ロバート・ウイリアム・アトキンソン(Robert William Atkinson)、イギリスの駐日公使＝サー・アーネスト・メイソン・サトウ(Sir Ernest Maison Satow)により、六甲山を登ったことが始まりといわれます。その後活躍したイギリス人＝ウォルター・ウエトン(Walter Weston)は日本の山を自国に紹介します。「ウエトン祭」は、現在も上高地でとりおこなわれています。

「近代登山」とは、山に登ることを目的とした登山であり、信仰や宗教の精神性を離れた、**遊戯性(遊び)**を特徴としています。初期の「近代登山」は山岳修験道や講と異なり、科学性、スポーツ性の高いもので、知識層に広まります。

1905年、小島久太(鳥水)をリーダーに、アーネスト・サトウの次男・武田久吉ら7名が発起人となり「山岳会」が設立され、1909年「日本山岳会」へと名称を変え、日本の登山界を牽引していきます。設立から10年あまりを、「**第一次黄金期**」と称する説もあるそうです。

国外においても槇有恒は、1921年アイガー東山稜を初登攀します。先鋭的な登攀をめざすアルピニズムの時代に入り、より困難なルートからの登頂をめざします。前節「**登路、高峻さの時代**」であり、「**岩と雪の時代**」、「**バリエーションの時代**」と

なり、単に山頂をめざすだけでなく、より困難なルートからの登頂をめざします。

秩父宮殿下は1926年、スイス・アルプスに登ります。立教大学は1936年、ナンダコートに登頂します。この時代まだ、登山は庶民の文化ではありません。大学や高校の学校山岳部とその出身者、貴族院議員、お金持ちなど、上流階級に属する人々の趣味(遊び)という特権に位置づけられます。

1937年(昭和12年)に始まる日中戦争から1945年(昭和20年)の第二次世界大戦終結に至るまでは、一部の人々によって戦中登山が継続されますが、表立って成果を公示する時代がありません。

登山が一般庶民に浸透されるのは、敗戦後の高度経済成長時代に入ってからとなります。

## (1) 第一次登山ブーム

日本のアルピニズム = より高く、より困難なルートからの登攀

1945年8月の敗戦以後、国家の立て直しと、高度経済成長下の所得倍増政策等により、次第に国民の余暇が増します。併せて1956年、日本山岳会によるヒマラヤ8,000m峰＝マナスル初登頂の成果は、登山熱をかきたてます。当時小学校5年生だった私は、映画『マナスルに立つ』を学校行事として見に行かされます。学校から映画館まで、徒歩で片道約1時間歩かされます。スクリーンに映し出される画面はまるで別世界。分別のない少年にとっては、この世の世界と思われません。現実とあまりにもかけ離れていた情景に、感動すら呼び起こしませんでした。

1958年には井上靖の小説『氷壁』が出版され、その後映画化されます。マナスルの映画で感動もなかった私にとり、小説＝氷壁は青春のロマンをかきたてられました。同類とは限りませんが、多くの若者が山に向かいます。

1960年代から1970代にかけては、「**第一次登山ブーム**」と呼ばれます。高度経済成長の下、所得倍増政策と余暇の増大により、社会人山岳団体の活躍が目立ちました。それまで登山の主流は日本山岳会と大学山岳部でしたが、「**三人寄れば山岳会**」と言われたように、社会人山岳団体が雨後の竹の子のように増加します。その登山の主流をなす「**日本のアルピニズム**」という考えに基づく登山

内容となり、「より高く、より困難」な登路と高峻さを求めた登攀が中核となります。若きクライマーたちは日本国内の岩壁はもとより、ヨーロッパ・アルプスからヒマラヤに至るまでの高峰、岩・雪・氷の未登攀ルートへと向かいました。

高度経済成長とアルピニズムは、向上指向特性において歩を同じくし(同相ベクトル)、相乗効果により進歩、進化を奨励します。土曜の夜は電車に乗り、座席の下を三等寝台と称して仮眠をし、駅に降りるとすぐさま、岩壁基部へとわれ先を競います。それゆえに、確保しながら居眠りもしました。時間的、経済的、精神的ゆとりのあつたエリート層登山から、ゆとりのない庶民層の遊びとなつたアルピニズムは、結果として山岳遭難を増大させ、「登山＝遭難」の社会悪なイメージが定着します。谷川岳では1967年(昭和42年)、すでに500名以上の遭難死者数を刻んでいました。

1971年、第二次RCC(Rock Climbing Club)に所属するメンバーを中心に、国内外で先鋭的な登攀をおこなつてきたアルピニストたちにより、(社)日本アルパイン・ガイド協会が設立されます。ヨーロッパ・アルプスは急峻な岩と雪と氷の山々ゆえに、専門登山ガイドに導かれて登るガイド登山が、一般的登山様式となつていました。登山ガイド組合はガイドライセンスを設け、報酬を定めてルート案内をします。日本の山は低きゆえに高峻さも少なく、稜線間際まで植生が延びており、登山ガイドなしでも十分に登れます。山岳会に入り3年も経験を積むと、ひとかどのルートをこなせるようになり、リーダーとなつていきます。大学山岳部においても同様で3～4年生になると、リーダーを務めます。それゆえに職業登山ガイドを必要としませんでした。ヨーロッパの登山ガイド組織を見習い、日本の山でも職業化できないかと立ち上げたのが、(社)日本アルパイン・ガイド協会でした。彼らは「プロガイド」と自称します。プロ＝職業、の理解です。当時からもスポーツ界の最高権威であつたオリンピックにおいて、その参加資格に「アマチュア規定」があり、プロは参加を認められていませんでした。この時代はまだオリンピック憲章の下、アマチュアの品格が、プロ＝職業のもつ技術や記録よりも上位に評価されていた文化です。第二次RCC代表＝上田哲豊が「登山の情緒的要素を捨て去りスポーツである」、と切り切つたことにより、(社)日本アルパイン・ガイド協会もまた、その位置付けはオリンピックよりも下位にみなされる時代でした。詳しくは、6章2節で再度展開します。

この時代の先鋭登山はみな「ガイドレス」であり、その結果、「谷川岳一ノ倉沢と幽ノ沢」は世界で一番危険な岩壁登攀となり、世界の死亡者数を数えます。

谷川岳の岩壁で積雪期に鍛え、次のステップは北アルプスの冬の岩壁です。これらをこなした後にヨーロッパ・アルプスに挑みます。そして最後のステップが、ヒマラヤ岩壁となります。これらの過程をこなしたアルピニストが集まって組織した(社)日本アルパイン・ガイド協会ですが、この過程の途上で多くのアルピニストを失っていったことも忘れてなりません。アルピニズムは、死を背景としていた時代です。

1970～74年にわたるオイルショックは、世界に大きな影響を及ぼします。原油不足なのになぜか、トイレトペーパーが店頭から消え、当時人気商品だったインスタントラーメンも店頭から姿を消します。しかし倉庫の中には山積みされていました。ちょうどそのとき、横浜山岳協会のヒマラヤ遠征登山(1974=P29南西壁)に参加していた私たちは、物資の調達に苦勞した時代でもあります。

ヒマラヤ岩壁登攀というアルピニズムの先鋭登山様式が一方にあり、他方では山稜を登る一般的な登山やワンダーフォーゲル、ハイキングなど、学校や職域で幅広く愛好され、この時代から登山は多様化へと向かっています。

この時代背景には、アメリカに発するヒッピー族が、正義なきベトナム戦争に反対して徴兵を拒否します。愛と平和の下で、人間として自由に生きようとする若者の内省的な運動が、世界に拡がります。ネパール・ヒマラヤの麓、ポカラのペワタール湖畔はヒッピー族の聖地となり、多くの姿を見かけました。ヒッピー族の内省と、アルピニストの内省は同じように響きますが、生態のベクトルは逆向きです。アルピニストの内省は死を介在した弁証法として、定立を否定することの中から生きるこの意味を見出す、自然に抗する能動的あり方です。他方ヒッピー族の内省は、何事にも抗さない自然のままとして、受動的在りようとなります。ネパールの地、ルンビニで生誕した釈迦は仏教を起し、八正道を説きます。八正道なる生き様によって煩惱を断ち、真理は中道にあることを説きます。釈迦の教えは、西欧論理の正論と反論との弁論により、幸福への合意を生み出す弁証手法と異なります。

つまりアルピニズムにおける生と死の弁証法は西欧手法であり、表音文字による定義づけた論理構造をもって現象の具象化を図ります。他方で釈迦の説く八正

道は、〇〇のようにして在るという具象であり、その在り方は言語で定義する必要もない存在そのものによって、人間と世界を統合する意識の中に位置づけられます。

1 節で表音文字と表意文字にふれましたが、まさに西欧は表音言語で語り、記述するから定義による論理構造が必要となります。釈迦の意識は存在そのものが表意言語に等しく、〇〇のようにしてある存在そのものが、宇宙真理のフラクタルな縮小版となり、現生を生きる空間位相に位置づけられます。

## (2) 第二次登山ブーム

平準化の時代 (マニュアル、カタログ、広告)

1990 年代に入ると、高度経済成長末期からバブル崩壊に至り、低成長社会となります。成長社会の終息とともに、「より・・・」と進歩を掲げた日本のアルピニズムも限界を迎え、ともに失速していきます。学校山岳部や社会人山岳会も人員減少となり、若者世代にとって登山は 3K のダーティ・イメージに映り、不人気となります。

若者に代わり、育児期が一段落した戦後世代はゆとりを生じ、秘めていた趣味や健康増進のために、山へと向かいます。時同じくして深田久弥の『日本百名山』がテレビ放映で話題となり、「第二次登山ブーム」の引き金を引きます。しかし登山人口は 800 万人前後を推移し、1,000 万人を越えて熱かった第一次登山ブームに比べると、静かな第二次登山ブームといえます。

18 世紀半ばから 19 世紀にかけて興った「**産業革命**」は、人間の労働を機械化することにより、重・厚・長・大な工業生産物を生み出し、併せて同一規格を大量生産することにより、文明の標準化とともに消費の平準化をもたらせ、人類の生活様式を一変させました。しかしその結末は地球環境を破壊することに気づき、軽・薄・短・小で高効率・省エネルギーな大量工業生産物へとシフトし、人間労働を疎外していきます。安価で同じ商品が大量に充満すると、人々は差別化を求めるようになります。少量多品種へとシフトし、多様な工業製品へと変化していきます。

高度経済成長時代に規格を定めて大量生産した「**モダン**(近代的)」を反省し、1970 年頃から登場する「**ポストモダン**」思想は、1990 年代に至ると薄れてきます。ポストモダンの代表的思想家＝ジル・ドゥルーズは新たな社会像として、「**自由な管**

**理社会**」を思い描きます。一方で、コンピュータが発明されたのは1936年。インターネットが発明されたのは1969年。小型化されてパーソナル・コンピュータ(PC)と呼ばれ、個人所有が容易となります。PCを動作させるOS(Operating System)、ウィンドウズ95(1995年)の出現により、操作が容易となりました。これまでの筆記とノートに代わり、PCによる電子データの作成、蓄積、複製(コピー)は、他者との間で情報の共有化が容易となります。インターネットのウェブサイト(World Wide Web = www)は、1995年以降飛躍的に増大し、今や個人でさえ複数のウェブサイトを確保できるようになっています。

このような情報化社会の到来は、従来の「**境界**」によって遮断された物質的概念を一掃してしまいます。新たに登場した**電子情報**は、国境や責任、自由意志なる個など、これまでの物質的バリエーションであった隔壁膜を用意に通じ抜け、世界へ、空間へと拡散します。あらゆる情報は複雑に連携し合い、新たにウェブ上の**公共通信概念**が求められてきます。そのような社会イメージを、鈴木健は「**なめらかな社会とその敵**(勁草書房、2013年)」として著します。1990年以後の「**電子化社会**」は、18世紀半ばに興った「**産業革命**」以来の大転換となりました。その特徴は「**重・厚・長・大**」から、「**軽・薄・短・小**」への転換と指摘できます。登山においても重厚長大な**極地法**から、軽薄短小な**速攻型**へと切り替わり、さらなる**スポーツ化**の到来により、第二次登山ブームを招来します。

「**日本百名山**」は江戸時代後期の太平な世の中で流行った「**講**(富士講、大山講等々)」に似ており、巡礼要素あり、収集要素あり、記録ホルダー要素あり、観光要素あり、もちろん健康のためには最大要素となります。その行動の特徴として、男子は単独行者が多くなり、女子はグループ行動が多くなります。グループを引率するリーダーや支援者は、企画から実施、アフターフォローを含め、「**より楽しく、より安全に、より安く**」を図る「**登山産業構造**」を形成していきます。「**より高く、より困難**」を求めたアルピニズムの、対極に位置づけられます。

アルピニズムは山岳自然を通して自己確認、自己統合を図る「**非日常性**」への作用でありましたが、百名山指向は社会生活を延長させた「**日常性**」の中で、普通とは「**少しだけ異なる**」山岳自然環境へ立ち入ることへの気分転換に喜びを見

い出す作用となります。後者の喜びは、岩山三郎が『**美の哲学**（創元社、1966）』に書いた、次なる真理が当てはまります。

「人間は平均より少し抜け出したものを賞美する（同書、P-87）」・・・と。

つまり大きくかけ離れた存在には危険や醜さを感じ、平均の中では差別化の優位に立てず、「**少しだけ抜け出す**」ことにより、世俗の中で優越心や優美さを感じることができる、という真理です。群れ社会であるほどにその傾向は強まり、自立社会であるほどにその傾向は弱まります。一方、群れ社会に収まりきれないアルピニストの情熱と行為は、その成果をもって群れ社会からあがめられる「**ヒーローやスーパースター**」となることもできます。

第一次登山ブームにあっては戦後社会の混乱の中、登山生態の平均像はなく、何でもありな**自由な気風**がありました。その中でスーパースターが出現し、それに憧れてさらなる進化を図る、ヒーローと群れの相乗効果がありました。

しかし成長社会が一段落すると、社会は平準化へと向かいます。マニュアルやカタログが整備されます。「**百名山登山**」も多様なマニュアル、カタログの下に集い、登山の「**自主・自立、自己責任、自己負担**」という**自由意志による行動原理**や、美的概念が薄れた「**群の行動生態**」となってきます。

これらの傾向を指し、批評を得意とするジャーナリスト本多勝一は、【**メダカ社会の共鳴現象**（『「日本百名山」と日本人』2006年、株式会社金曜日）】と表現し、その心情分析を神経伝達物質「**セロトニン**」のトランスポーター遺伝子に着目します。セロトニン・トランスポーター遺伝子が少ない「**S型**」は日本人の**97%**といわれ、トランスポーター遺伝子が多い「**L型**」はたった**3%**と、世界で最も少ないそうです。セロトニンは、ドーパミン（快感をつかさどり、学習・運動・記憶等のヤル気を刺激する）と、ノルアドレナリン（交感神経を刺激して心身を覚醒させる意欲の源泉～ストレスに反応して不安、恐怖、怒り等により生存本能に作用）の分泌を調整し、精神を安定させる働きがあります。

つまり「**SS型**」トランスポーター遺伝子が多い日本人の大多数は、不安を感じやすく、群がることによって不安を取り除く（忘れる）ことを揶揄して、本多氏は「**メダカ社会**」と表現します。セロトニン・トランスポーター遺伝子が最も多い「**LL型**」は、個人の意思にもとづく**自主・自立・自己責任・自己負担**という、「**自由の行動原理**」

をとります。「LL 型」が少ない日本人は、「メダカ社会」のように群がることを得意とします。「行動原理」を唱える 3%のリーダーに従って、行列を得意とするメダカ社会は追従します。しかしこの理解は傾向としての把握(アバウト)であり、血液型分析から見直す統計によれば、「居直った A 型が最強」、という説もあります。セロトニン・トランスポーター遺伝子の染色体番号 17 番に刻み込まれた DNA によって決定されるだけでなく、環境によっては特性も変化するといわれる由縁です。

江戸末期の「講」や今日的「百名山登山」は、宗教的巡礼と異なる「メダカ社会現象(ブーム)」と理解することができ、なにも登山に限らない、伝統的日本人文化の主要な特性を示しているともいえます。

そのような状況下にあつて、2006 年～2008 年にかけての登山人口は、600 万人を下回ります。そして 2009 年には突如 1,200 万人を超え、第三次登山ブームへと入っていきます。

### (3) 第三次登山ブーム ～ 現在

#### 多様化の時代 (軽・薄・短・小)

2008 年 は北京オリンピックが開かれ(8月)、リーマンショックに見舞われ(9月)ます。国内では iPhone が発売され(7月)、ファッション性を重視した多様な機能性タイツやストッキングが販売されます。

2009 年 は第 45 回衆議院総選挙で、自民党から民主党への政権交代がおこなわれます(9月)。NHK-BSプレミアムは、鮮明でより美しくなったデジタル画像により「につぼん百名山」の放映を始めます(7月)。

戦後 60 年が過ぎ、平成生まれの戦後第三世代となる若者が成人を迎えます。その若者たちは「新人類」とも呼ばれるように、昭和世代と大きく異なる意識と感性を携えた、「山ガール」、「山ボーイ」の誕生です。併せて「山スカート」が登場し、古き山ヤを驚かせます。アウトドアメーカーは独自のファッション・ブランドを付し、若者たちをはやし立て、かつ取り込みを図ります。草食系男子、肉食系女子、という言葉に表されるよう、第一次登山ブームでは極めて少数派だった女性登山者が、第三次登山ブームの主役の座を交代します。

それとは別な戦後生まれ「**団塊の世代**」が定年退職を迎え、仕事から解放された余暇の過ごし方として山に向かいます。「**山ジーヤ**」、「**山バーヤ**」と表現したくなるほど若者ファッションを取り込みます。そして日本の山には、老若男女が多様なファッションと、多様な登山スタイルにより、同じ山、同じコースに入り混ります。しかし多様と表現しても、本研究で分類する大枠の登山スタイル(登山生態)から外れるものでなく、この枠の中での小さな差異の多様化と、選択の自由さであり、大枠では「**メダカの行列社会**」を抜け出すものではありません。

登山の基礎を学ぶ場がなく、自主、自立できない多くの登山者は、パンフレットに導かれて「**ツアー登山**」に参加します。今やエベレストでさえもツアー登山の対象となり、低山から高山に至るまで、はたまた国内から外国の山々まで、多様な企画登山がパンフレットに用意されています。老若男女それなりに対価を支払えば、それに見合った山岳自然に分け入ることができ、それなりの動機を満たす登山に参加することができます。しかしそれらは第一次ブームまでに残されていた「**未知への探求、開拓、踏査**」という、「**個体におけるパイオニアワーク**」さえも失い、明らかな「**登山の変質**」を招いています。つまり、非日常環境だった山岳自然の中に、それに分け入るリスク対処を金銭対価と交換し、日常生活意識によって、山岳自然環境を日常化社会の周縁世界として組み込んでしまった、のです。つまり、社会的パイオニアワークも、個体的パイオニアワークも、死生観を介在する弁証法的アルピニズム、いわゆる「登山の本質」は失われてしまいました。

第一次登山ブームの頃までは、衣・食・住の全てを背負って山を登りました。しかし第二次登山ブーム以降は山小屋が充実し、衣類は自前で背負うとしても、主食とテントは背負わなくても済むようになりました。パンフレットのツアー登山は、そのように整備された山のコースへ多様なコンテンツを示し、登山客はその中から好みと資金によって選択します。

第一次登山ブームまでの登山者は、計画から帰宅までの全てを登山者自らがとりまとめ、その途上の不安やエスケープ・ルートの設定まで、全ての登山行為と責任を背負っていました。山岳自然に分け入る登山は「非日常世界」として、「日常生活」と切り分けた「一定の覚悟」がありました。日常と非日常の切り分け、そ

の落差に精神のリフレッシュや遊びの本質が潜んでいるからです。現代登山は日常生活の延長に山岳自然を置き、心構えを切り替えるまでもなく、「何の覚悟もなく」、山岳へと入って行けます。そして行き詰ったところで無線端末器によりSOSを発信し、警察、消防、地元関係者を動員させ、救助されます。その様子は逐一、マスコミやインターネットで流れます。行政機構においても生命尊重の立場から無差別に、日常社会活動を山岳領域にまで延長します。そのような現状をみると、死を介在させた登山者の弁証法的精神の葛藤はなく、人間として生きることへの深い相克も見当たりません。戦中、戦争直後の登山者からは、現代登山が「軽・薄・短・小」で刹那的(デジタル思考)に写ります。それらの人々に、アルピニズムの弁証法を語ったところで、もはや情動のエネルギーとなる感動を呼び起こすことは無理なことなのでしょう。もはや、「アルピニズムは死んだ」を実感します。

そして後に「登山は真のスポーツに生まれ変わる」と識者は指摘しますが、この見解は人類社会としての定方向進化に価値を求める立場からと理解します。現代を生き続けているホモ・サピエンス(Homo sapiens=賢い人)の定方向進化において、登山生態の変化はそうあるのでしょうか。しかし個体としてのホモ・ルーデンス(Homo ludens=遊戯する人)にとり、「個体におけるパイオニアワーク」は生命の誕生と成長と死によって一つのサイクルを完結します。そして次なる生命の誕生と成長をつなげるにより、次のサイクル「また新たな個体のパイオニアワーク」がスタートします。この個体サイクルの繰り返しは交流波のように、幾世代をも継続することによって持続します。「登山を個体の本質的遊戯性」に位置づけるとすれば、ホモ・ルーデンスの本能的生存欲求の発露と理解することができます。1953年にエベレストが初登頂されたのちの登山が、「社会的パイオニアワークから個体におけるパイオニアワークへと変質する」ことの指摘を、私は1968年発行のコンテニアスクラブ会報第8号に「山は生きている」と書きました。その考えは、半世紀過ぎた今も同じです。遊戯性は何もスポーツやギャンブルばかりでなく、知的探索等も当然含まれます。

今年(2016年)からは8月11日が「山の日」として、祭日が施行されます。これを契機に、「多様な登山の生態経験が、個の人生を豊かに育んでくれる」ことの理解を、若き世代に伝われば良いと願うばかりです。

## 2 章 . 登山分類の基礎事項

宇宙で生じている諸事象を理解するためには、また、その一種である地球の人間行動を理解するためには、宇宙における複雑な相関関係を、人間がどのように意識し、理解し、創発、分岐していくか・・・、また、進化の**必然**がもたらせる連続的時間経過の中で、**偶然**のイレギュラーなノイズ的“ゆらぎ”事象をどのように生じさせているか・・・、さらに、長い時間軸上の未来を特定できないことに対し、**不確定性原理**をもってどこまで予測できるか、等々、系の内部から系の全体を理解しようとする論理には、方法論的自己矛盾(限界)があります。しかし人間の抽象力と意識は無限をも対象化することができ、物質の変容原理を知ることにより、内部にあっても総体を論じて統合思考できる、特別な創発能力を備えているように思われます。

宇宙はさらなる膨張を続ける、**開放系**にあるとされます。その開放系の宇宙の片隅に属する人間世界は、おおむねにおいて、地球環境という**閉鎖系**の中にあります。そして人間生命体の物質の中に、非物質的存在として刷り込まれる「**意識や心**」は、地球環境の閉鎖系次元と異なり、無限を対象化できる「**開放系**」にあるのではないかと考えられます。人の**意識や心**は、事象を確認・認識できる**有限性**とともに、意識から創発する**空間的・時限的・無限性**をも備え、宇宙進化の開放進行系な時間軸を任意に往来し、無限ささえも概念化できる特殊な能力を備えているといえます。宇宙進化と現在の私たち(ホモ・サピエンス)との関わり時間は、以下のように地球創世 137 億年の内、わずか 20 万年といわれています。

- ・ 137 億年前                    **宇宙の誕生**(ビッグバン)
- ・ 45 億 6,700 万年前        **太陽系・地球の誕生**
- ・ 35 億年前                    **原核生物の出現**(最古の生物化石)
- ・ 700 万年前                  **人類の誕生**(サヘラントロプス・チャデンシス)
- ・ 20 万年前                    **ホモ・サピエンスの登場**(現生人類<ヒト>の起源)

「人類」は、無秩序で、不可逆的膨張を続ける開放系宇宙の中で、その片隅の部分となる地球に住まう「生物(人類)の系」として、おおむねにおいて閉鎖系とみなすことができます。 おおむねとしたわけは、太陽エネルギーを受けて生命活動が持続できるように、宇宙物理の系にあっては、太陽系の、さらなる惑星としての物理的な開放系もあるからです。生命現象を種の循環からとらえると閉鎖系になりますが、生命体を物質面からとらえると、細胞は常に代謝によって交代を繰り返す開放系に当たります。つまり「生物(人類)の系」は、生命現象という種の閉鎖系と、生命体の物質代謝による開放系があり、人類は常に二重な系統規範に従っていることとなります。そのことは「光」の説明と類似します。「光」には粒子的性質と波動的性質が同時に存在する二重系統規範として、シュレディンガー方程式を経た量子力学によって理解をされてきました。閉鎖系にある生命現象は、無秩序から秩序へと、偶然を含む自己組織化の不可逆性の中で、エントロピーの増大を系の外部へと放出してきました。しかし現生人類社会は、肥大化したエントロピーを系外放出によって調整しきれずに、環境諸問題を発生させます。人社会にとってはエントロピー減少に向け、真剣に対処しなければならない時節です。

世界は目の前に見える短期的、刹那的な「真」からの理解だけでなく、長期的な宇宙時間軸からも、目に見えない不可視な次元からも、理解する時代といえます。目の前に見える「真」を証明する科学的方法には、帰納法と演繹法があります。しかしそれらの「真」から創発する新たな「真」は、宇宙の時間軸と現生人類の時間軸を比べてみても、人類の存在は宇宙誕生からたかだか 10 万分の 1.5 程度  $[(20/137) \times 10^{-4} = 1.46 \times 10^{-5}]$  と、極めて短期間な宇宙観察でしかありません。人類が知り得た知識は、その程度のものであり、まだまだ知らない未知なる宇宙の「真」は、限りなく無限といえそうな領域であると考えられます。さらに人類という生物は、宇宙の時間軸からみれば、その未来は「絶滅危惧種」であるともいえましよう。

2015 年 8 月、国連発表の世界人口予測では、2015 年=73 億人、2100 年=112 億人と予測されています。人類が知り得た宇宙の「真」の知識を、さらに 73 億分の一となる「個」から推論することが、どれほど宇宙の些細なことであるか、絶望さえ覚えます。しかしまた、そのような些細な「個」から宇宙を語ろうとするヒトの意

識の根源は、限りなく無限をも思考の対象とします。無限領域までを組み込める「ヒトの意識」は、古来「神」を創発しました。そして『神は死んだ』、とニーチェが言い、次に「科学」は万能と思い込みました。しかし目に見える「真」を相手とした「科学」にも限界があることを知ると、さらなる次には目に見えない「虚構な世界(バーチャル・リアリティ)」を組み込んだ「複素的世界」を思い描きます。

無限を意識できる「ヒトの心」は、それ自身において神ではなく、「小宇宙」ではないかと考えることもできます。ヒトの数ほど「小宇宙」はあり、その「小宇宙の存在」こそが「多様な存在」と理解できるのです。多様な小宇宙が、同期・同調し合う時、その相関は「愛」と呼ばれる負のエントロピー(ネグントロピー)を増大させます。つまり小宇宙一個の存在は極めて不安定な状態にありつつ、多様な小宇宙のいずれかと同期・同調し、カップリングによる対称性を得て安定な存在を確保します。例えばヒトの男女が織り成す「夫婦」というカップリングの相補的対称構造により、ヒトの小宇宙における最小単位な安定性を保つことができると考えられます。生物学的雌雄夫婦の理解とは異なり、物理学的理解による夫婦像であり、同期・同調で結合する「愛」のネグントロピー(負のエントロピー)は、閉鎖系内部の結合をより安定なものとし、つまりネグントロピー(負のエントロピー)増大とは、次なるエネルギー様態への変移に役立つエネルギーを増すことであり、ヒト科に当てはめてみれば、「子孫を残して種を持続する」ことの例を意味します。物質の消費はエントロピーを増大させますが、ヒト科の愛はネグントロピーを増大させるといえます。

一見、「登山」とは何の関わりもなさそうですが、高峰の頂きをめざす登山者は「神」を感じる<sup>いつとき</sup>一時があり、山頂から見下ろす現実世界の視点には、「複素的感性」が育まれます。そして登山の成功は、「科学的手段」により合理的に成されます。神や科学や複素的感性が意識に宿す登山とは、人間存在を宇宙的視野から再確認できる、「総合人間学」のフィールドでもあります。

宇宙や地球の複雑な諸現象の相関関係をとらえる中から、どのような普遍性、共通な性質・生態を取り出して整理・位置付け(帰納法)、新たな概念を構成、構造化できるか(演繹法)、科学的手法とともに「人間の生と死の意識に係る相関」も、弁証法的に考察することができます。帰納法から得る普遍性、つまり共通な形質や生

態を要因とし、**演繹法**によりさらなる論理化の**創発**(ひらめき)を図り、**弁証法**によって論理的眞理性を高めるという方法です。 そのことにより、登山の生態を整理し、「**山岳自然と人間の関わり方**」を、登山を通して考えてみることにします。

**創発** (emergence) = 局所的複数の相互作用が複雑に組織化することで、個別の要素の振舞いからは予測できないようなシステムが構成される。

**エントロピー** (entropy) = 熱力学、統計力学、情報理論における「乱雑さ」の度合いを表す物理量。

- ・等温可逆的な変化で、ある物質系が熱量を吸収したとき、エントロピーの増加は吸収熱量を温度で割った値に等しくなる。
- ・熱の出入りがない系(閉じた系)では、熱力学の第二法則により、内部変化は常にエントロピーが増大する方向に起こる。  
(閉じた系において秩序は崩壊していき、平衡となり秩序は消え、乱雑になる)  
(秩序を維持するためには、系の外部から何らかの仕事や作用が必要)
- ・生命が系として孤立していると、エントロピーは限りなく増大する。  
(老化現象であり、エントロピーが減少する若返りは不可能)
- ・情報量は確率変数を多くまじえるほどに情報の乱雑さを増す。  
(その情報によって選択肢が拡散したり、考慮すべき要素が増すような、わからなさ、選択の自由、不確定さの度合い等が増すことを、「情報エントロピーが増大する」、という。つまり、「確かな情報量が減る」ことを意味する)

**ネゲントロピー** (negentropy) = 負のエントロピーともいわれる。

- ・エントロピー増大の法則に逆らうように、エントロピーの低い状態が保たれていることを指す。  
(生命は環境の中に開かれた系として、呼吸や代謝により、環境へエントロピーを排出することで低い状態を保つ)
- ・エントロピーを減少させる物理量

## 1節. 多様性と一様性

地球上の生物の特徴を分ける言葉に、「多様性と一様性」があります。

「多様性とは、幅広く性質の異なる群が存在すること」とされますが、この定義は生物学に適用される概念であり、他の自然科学、社会科学、人文科学にそのまま該当するわけではありません。

問題点は「群」としたことへの扱い方です。「群」を単なる「生物種」の集合体として理解するだけでなく、各分野を構成する「分類単位」と置き換えれば、生物学以外へも適用できるのではないかと考えられます。言い換えると、「多様性とは、幅広く性質・形態の異なる分類単位(群)が多数存在すること」、となります。

自然科学から発した「多様性」の概念は、「生物多様性」、「種多様性」、「遺伝的多様性」という生物の生命現象にともなうものや、「ジオ(土地、地球)多様性」という複雑に連系する自然の様態的存在も対象としています。

一方、社会科学や人文科学の面においては、「民族多様性」、「文化多様性」、「地域多様性」、「国民多様性」、「価値の多様性」等々、人類の在り方や人の心の複雑な現象をとらえます。

このような「多様性の分類」とは「差異の境界設定」でもあり、「数えることができる物量の差(量的)と、数えることができない性質・特性・様態等の形質の差(質的)」によって、「境界を特定して差別化する」ことにほかなりません。

この概念を「登山」に応用してみると、「登山の生態多様性」となります。さらに現代の多様な「登山」と「山岳スポーツ」を分離して考えてみると、巻頭の付表【別表-1-1】、【別表-1-2】の「現代登山と山岳スポーツ等の生態分類表」となります。そして「登山の生態」における「分類単位(種)」は「登山の生態的種別」が該当し、付表の区分に整理できます。つまり、「登山の生態多様性とは、生態の異なる各種登山群が幅広く存在する」、となります。また、登山と山岳スポーツ等の違いと分離については、第6章にて述べます。

「登山群」を構成する「単位種別」は、各々の「種」に属する「個」の生態(性質・形態)に類似性があり、その類似する生態(性質・形態)に差異を持つ「別な種」

が多数存在する様態を、「登山の多様性」とします。簡単にいえば、「登山種の異なった生態群が多数ある」ことが、「登山の多様性」といえます。

一方で、同類かつ同質な「属性」で括った一つの「種」は、その「属性」をもって「一様性」と理解できます。

「一様性」を哲学的に述べると、『これ以上分解できない精神的実体として、「モナド（広がりや姿形もなく、分割不可能で単純な精神的実体＝個体の個性）」の個性性における他のモナドとの類似性』となります。易しく述べれば、『ある種の登山生態で括られる属性の登山者群の類似性』をもって、登山種の「一様性」となります。

## 2節. 種の位置づけ

「種」とは生物の基本単位とされ、2004年における命名済の「種」だけでも200万種あり、実際はその十数倍以上もあるといわれています。

「種の定義」は、生物学を研究する専門家の間において、生物集団のとらえ方、研究者による分類群・研究目的等によって異なり、全ての生物分類に適用可能な「種」の概念は存在しないとされています。

「種」の概念を把握するにあたって、個体と群の関係には、以下のような把握の違いによって区別されます。

- 1) 形態的概念 … 形態による区別
- 2) 生物学的概念 … 群が自然条件の下で交配し子孫を残すことによる区別
- 3) 生態学的概念 … 生息地域や行動範囲から交配可能な地域による区別
- 4) 地理学的概念 … 地理学的に隔離されている場合は「別種」とする
- 5) 進化学的概念 … 進化にともなう単一系統に属することによる区別
- 6) 時間的概念 … 誕生と終焉(絶滅)による区別

「現代登山と山岳スポーツ等の生態分類」をおこなうに当たり、種別の「種とは＝個体が選択したその時の山岳行動生態」として、前記6項目の概念とは異なり

ます。山岳において、その時々を選択実行した行動生態を分類単位とします。同一人物であっても、その時々に行動様態を選択するのであり、その人物を特定の種別と定めて分類・位置づけるものではありません。一人の人物が特定な生態行動しかとれないのではなく、その時々に応じて多様な登山生態の中から一つを選択し、行動に移すという理解です。

生物学的種の分類概念を応用してみると、登山と山岳スポーツ等の生態分類は次ような分け方が考えられます。

- 1) 形態的差異 …… 行動形態の種別概念の整理と分類
- 2) 動機的差異 …… 生物学的個体別動機概念の整理と分類
- 3) 社会現象的差異 …… 群がる社会現象行動概念の整理と分類
- 4) 地域的差異 …… 山岳地域特性に応じる行動概念の整理と分類
- 5) 進化的差異 …… 種別における適応・進化的概念の整理と分類
- 6) 歴史的差異 …… 人類の文明史、文化史に照らした人類行動概念の整理と分類

「現代登山と山岳スポーツ等の生態分類表」においては、時限要素のない 1) ～ 4) までを対象とします。時限要因を含む 5) と 6) は、3 章以降の内容となり、別図の表現と説明が必要になります。そのことは種の属性を超えて群や界や相となり、「登山」から「山岳スポーツ」へと群れの分岐を生み出して、「登山とは別な世界」を構築することになります。

### 3節. 旧来の分類例

1970 年代初期において、「登山者性向の分類」研究がおこなわれていました。東京教育大学(現=筑波大学)の体育心理研究において、小林晃夫・小川新吉氏による「内田・クレッペリン精神検査」から、登山の目的分類別と登山者の性向類型化がおこなわれました。次頁【表一1】に示す 10 分類、5 類型の表に整理され、

その結果を第2次 RCC 編集による『現代アルピニズム講座Ⅰ』の中に、「本邦アルピニストの心理と性格」として収録されています。

【表—1】 【本邦アルピニストの心理と性格】 小林晃夫、小川新吉

目的分類 類 型		(Ⅰ)	(Ⅱ)	(Ⅲ)	(Ⅳ)	(Ⅴ)
		精神修養型	未知探求型	自然沈潜型	余暇利用型	身体鍛錬型
		23名	18名	12名	4名	5名
1	自然の美、神秘、静けさ、清潔さを求めて	15	13	8	3	
2	未知の世界の探求、冒険の欲求	5	25			
3	人間形成、精神修養の場として、克己心、忍耐力、責任感、豊かな情操等々を養う、自己との闘い	35	6			
4	仲間との関係	5	8			
5	心身鍛錬	3	5			3
6	体力づくり、健康増進	2	2		2	
7	スポーツ	1	2			3
8	意義や目的などない、登りたいから登る、何となく			8		
9	宗教的意味	5				
10	レクリエーション	1	1		5	

【内田・クレPPERIN精神検査】

数字を隣り合わせに加算し、1分間継続する作業を通し、時間的作業量の変化の中から性格の特徴を分類する。加えてアンケートによる意識調査を併用し、「分裂性格」、「躁鬱性格」の大分類から、目的別に10種類に整理したもの。

社会学者・見田宗介 東京大学名誉教授は若き頃、真木悠介のペンネームで『人間開放の理論のために』（筑摩書房、1971）を出版されました。

【表—2】

【人間的欲求の構造】

真木悠介

		必要 requisite 欲求の客観的基盤 (絶対要件・完結可能)	要求 need-disposition 欲求の一般の傾向性 (相対要件・無限展開)	欲望 desire 欲求の特定の方向性 (自由による選択可能)	
		客観的・原決定		主體的・自己決定	
即自欲求	「生理的」欲求 〈存在〉の位相	外界との新陳代謝 (飲食・排泄・呼吸)	より豊富・快適な生活諸 条件への要求	特定の文明化された対象 (食物・衣裳・住宅・施設および異性)への選好 〔「文明的」欲求〕	
		否定的諸条件の回避 (危害・熱冷・etc)			
		種族の再生産 (生殖)	性的要求 (生殖自体から自立)		
	「社会的」欲求	稀少性 ↓ 相剋性 への 主体の 対応	他者の 欲求への 拮抗	物的資源・手段の占有 〔所有欲求〕	特定の所有対象(財)への 選択的関心
		派生体Ⅰ 条件的派生体	他者の 欲求への 適応	他者への支配力の獲得 〔権力欲求〕	特定の社会的地位への選 択的関心
			派生的な 必要性	他者の欲求の内面化 〔「道徳的」欲求〕	特定の道徳律の選択
	「文化的」欲求	派生体Ⅱ 自己条件的派生体	人間的諸能力 の自立的展開 と享受	身体的諸能力の自立展開 (活動欲求)	身体的なあそび →〔スポーツ〕(各種目)
				感覚的諸能力の自立展開 (美的欲求)	感覚的なあそび →〔芸術〕(各ジャンル)
				認識的諸能力の自立展開 (知的欲求)	知的なあそび →〔学問〕(各分野)
				統括的意志能力の自立展開 主体性欲求 { 自由の要求 根拠の要求	特定の制約からの自由 諸々の〔思想(宗教・哲学)〕
対自欲求	「実存的」欲求 〈対自〉の位相	対存在としての存在要件	〈存在〉との関係における対自 〔労働〕	〈存在〉を媒介とする肯定的自己確認 →〔創造〕の要求	特定の対象・様式における創造の選択
			〈他者〉との関係における対自 〔交流〕	〈他者〉を媒介とする肯定的自己確認 →〔愛〕の要求	特定の対象・様式における愛の選択
			〈自己〉との関係における対自 〔自己意識〕	自己自身を媒介とする肯定的自己確認 →〔統合〕の要求	特定の自己統合軸 =〔生き甲斐〕の選択

その書の中、「統括的な体系の提示 — 人間的欲求の層位と位相」を標題として、  
前頁の【表—2】「人間的欲求の構造」を示されました。

【表—3】

【登山者資質の構造】

(田中文夫 1973)

必 要		要 求	欲 望	類 型	記号	目 的 分 類	呼 称	
即 自 欲 求 ・ 登 山 者	人 間 的 諸 能 力 の 自 立 展 開 ・ 文 化 的 欲 求	認知的	認知的諸能力 の自立展開 (知的欲求)	学 問 (知的 あそび)	Ⅱ 未知探求	①	知的冒険(知的認識) ～学習	学問
							体験的冒険(身体的認識) ～知覚	探検
		審美的	感覚的諸能力 の自立展開 (美的欲求)	芸 術 (感覚的 あそび)	Ⅲ 自然沈潜  Ⅳ 余暇利用	②	(主客分離) 美の観賞 (主客分離) 自我の確立	観光、感覚 レジャー
							美への同化(一体化)	観光
		思索的	総括的意志能 力の自立展開 (主体性欲求)	思 想 (特定制約 からの自由 「生と死」)	Ⅰ 精神修養  Ⅲ 自然沈潜	③	自然法則支配の無視～抵抗 (自然疎外) アルピニズム～修養	アルピニスト
				自然法則支配への没入 ～自己の無視(自己疎外)	宗教			
				一時の限られた虚構～創作(思索) 自然観察～自己確認(意志)	文学、詩 哲学、思想			
	スポーツ	身体的諸能力 の自立展開 (活動欲求)	スポーツ (身体的 あそび)	Ⅴ 身体鍛練	④	自然との力比べ (自己解放の感覚)(空間) 身体能力の段階的向上 (時間) 生体(健康)の維持(感覚) ～楽しさ	スポーツ レジャースポーツ	
対 自 欲 求 ・ 登 山 家	実 存 的 欲 求	存在 労働	存在を 媒介とした 肯定的自己確認 (創造)	創造の 選択		美の創造 (自己の物質的表現) 状況(様式の美的表現)	芸術様式 文芸様式 登山様式 労働様式	
		他者 交流	他者を 媒介とする 肯定的自己確認 (愛)	愛の 選択		愛の創造(仲間との関係) 他者媒介～自己愛 目的(自己自身との関係) 自己媒介～自己愛(意味)	ガイド業 パーティ登山 (組織登山)	
		自己 自己意識	自己自身を 媒介とする 肯定的自己確認 (統合)	生き甲斐 の選択		生の創造 (生き甲斐として 空間、時間、物質的实践) 実践	登山家、芸術家 文芸家、学者 宗教家 スポーツマン	

その頃私は、本著 1 章で取り上げましたように、【**登山の社会的背景～登山学確立へのアプローチ**】(山岳展望第 14 号、1970)の小論を、山岳同人雑誌に発表した後でした。登山者性向を学術的に体系だって考える根拠として、見田先生(真木悠介)の「**人間の欲求の構造**」をベースにすえ、前頁【**表—3**】「**登山者資質の構造**」として整理し、「**山登り—その社会学的研究と応用**」(発表=青春のヒマラヤに学ぶ、文芸社、2001)を書き始めたのが 1973 年でした。そして途上の手書き小論コピーを見田先生(真木悠介)に送り、以下のような返信ハガキをいただきます。

『山登りは人間的な実践の原型のようなところがあると思うのですが、そのような行動の中で、原理的な問題を考えておられる方に、小著がふれることができるということは、じつに愉快です。』(真木悠介、1973 : ハガキ保管)

その後私は 1974 年プレ・モンスーン期のネパール・ヒマラヤ「**P29南西壁登山**」を実践する中で、「**山登り—その社会学的研究と応用**」は断筆となります。それから 40 余年後の今、十分なる時を得て、今ふたたび論考を重ねているところです。

改めて、前頁【**表—3**】「**登山者資質の構造**」を見直してみますと、この類型から現代登山の多様な生態分類はできません。しかし、あながち的外れでもありません。それゆえに巻頭に付した【**別表—1—1**】、【**別表—1—2**】、「**現代登山と山岳スポーツ等の生態分類表**」において、「**大分類**」、「**中分類**」の特性分類に反映してみました。それに続く「**小分類**」で、実態に即した生態「**種別**」分類をつなげることにより、人間行動の**欲求**(心)と表現**形態**(体)を一連なものとして、「**生態**(体+心=複素的)」として整理できたのではないかと思います。

本表は**定性的**(質的)**整理**位置づけであり、実際の行動調査等による**量的整理**(統計ランキング等)位置づけではありません。強いて**上下序列化の基準**を述べれば、「**死の可能性が大きいか、少ないか。さらに死の可能性を排除する**」、という**定性的分類に含まれる、量的序列化の概念**を示しておくことにとどめます。

さらに行動調査等をふまえた量的研究のために、本論がそのベースになれることを期待するものでもあります。

## 3 章 . 登山の生態分類

### 1節. 方法論

「生態学 (ecology)」は、生物と環境との相互作用を扱う学問とされています。

生物＝人、環境＝山岳、相互作用＝登山、と特定してみれば、「登山の生態(学)」という概念は成り立ちます。「登山 (mountaineering)」は、人 (生物) と 山 (山岳環境) との相互作用であることから、登山行為は人間(生物)生態の一種といえます。その人(登山者)がどのような動機により、どのような相互作用を山と交わり、どのような結果をもたらせるか、を標記するのが「登山生態(学)」となります。

「分類学 (taxonomy)」は、生物を分類することを目的とした学問で、生物を種々の特徴により分類し、体系的にまとめ、生物の多様性を理解する学問とされます。それら分類の基本単位は「種」であり、種の固有な特徴を「属」あるいは「科」と呼んでグルーピングをおこない、特定したグループを「群」として、分類群を類型化します。「登山とは＝死の危険が潜む山岳自然環境の中で山を登ること」と定義すると、山岳自然に相互作用する多様な山の登り方、つまり「多様な登山種別」が存在し、多様な「登山分類(相関関係)」をおこなうことができます。それらの類似する生態を分類し、類型化して整理するのが「登山分類(学)」となります。

そこで「登山生態(学)」と「登山分類(学)」を統合した「登山の生態分類(学)」の着想が生まれます。生態分類学という学問分野はありませんが、既存学問分野で確認できるのは、進化分類学、植物分類学、分子分類学、表形分類学、系統分類学、等々となります。「生態学」の下位層において分類仕分けが含まれているとすれば、あえて「生態分類(学)」とする必要がないのかもしれませんが。

あえて(学)とした理由は、① これまでの学問分野にない視野から取り組んでいること、② 論者の専門分野が電気設計技術者であり、学問を本業としていなかったことによる学問的セオリーを逸脱する論者となること、に由来します。つまり、認知された学問分野でないことを意味します。

さらに、「生態」が相互作用を取り扱うならば、その作用は目に見える物質的(身体的形象)な面と、目に見えない精神的な面が組み合わせられた、つまり「複素的な作用」ととらえることが、本論独自の展開方法論であります。

そもそも「登山」は生物活動(人間行動)の属性(登山)ですから、人間行動分類学で整理すべきでしょうが、その分野ありません。代わりに生態学の中に、行動生態学(behavioral ecology)、人間生態学(human ecology)、生態人類学(ecological anthropology)等々がありますが、いずれも生態学の下位分野として分岐された位置付けとなります。登山は山に登ることであり、そのフィールドは山岳に特定されることから、特定領域における人間行動として把握することができます。また「高みへと登りたい」人間行動は、人類発祥からの生存欲求本能でありました。その目的は時代(文明・文化)とともに変遷し、現代では「趣味とスポーツ」が主体となっています。しかし登山に含まれる「総合人間力」は、学問的知性・理性だけでなく、感性や直感、体験や体感といった、従来の学問で説明しきれない主観要素が多くあります。それゆえに、「登山生態学」という呼称も考えられますが、本論は既存の学問枠をはみ出した正統学問ではない学際的統合考察として、「登山の生態分類(学)」としたものです。

登山の様々な事象を捉え、調査、理解、整理、表現する作業は、「科学的」といわれる手法になります。科学の手法は、「帰納法」と「演繹法」に係りますが、人間行動をつかさどる心理変化は、「弁証法」という思考法に係ってきます。

かつては「進化論」による「環境の下での適者繁栄、存続」が考えられました。現代知性はそれらの連鎖、連系が複雑であることから、「複雑系」として解釈、理解するようになり、今や 21 世紀の科学を考える基礎として、「複雑系の哲学」が上程されています。

これまでニュートンの古典力学から、アインシュタインの相対性理論に至るまでの決定論的考え方は、原因と結果の線形な必然性をあらわす「因果応報」となり、宗教的教えにも通じていました。しかし現代はこの決定論からだけでなく、現代物理学のもう一つの理論、量子力学による新たな解釈と説明、「確率的偶然による決

定」が加えられます。その基礎となる「不確定性原理」は、原因と結果は確率的頻度において把握できるのであって、線形な「必然」ばかりでなく、量子の“ゆらぎ”による非線形な「偶然」の事象も起こり得ることを説明します。

さらに物質集合の新たな解釈「自己組織化理論」により、システム内部の“ゆらぎ”の同期、同調、増幅作用により、別システムが分岐されることも説明します。その分岐点では決定論的な理解と説明が不可能であり、系統全体としてどちらの方向へ自己組織化するか予測できなくなる、とされます。それは一定方向へ自己組織化される決定においても、確率的偶然によって成される、と説明しています。

同様なことは「カオス理論」においても、初期条件への敏感な依存性のために確率論的となり、初期条件のわずかな誤差が増幅され、結果として大きな不確定性が生じる、とされます。カオス(混沌)な自然事象を理解するには、決定論による法則の中に非決定論的現象が含まれていることを理解し、決定論と確率論、必然性と偶然性、秩序と無秩序が、複雑にリンクされている認識が必要、とされます。

自己形成する自然界において、自己組織化理論やカオス理論からの理解では、「初期条件を特定して演繹しても、その結果は一義的とならず、その系の未来を正確に特定することができない」、こととなります。自然界を説明する法則や原理を決定論とする中には、予測不能な偶然性が含まれているのだから、その正しさは確率的に証明されることになります。つまり、「自然界の大部分の変化、成長は、“ゆらぎ”による偶然(非決定論)によって生成、創発され、環境の中で相互作用(同期、同調、増幅等)を重ねながら進化していく」、という理解になります。

因果律を直結させた線形推論による未来事象の決定論だけでなく、むしろ諸要素の相互作用から自発的に自己自身を形成創発していく非線形な複雑系にあって、物質世界や宇宙、生命世界や社会現象を論考・理解・説明することを、複素的構造化をふまえて展開する努力が、本論の方法論となります。

加えて、「死の危険が隠蔽されている山岳事象を意識の中に潜ませながら山を登ること(遊び、自己統合)」、それを「登山」とします。他方、「山岳で死の危険条件を排除しつつ、安全確保の下で人間相互が競うゲーム(ゲーム、勝負)」、それを「山岳スポーツ」と位置づけました。つまり、「登山」と「山岳スポーツ」は前記

定義により、別々な群れとして分離分岐されるのです。

自然界における“ゆらぎ”の偶然性を理解すれば、登山における「確率的死の可能性」はゼロ(0)ではありません。そのことを意識、自覚し、「自然と人の弁証法的関わりの中から、人が生きることの意味を知り、実感できるのが〈登山〉」とも理解できます。他方、「想定できる限りにおいて死の条件を排除し、安全確保の山岳フィールドで、人間関連の記録を競う競技を〈山岳スポーツ〉」とします。

山岳スポーツは多様な登山生態の非線形“ゆらぎ”によって創発、派生され、「分岐群」へと成長した独自世界となり、登山と境界を隔てた(お隣さん)別系統世界とみなせることが理解できます。

**帰納法** (induction) = 個別的、特殊的な事象の中から共通する事象を、一般的、普遍的な規則、法則を見出そうとする推論方法。(前提が確率的な真であるなら、結論が必ずしも真であるとは限らない) ⇒ 科学的実験結果、統計処理結果等の調査に係る結果を積み上げる方法 (共通事象のまとめ = 原理、法則)

**演繹法** (deduction) = 一般的、普遍的な前提(規則、法則、原理等)から、個別的、特殊な結論を得ようとする推論方法。(前提が真であれば、結論も真となる) ⇒ 数学的推論 (三段論法等の証明や、論理的推論によるアイデア創出)

**弁証法** (dialectic) = 思考を深める方法  
相対立する意見の持ち主が対話をおこなうことにより、お互いにより深い思考に向かっていく方法。(正⇒反⇒合)

**不確定性原理** (uncertainty principle) = 粒子の位置と運動量を同時に正確に測ることはできない。ただ、確率的に予測できるだけである。

$$\sigma_x \cdot \sigma_p \geq h/2$$

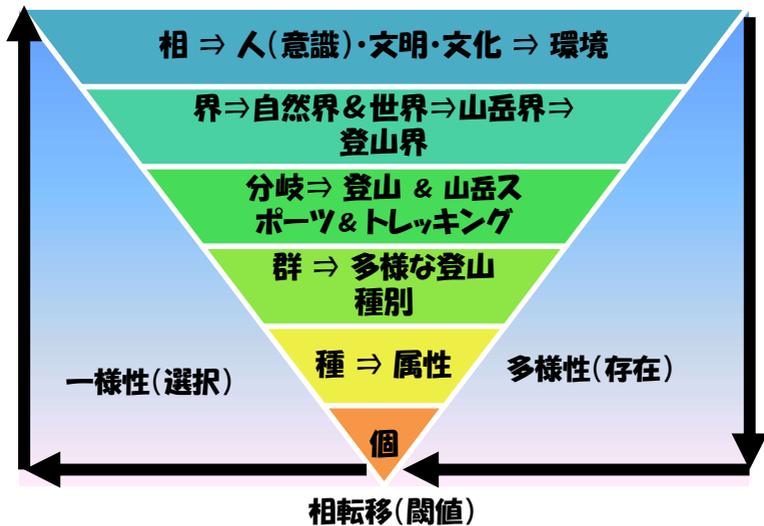
$\sigma_x$  : 位置の標準偏差  
 $\sigma_p$  : 運動量の標準偏差  
 $h$  : 換算プランク定数

(2003年発表、小澤正直氏によれば、上式を多項式に修正しているが省略)

## 2節. 構成と構造

「登山の生態分類（学）」の構成について考えてみましょう。【図-1】は、その構成を階層化（構造）して示したものです。分類学に準じ、一人の登山者たる「個」を基底におき、その上層へ「種」⇒「群」⇒「分岐」⇒「界」⇒「相」とし、さらに「相」から「個」へと帰還（フィードバック）する構成を示します。一人の登山者は底辺の「個」となりますが、登山者の数だけ「個」があるわけですから、個体としての差異をもった億人億様な存在といえます。

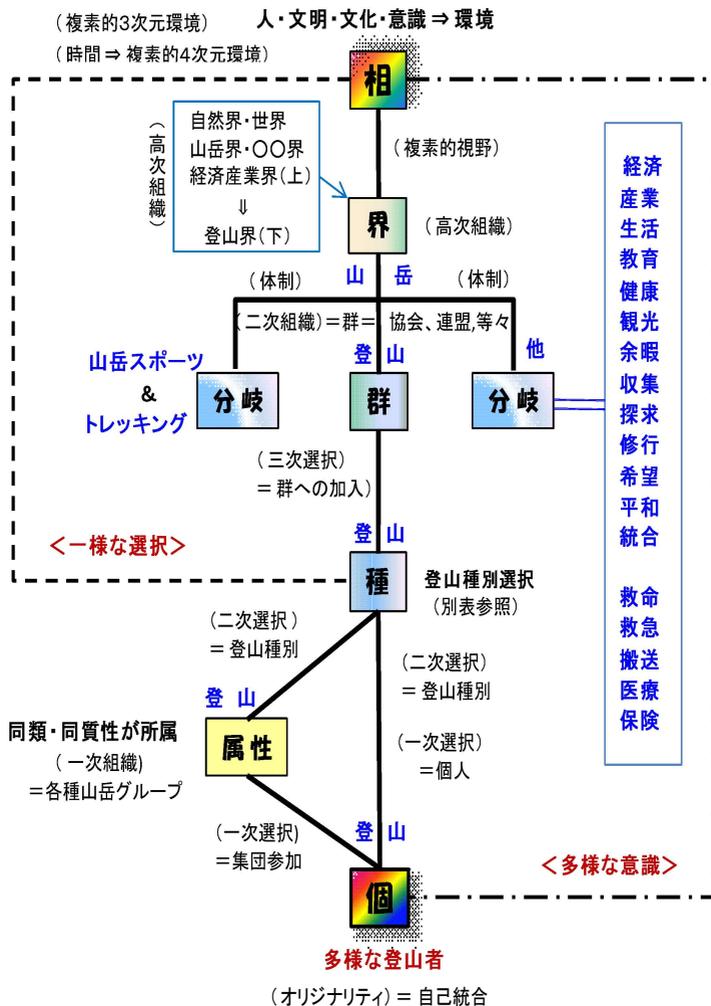
【図-1】 登山の生態分類（学）の構成



登山者一人一人が任意に選択する登山となるわけで、その選択した一様性の中で共通する特徴を「属性」とすれば、その属性に集まる個の集合体は、一つの「種」とみなすことができます。つまり「種⇒属性」となります。同類な個体が集った「属性(種)」を登山集団に当てはめ、わかりやすく表現すれば、「〇〇山岳会、◇◇登山クラブ、△△登山同好会」のような、登山者の一次組織となります。このように、順次構造説明すべく系統図解したものが、次頁の【図-2】です。

登山種別選択の「種(属性)」とは、自然分類における生態的登山種別であり、巻頭の【別表 -1-1】(左側)と【別表 -1-2】(右側)、小分類欄の「種別」と「種別記号」にて分類表示をしています。登山の生態ごとに種別の呼称をつけ、記号を付したもので、登山者自身の個体的特徴を分類整理するものではありません。

【図-2】 登山の生態分類(学)の構造



例えば一人の登山者を取り上げてみると、毎回の山行は常に同じ登山生態をとるものでなく、様々な登山生態の中からその都度に「登山種別の選択」をします。今回は「アルパイン単独形 (A-1)」を実践し、次回は「記録更新形 (B-1)」を実践するというように、その時々を選択する登山生態を示します。さらに登山者自身の年代変化により、また性格別によっても、登山生態の「随時適正選択」はおこなわれ、特定登山種別に偏る傾向が生じてきます。

このように登山者自らが登山生態を選択するものであり、そこに登山者の自由意志と任意性が反映されます。登山の生態観察から基本形態となる登山種別を整理し、巻頭の【別表 -1-1】(左側)、【別表 -1-2】(右側)に13種別を提示したものです。(A-0 ~ C-1)

【図一2】の二次選択に先立つ一次選択において、登山者自らは立場の選択があります。個人として山に向かうか、一次組織の山岳グループに加入して山に対するか、登山者として立場の選択です。しかしこのような「登山者の立場」など考えずに山に対するのが一般的です。そんな無意識の中にあっても自ずから立場を選択していることとなります。最も素朴で無意識なあり方は無自覚な「個人」ですが、組織加入登山者からは「未組織登山者」と呼ばれて蔑視されます。

では何のために「山岳グループへ参加」が必要かを考えてみると、以下の理由があげられます。

#### 【登山者組織の起点】

- ① 仲間を得やすく楽しい (パートナーの確保、集団の楽しさ、交流)
- ② 仲間内で学習や教育が得やすい (知識、技量、訓練、情報交換)
- ③ 遭難対策が立てやすい (相互扶助、団体保険加入、救助搬送訓練)

個人の立場にあっては、上記を含めたすべてのことを個人の責任で負わなければならないのですが、そのことにさえ気づかないのがまた、個人の立場でもあります。未組織登山者として、組織登山者から蔑視される由縁でもあります。本論を展開する主要な意味は、登山の総体を示すことにより、登山者自身として個人の立場で

山岳自然に立ち向かうことがいかに厳しい状況にあるか、を気づいてほしいと願うからです。一方でまた、山岳組織に加入したからといって山岳自然が手加減してくれるわけもなく、登山者は皆一様に山岳自然を楽しみつつ、生きて帰る術を心得て無事帰宅しなければなりません。山岳組織加入により、個人の立場よりも楽に前記①～③へ対処でき、それらの関わりの中で登山の総体を知ることができます。

その面から、直接登山行為に関わらない**三次選択**として、「**群への加入**」があります。具体的には「**日本山岳協会**」や「**日本勤労者山岳連盟**」という特定な「**群**」への加入を意味します。

「**群**」相互の違いは何かを考えると、登山者としての**三次選択**となる「**依って立つ思想や好みの差異**」が生じるからなのでしょう。思想の差異は運営面、体制面、遭難対策面、等々において、それなりの考え方の違いから生じるもので、一様とはなりません。本論の主旨から述べれば「**登山＝群**」となり、その**分岐**として「**山岳スポーツ＝群**」、「**トレッキング＝群**」に分けて整理すべきではないかと考えるものです。分岐群は【図-2】の**分岐**から引き出した、その他多様な分岐領域にわたります。

しかしながら、以上の理解は**20世紀的解釈**となります。**21世紀のインターネット社会**にあっては、ウェブ(SNS)上のバーチャル・コミュニケーションの中から、「イイネ」とクリックし、初対面な不特定者が集合場所に集まり、言い出しっぺがリーダーとなって登山を実行するようなケースを生じさせています。リーダーシップ不明瞭な「**烏合の衆**」は拘束性が無い分だけより自由さを感じて楽しくありますが、反面で様々なトラブルを生じさせます。山岳自然相手の登山にあっては、最悪「**死の危険**」を孕んでいるのですが、「**烏合の衆**」はそのことさえも気づいていない無自覚さが、新たな諸問題を生じさせます。

本書は20世紀登山者の体験から21世紀登山を展望し、登山の生態を分類することにより、登山の本質理解を深めようと意図するものです。電気技術者が理解する20世紀と21世紀を分かち**SNS**(Social Networking Site)社会最大な変化は、「**アナログ思考からデジタル思考への移行**」にあります。その考察は随所に散りばめて

いますが、まとめの整理は今後の課題として残しておきます。

「登山」を一様にとらえ「群」に位置づけると、その上位構造となる「界」とした「登山界」となります。しかし日本の登山界は登山だけでなく、山岳スポーツを含む集合体となる「山岳界」となっています。さらにクライミング以外のランニングやトレッキングは系統発生的な背景もあり、独自の協会を立ち上げて必ずしも「山岳界」に統一されていません。ランニングは陸上競技からの延長でもあり、トレッキングは国民体育や観光からの延長となり、それらの統合整理は成されていません。また、「登山界」と「山岳界」の区別概念も特になく、本論で展開している「登山の生態分類」という整理の仕方、そのものもありません。

【図一2】の「群」に相当する日本山岳協会や日本勤労者山岳連盟、さらに日本山岳会において、等しく「登山」でなく「山岳」を表象していることは、必ずしも「登山」に絞られた「群」でないことの表現といえます。日本山岳会は1968年、組織構成上日本山岳協会の傘下となりましたが、日本の近代登山発祥から現在に至るまでを牽引してきた自負において、前記3団体は互いに同じ「群」の階層に並びます。3団体いずれもが「山岳」を標榜していることから、その高次世界は「山岳界」であることに、整合性はあります。

登山者の一次選択において、属性を選んで入るグループ名に「〇〇山岳会」とあるように、これまでの日本では「登山/トレッキング/山岳スポーツ」を分けることなく「山岳」で括り、一緒くたにしていました。従来からの「登山概念」は登山だけでなく、トレッキングや山岳スポーツも含めて「登山」と呼称しています。

しかし本論では、「登山」、「トレッキング」、「山岳スポーツ」をあえて分離・分割して再認識することにより、「登山」の意味を改めて問い直すものです。したがって、「登山界」は「山岳界」の下位構造となる認識です。同様に「山岳スポーツ界」、「トレッキング界」があり、その上位構造として「山岳界」で括ります。

「日本山岳文化学会」設立にあたり、登山文化学会とするか、山岳文化学会とするかの論議があったといわれます。結果、より広いフィールドを対象にする「山岳文化学会」となりました。

また、「山岳と登山のちがひ」検証は、拙著『登山の総合人間学』（私製版、2015.12.7）、2章「山岳と登山のちがひ（P.16～21）」で論じています。

これら**構造構成における組織体**は、すべて人の意識に係る「**集合の概念**」であり、個体としての実在ではありません。あくまでも視認できる実在は「**個体**」であり、「**個体**」が構成・構造の基礎単位となる集合体概念において、人々の意識の中で「**組織の構造構成**」が認識されます。さらに人々は**集合体概念たる組織意識を、個の意識よりも上位に置き、上位下達によって組織の結束力を強化**してきました。しかし現代のインターネット・ウェブのように、上下階層のない平面フラットでランダムな相関関係においては、上位下達な「**集合の概念**」は固着しません。旧来の上下階層分離という権威や利害の関係性の中で、個は集合体から離脱して自立することが困難でした。しかしインターネット・ウェブのような空間的相関関係にあっては、個の意識によって参加や離脱は自在です。しかしで個の意識が不足すれば、蜘蛛の巣(ウェブ)で絡めとられた虫のように、蜘蛛の餌となってしまいます。守るべき集合体がないことは、守られるべく集合体もないことで、すべてが自己判断、自己責任の範疇となる生態形です。この現象は自由の象徴的な生態ですが、生物界における食物連鎖のように、自らの存在と消滅が他者や他種の役(餌)に立てるのか、現代人一人ひとりに問われている、難しい人間実存に関する主題です。

高次な組織とは「**個体の意識**」を構成、構造化させた「**概念の世界**」となります。身体的に独立した個体でありながら、その意識は組織構造の部分とともに全体をも統括する二重意識構造となります。この**人間意識の重畳性**により、人と文明と文化を**複素的**にとらえて統合する、「**相**（世界観）」の観念領域へと至ります。この「**相**（世界観）」の観念レベルにおける回答を、ふたたび実相の世界へと帰還させる英知こそが、今、人類社会の中で再認識される必要があります。そのことはふたたび、「**ある個の英知を、その他の個の現実(実相)**」へと再認識を図り、一人一人の「**心と意識を育てる教育の機会**」にほかならなりません。現実の「**個**」の閾値を刺激し、「**気づき**」による一様性を呼び覚まし、「**相転移**」によるさらなる進化へとつながっていくと考えるのです。

### 3節. 単位としての個

登山は日常生活の中で必要不可欠なものでなく、個人の恣意的欲求にもとづく任意な行動、平たく言えば「自由意志」ですから、必ず一次組織に加入し、さらなる高次な組織化が強制されるべき必然な行為ではありません。【図—2】(P-39)のように一次組織に加入することなく、個人の一次選択で登山種別を特定して実施する、いわゆる「一登山者」としての立場が基本にあります。一人で山岳自然と向き合う、「登山者の自然な基礎生態」であるといえます。ただその場合、「山岳自然の中で死を排除できない山に登る行為を登山」と定義したことから、単独登山の危険性は誰にでも容易に思い浮かぶこととなります。それゆえに、同類、同質性を好む属性への集まりも必然となり、各種多様な山岳グループが成立します。

40～50年前にはよく、「3人寄れば山岳会」と言われました。3人と山(サン)岳の語呂合わせですが、あながちそればかりといえず、小規模で気の合った仲間による自由で多彩な山岳会は、雨後の竹の子のように現れました。

日本生産性本部がまとめる「レジャー白書」によれば、日本の登山人口は2009年の1,230万人をピークに、800万人から1,000万人を前後しています。それに比べ、日本の主たる山岳2団体に加盟している近年の登山者数は、おおむね次の通りです。

①日本山岳協会加盟 1,248 団体の登録人数は約 49,500 人 (一団体≒40 人)

②日本勤労者山岳連盟 650 団体約 25,000 人 (一団体≒38.5 人)

併せた合計=74,500人となり、組織登山者比率=0.745% (1,000万人登山者として)でしかありません。さらに2020年、東京オリンピック追加競技の「スポーツクライミング」推計人口は約50.2万人として、1,000万人登山者人口に含まれたとしても、たったの5%でしかありません。本論におけるこの数値は、正確さを求めるのではなく、概要を示すだけです。正確性を求めるならば改めて考察し直す必要があります。

本論では、安全登山をめざす登山技術や、山岳知識を述べるものではありません。登山は人間欲求本能にもとづく行動の基礎要素とらえ、他方ではその基礎要素

を理解、統括すべく知性を要します。さらに自然環境の中へ個体をさらし、自然環境を通して受ける感性の繊細かつ複雑さは、その心情を他者にうまく伝えることができないほどです。「たかが山登り」と、あまりにも簡単に、自由に、登山へ行けることから、「登山に基礎がある」ことを知らずして歩く登山者が、今日の大多数と見受けられます。

「一登山者」にとっては、登山の基礎を学ぶ場所と機会がないのも現実です。戦前ならば、軍事教練の一環として行軍登山があったそうです。そして戦後教育では、学校体育として「登山」があり、小学校高学年で 1,000mクラスの山へ登る機会がありました。戦後の国民体育向上は「国民体育大会(国体)」として実施され、現在も続いています。しかしやがて、「学校登山」はなくなりました。

登山の定義からすれば、登山が危険な行動であることにより、青少年教育から排除されても仕方ありません。しかし徳川家康が言ったという、『人生とは、重い荷を背負い、遠き道を歩むがごとし』の教訓は、形を変えて登山そのものにも当てはまります。苦難な人生に耐えることへの訓練が、登山によってもたらせられることも一つの真実です。死の与件を排除し、安全確保の下でおこなう「山岳スポーツ」と、死の与件を賢く潜り抜けて生きることを学ぶ「登山」とは、本質において異なる内容にあります。さらに、死を介在させた登山概念を学校教育に盛り込むことは、平和裡に過ごす現代日本社会にふさわしくないことも理解できます。しかしその分、「生きるとは何か・・・?」を問う少数の人達にとっては、絶好の教育機会を失っていることも事実です。何よりも私自身の半世紀にわたる登山体験は、大自然の中で生命の限界を通して学んだ、総合人間力の形成となりました。そのことはまた、学校教育機関で決して学ぶことのできない真摯さをもって、真剣に、本気で、生きるということを考え続け、実践した結果の「答え」でもあります。

現代、多くの登山者が「ツアー登山」をおこなっています。山岳スポーツ同様に、死の与件から守られるために対価を支払い、山岳施設に宿泊し、睡眠と食事を自ら背負うことなく提供してもらい、ツアーガイドの案内でコース歩行のリスクを軽減させる「他者依存性」は、登山が立派な「消費産業」になったことを証明しています。ましてや登山基地までの往復便や、山岳施設利用のパッケージ化が進む

中、登山の自由は、カタログ選択の自由を行使する実態にあります。

徳川家康が言ったという、「**重い荷(責任)を背負う**」ことの意味がなくなりました。

かつて**登山**は、家の出発から帰宅までが一連の登山行程として自覚され、そのことは「**一つの物語**」でありました。登山という、その都度の一つ一つ**小さな物語**を重ねることにより、家康が言うような「**人生**」の歩みを理解できる疑似体験となり、**本当の人生を歩む心の支え**となれたのです。

現代社会において、「**死との対話**」がなくなったのは登山だけでなく、あらゆる文明と文化の局面においても生じています。個体として生きる人間力は自らの力だけでは維持できず、個体の生も社会システムの支えが欠かせません。やがて人(ヒト)は、絶滅保護動物に陥るのでしょうか。あるいは**個の主体性をなくして社会システムで支え合い**、「**個**」は人類の「**種**」を代表する「**個体**」ではなく、「**パーツ(一部分)**」となってしまうのでしょうか。もはや「**生と死の対話を図る**」**弁証法的登山概念**は過去の遺物となり、本論はそのエンディングの整理となるのでしょうか。あるいは「**登山**」という呼称は不要となり、「**山岳観光とスポーツ クライミング**」に代替されるのでしょうか。ある情報によると、「**日本山岳協会**」の名称が、「**日本山岳スポーツ クライミング協会**」へと変更する常務理事会決議が成されたといえます。**2020年東京オリンピック種目に「スポーツ クライミング」**が追加されたことによる変更と見受けられます。しかしその決議は、「**自ら登山を捨て去ってしまった決議である**」、といわざるを得ません。本論で示した、オリンピック⇒文部科学省⇒日本体育協会⇒日本山岳協会の縦組織、さらに国際オリンピック委員会⇒日本オリンピック委員会⇒日本山岳協会という傘下構成から派生する、必然な決議ともいえます。

過去半世紀にわたる私の山岳登山体験から見ると、**現代登山**はもはや引き継がれるべき**エネルギー**を失っている、と見えます。世界を**物質**だけで見ず、**知性と感性**を動員して**統合**すると、その先に「**幸せ**」な存在が**透けて見えます**。「**幸せは、持つことでなく、そのようにして在ること(自然)の中にある**」と、半世紀以上にわたって山岳環境と対話を続けた「**一登山者(個)**」の**実感**です。**アルピニズム登山**は消滅し、**山岳スポーツ**と**山岳観光**へ相転移する。それら**享受産業文化**一色で良いものか、も一度「**登山の本質**」を考えてほしいものです。

## 4 章 . 登山の種別

元来「登山」は、衣・食・住を自ら背負って山へ登り、無事帰宅するまでの道程を指してそう呼んでいました。 山菜やキノコなど、山の食料調達はできるものの、近代登山にあつてはそれさえもなくなり、山では水の補給をおこなう程度と、自前で衣・食・住を運びました。その中から登山技術、炊事技術、生活技術(テント生活)、地理・気象知識等々を磨きます。登攀技術は登山の半分程度で、残りの半分は生存にとっての基礎技術や知識となるべき、生活の知恵でした。

濡れた木でも焚き火を起こし、石を三点に置けば釜戸となります。狭いテント生活は、習慣のちがいによる我が儘や思いやりの葛藤が、日常生活への教訓にもなります。約50年前、私が社会人山岳会に入った頃でも登攀技術とともに、生活技術の訓練と意識づけが大切な要素として受け継がれました。

現代、登山者の多くは山小屋を利用しています。それが良い、悪い、という視点から述べるものではありません。衣・食・住を自ら背負わない登山を「登山」と思い込んでいる現代風潮に対し、「何と、貴重な体験を失っていることか!」、という驚きがあります。旧来の登山様式が備えていた、山岳体験による自己練磨の素晴らしさは、近年の自然災害被災においても役立ったはずです。自然災害ばかりでなく、日常生活の中で生じる非日常事態(アクシデント)においても、その技術や心構えは役立ちます。 登山の多様性を論ずる前に、まずこのことを確認しておきます。

登山及び登山者についての多様性は、「生物多様性」に似た行動様式や行動への動機づけ等による様式～形式～種別～類型と、系統だった分類が考えられます。これまでの登山は形態的分類がおこなわれていましたが、それらの人間的特性に踏み込み、系統整理されたものまでは、ほとんど見当たりませんでした。

さらに「登山＝スポーツ (登山は生涯スポーツである)」と考える、戦後日本登山界の潮流に対し、異論を唱える者は極々少数でした。さらに日本の登山界を掌握してきた、文部科学省⇒日本体育協会⇒日本山岳協会の行政ルートは勿論、行政

系列に属さない日本勤労者山岳連盟にあっても、同様な認識の下で世界の山々を登っています。

しかし本論においては「登山＝スポーツ要素を含んだ人間自己教育」と考え、「登山＝スポーツ」を乗り越えていこうと考えるものです。そのために「登山 / トレッキング / 山岳スポーツ」と類型分離をおこない、自らの登山位置を確認可能となるようなGPS (Global Positioning System＝全地球測位システム)機能を果たせたらと、初めての試みるものであります。身体行為が登山の主体であるわけですから、登山にともなうスポーツ要素を排除する考えではありません。登山は単純に山に登るそのことを主目的とするわけですから、山ではない海岸の岩壁や屋外・屋内人工壁に登る「スポーツ クライミング」は、登山と別ジャンルとして扱う考えが、登山の本質論から導く提言、となります。

同様に山嶺、山麓を駆け抜ける「スポーツ ランニング」や、心身の健康スポーツをめざす「ウォーキング」も別ジャンルとし、クライミング / ランニング / ウォーキングを合わせて「山岳スポーツ」として括る試みです。

それらは登山の分類同様、様式～形式～種別～類型として分類整理することができます。しかし本論において、トレッキングと山岳スポーツの詳細は、ここで述べないこととし、登山のさらなる生態種別のみを考察対象とします。

登山の分類は、一人の登山者の属性を決めるものではありません。一人の登山者にあっても、その都度の山、ルート、登り方、季節、パートナー等々のケースに応じ、多様な登山をおこなうからです。つまり登山者個人を属性分類するものではありません。個としての登山者が、いろいろな山に、多様な登山をおこなうことを整理・分類するのであり、その一つ一つを生態分類して捉え、整理すると、その都度の登山者の位置づけが理解しやすくなると考えたわけです。

この立場は、登山者を登山組織の一員と見るものではありません。多様な登山ができる個が先にあり、どのような登山をおこなうかによって、適正組織の必要性が生じるという捉え方です。旧来の「まず、組織ありき」ではなく、「何のために、組織が必要か」、と考える視点からの論考です。

## 1節. これまでの登山や登山者組織の分類

従来の登山や登山者組織の分類をみると、次のような分け方があります。

### (1) 登山の分類

#### 1) 内容別の視点（登山様式）

- ・ 軽登山 …… 日帰り登山
- ・ 小屋泊登山 …… 小屋に泊まりながら複数日の登山
- ・ テント泊登山 …… テント持参による複数日の登山
- ・ 雪山登山 …… 積雪のある山への登山

#### 2) 習熟度の視点（登山レベル）

- ・ 初級登山 …… 特別訓練しなくても普通の人ができる登山
- ・ 中級登山 …… 基礎レベルを習得し、応用段階における登山
- ・ 上級登山 …… 自主判断、自立対応できる人達の登山

#### 3) 難易度の視点（登山グレード）

- ・ 初級登山 …… 安全度が極めて高い登山
- ・ 中級登山 …… 予期せぬアクシデントを含み得る登山
- ・ 上級登山 …… 生死に関わる内容を含む登山

#### 4) 対象別の視点（登山形式）

- ・ 無雪期縦走 …… 無雪期の山稜を登る
- ・ 積雪期縦走 …… 積雪期の山稜を登る
- ・ 無雪期登攀 …… 無雪期の岩壁登攀
- ・ 積雪期登攀 …… 積雪期の岩壁、氷壁、雪壁登攀
- ・ 沢登り

#### 5) 国別の視点

- ・ 国内登山 …… 日本国内（特に名前を付さない）
- ・ 海外登山 …… 日本以外（海外遠征登山）

- 6) アマ・プロの視点
- ・ 職業登山 …… プロ (対価報酬)
  - ・ 趣味登山 …… アマチュア

## (2) 登山者に関する全国組織

### 1) 全国組織の視点 (登山者として)

主に日本山岳協会とそれを構成する下部組織、都道府県・山岳連盟、市町村・山岳協会という、全国組織の中でおこなわれています。以下の分類は日本山岳協会の運営組織として、初期段階からあったものです。

#### ・ 組織内登山者 ……

① 文部科学省⇒日本体育協会⇒日本山岳協会⇒都道府県山岳連盟⇒市町村山岳協会⇒各山岳会、各種登山グループ⇒登山者

② 新日本スポーツ連盟⇒日本勤労者山岳連盟⇒各地方連盟⇒地域・職場・学校等の各山岳クラブ・山岳会⇒登山者

※「組織内登山者」という言葉の使用の裏には、「差別意識が隠蔽されている」というのが本論の主張。

#### ・ 未組織登山者 …… 上記に加入していない個人登山者

※「未組織登山者」という言葉の使用は、「不適切である」というのが本論の主張。

### 2) 公益社団法人 日本山岳協会 (47 都道府県山岳連盟が正会員)

一般団体、職域団体、大学、高校の 1,248 団体、49,481 人(2014.04 現在)

日本の登山界を統轄する組織 (HPより)

下部組織 ⇒ 都道府県山岳連盟 ⇒ 市町村山岳協会

⇒ 各、山岳会、山岳グループ ⇒ 登山者

上部組織 = 日本体育協会、日本オリンピック委員会、国際山岳連盟、国際スポーツ・クライミング連盟、国際山岳スキー連盟、アジア山岳連盟、日本ワールドゲームズ協会

### 3) 日本勤労者山岳連盟 (現在約=650 団体、25,000 人) HPより

地域・職場・学校等の山岳会・クラブ等が団体加盟

下部組織 ⇒ 地方連盟、地方協議会 ⇒ 地区連盟 ⇒ 各、山の会・クラブ ⇒ 登山者

上部組織 = 新日本スポーツ連盟

4) 公益社団法人 日本山岳会 (32支部 5,083人) 2013.03 現在

日本を代表するアルパイン・クラブ (HPより)

下部組織 ⇒ 各支部 ⇒ 団体・個人 ⇒ 登山者

上部組織 ⇒ 東京都山岳連盟 ⇒ 日本山岳協会

### (3) 登山を支える機関等

- 1) 国立登山研修所 …… 文部科学省
- 2) 公益社団法人 日本山岳ガイド協会 …… 認定山岳ガイド職能組織 (内閣府)
- 3) 日本山岳レスキュー協議会 …… 日本山岳協会、日本勤労者山岳連盟、合同組織
- 4) 日本ヒマラヤ協会 …… ヒマラヤ登山研究団体
- 5) 日本山岳文化学会 …… 山岳文化の学術研究団体
- 6) 日本山岳レスキュー協会 …… 認定山岳ガイドのレスキュー技術指導組織
- 7) 日本山岳サーチ・アンド・レスキュー研究機構 …… 山岳レスキュー研究団体
- 8) 日本山岳救助機構 …… 個人・団体会員相互扶助組織、東京都岳連連携
- 9) 全国山岳遭難対策協議会 …… 行政機関連携  
文部科学省、環境省、警察庁、気象庁、消防庁、公益社団法人日本山岳協会、独立行政法人日本スポーツ振興センター国立登山研修所、山岳遭難対策中央協議会
- 10) 日本登山医学会 …… 登山者の安全を医学知識の普及によって守る

### (4) 山岳スポーツに関する全国組織

- 1) 特定非営利活動法人 日本フリークライミング協会

(現在約=1,600人) HP(2015)

- ・ 賛助会員 …… 個人、家族、地方協会(現在5協会)会員、団体会員
  - ・ 団体会員 …… クライミングジム、社会人山岳会、学校山岳部、有志団体
- 2) 日本トレイルランニング協会  
 地域協議会(10) ⇒ 地区協会(45) ⇒ 会員
- ・ 一般会員
  - ・ 団体クラブ会員
  - ・ 賛助会員
- 3) NPO 法人 日本トレッキング協会
- ・ 正会員(個人、団体)
  - ・ 特別法人会員(法人)
  - ・ 友好会員(個人)
  - ・ 賛助会員(個人・団体)
  - ・ 家族会員(家族)

## 2節. 登山と山岳スポーツ等の新たな分類

本論においては、登山、トレッキング、山岳スポーツを大別し、次頁の【表-4】に示しました。これまでの考察により、【表-4】分類の特徴は、登山、トレッキング、山岳スポーツと、大きく三つに分けたことです。従来は全て山岳に含まれ、**山岳＝登山**という認識でした。 ※詳細分類は巻頭の【現代登山と山岳スポーツ等の生態分類表】

本論は登山の生態を傾向別にとらえ、種別分類をおこなったものです。同一登山者においても、その都度の登山内容によって登山種別が異なり、個人が多様な登山展開をしているという理解をします。例えば今週はアルパイン登山へ出かけますが、来週はツーリズム(観光)登山へ出かける、というような生態的多様性です。

しかるに、登山生態に適する人間的特性は、あらかじめ**定性的に分類**することができます。その特徴を「**人間的存在の位相**」から分析し、次に「**主たる行為の形態と、要素**(物的空間、心的空間)」へと**種別化**します。さらにそれら特徴に適う、山頂、山稜、岩壁コース等は、あらかじめ特定できます。今日はどの山、どのコースを登るか、その「**選択の動機づけ**」は様々ですが、選択する動機特性により、あらかじめ山頂、山稜、岩壁コース等は絞られてきます。

登山への**動機づけ意識調査**を実施する場合、「**ある場所**」を特定することにより、すでにその山、そのコースを選ぶという「**バイアス**(特徴の顕著な傾向性)がかかっ

【表—4】 現代登山と山岳スポーツ等の生態分類

登 山	自己 統合	アルパイン登山	A-0	超人形	メスナー、山野井			
			A-1	単独形	単独登山			
			A-2	複数形	パーティ登山			
			A-3	企画事業形	選抜対価登山			
			A-4	企画公募形	応募有償登山			
	趣味の 展開		A-5	交流形	任意無償登山			
			レコード登山	B-1	記録更新形	〇〇記録		
			メモリアル登山	B-2	記念顕彰形	〇〇記念登山		
			コレクション登山	B-3	収集蓄積形	7大陸、百名山等		
			ヘルス登山	B-4	健康希求形	自主健康登山		
			ツーリズム登山	B-5	観光引率形	企画形観光登山		
			ファッション登山	B-6	社会風潮形	流行登山		
	トレッキ ング		ワンダーフォーゲル	C-1	鑑賞自立形	山嶺巡行登山		
アルパイン・トレッキング			C-2	鑑賞自立形	自立形山岳巡行			
山 岳 ス ポ ー ツ	クライ ミング		ツーリズム・トレッキング	C-3	観光引率形	企画形山岳巡行		
			ボルダリング	D-1	ロープなし	高さ5m 以内	国体	
			リード・クライミング	D-2	トップロープ形	12m 以上のハング		
				D-3	スポーツ形	12m 以上のハング	国体	
	ラン ニン グ			D-4	トラッド形	ナチュラル・プロテクション		
				トレイルランニング	E-1	山野を走る	自然の路面、高低	
				マウンテンランニング	E-2		登下降	
				スカイ・ランニング	E-3		標高 2,000m 以上	
				ウルトラランニング	E-4		42.195km 以上	
	ポッカランニング(駅伝)	E-5	荷を背負う					
歩 行			ウオーキング	F-1	山野を歩く	〇〇ウオーキング		
			ハイキング	F-2	山野を散策	〇〇ハイキング		

ている」こととなります。その場所、そのコースを選んだという、動機のバイアスを考察し、どのような補正を加えるかが必要となるはずです。そうでなければ調査結果の傾向は、おのずから推察可能となります。その調査場所までを、どのような動機で登って来たかをより正確に整理・分析・分類するためのバイアス論考基礎として、本論の**定性的・質的分類**が役立つものと考えられます。

山やルートを決める「**自己決定権**」は、日本国憲法で定める基本的人権の主要素であり、心理学研究における「**自己決定理論**」の中で、動機づけ因子の相関を「**相関係数**」を用いて数値化した研究方法があります。また『**登山行動に関する社会心理学的研究**』においては、二次元平面(x, y)座標上に動機因子をプロット表現する手法を用いています。特定な山、特定なルート上にいる登山者の、登山動機相関は特定な結果となるでしょうが、その結果から登山全体を網羅する帰納法による一般化、普遍化は、必ずしも登山全体の「**真**」を説明するものでありません。より全体の「**真**」に近づくためには、本論巻頭に提示した【別表-1-1】+【別表-1-2】=【現代登山と山岳スポーツ等の生態系】から演繹的推論を交え、個別特定場所の調査・統計整理することが、より正確な実証になるものと考えます。

以上の考察は今後の研究テーマとして、課題の提起に留めておきます。

以下【別表-1-1】+【別表-1-2】=【現代登山と山岳スポーツ等の生態分類表】についての概要を簡略説明します。

## 【A-0, 1, 2, 3, 4, 5】 アルパイン登山

戦後の登山界にあって、「**アルピニズム**(Alpinism)」という言葉が流行りました。本来の意味はヨーロッパ・アルプスにおいて、狩猟や信仰でなく、【**山に登ることを目的とする登山**】のことをさしました。ヨーロッパ・アルプスの登山も初登頂の時代が過ぎると、より困難なルートを迎えるようになります。1880年代から活躍したイギリス人登山家 A.F.Mummery、「**ママリーは登山を純然たるスポーツとみなし、登山の真髄とは登山者の修練と技術によって種々の困難と闘い、それに打ち克つ喜びであるとし、そのためにはより困難なルートを求めて挑戦し、登山者の心身両面における極限を追求しようとした**」。この考えは「**ママリズム**(別名;マンマリーイズム)」と

呼ばれ、アルピニズムの代表的思潮となり、今日に引き継がれている。(北海道大学山岳部・山の会・12)】、という思潮があり、戦後の日本の登山界に浸透します。

日本では「ママリズム」を「日本のアルピニズム」と読み替え、「より高く、より困難を目指す登山」へと内容を置き換えます。これを実践して活躍したのが「第二次RCC」のメンバーたちでした。彼らは情緒的要素を捨て去り、スポーツと割り切って圧巻の成果を残しました。この思潮に対する批判の声は聞こえませんでした。私は疑問を感じて小論を書きました。そのことは、「6章. 登山と山岳スポーツのちがひ」で改めて述べます。私はアルピニズムそのものを批判するのではなく、「登山＝スポーツ・アルピニズム」を登山の枠組みとした思潮への疑問を呈したのです。実際私自身の登山内容は、アルピニズムそのもので、「より高く、より困難を目し」丹沢からヒマラヤ岩壁登攀までを実践したわけです。

現代の登山は形態や形式の面において、社会的意味をもつ初登頂・初登攀による限界を目指す登山はなくなりました。エベレストが登頂された1953年以後の登山において、「山は死んだ」と『パイオニアワーク論』を書いた本多勝一氏(元:朝日新聞編集委員)は、京都大学山岳部をやめて探検部を創設します。しかしこのことは外面的形式への着目であり、登山者の内面性を考究した視点ではありません。

「ママリズム」を純粹に追求する方向性は二つ考えられます。第一は「人類」の視点からです。第二は「個」の視点からです。有限な地球環境の中にあり、第一の視点「人類」には「限界」があります。それが本多氏の述べる「山は死んだ」発言となり、その限界点を述べたものです。地上の最高峰エベレストが登頂されたことにより、高さへの挑戦が終わった(死んだ)ことを意味します。第二の視点「個」からは、人類が世代交代を果たしながら持続する**個体代謝**の中で、**個体**は常に**生と死**を繰り返しています。新たに生まれて成長する個体にとっては、初めての環境体験を繰り返すことが可能です。**新たな個体**にとっての向上心や探究心、冒険心は、世代が代わるごとに質を変え、量を変えて**繰り返し実践**することが可能です。エベレスト初登頂以後から登山を始めた私たち世代にとっては、第二の「**個の視点**」においてこそ、「ママリズム＝アルピニズム」の実践が可能でした。この視点は代謝により、いつの時代においても有効な手法と考えられるのです。

このように現代、「アルパイン登山」の“アルパイン”には、「アルピニズム＝マ  
マリズム」の思潮が反映されており、内面的な向上心を登山体験によって自己統  
合しようとする、生存欲求の向上性(文化的)と記録更新性(文明的)があります。その  
中でも定性的な違いにより、以下の形態へと分類整理することができます。

＜A-0＞ **超人形** …… アルピニズムを単独で超人的におこなう登山

自己責任、自己負担の下、一人で登り、訓練とともに超人的な行動能  
力を発揮しつつ生還を果たす登山。

代表的登山家＝ラインフォルト・メスナー、山野井泰史

＜A-1＞ **単独形** …… アルピニズムを単独でおこなう登山

自己責任、自己負担の下、一人で登り、順次ステップ・アップする向上  
性をもった登山。

＜A-2＞ **複数形** …… 四季にわたり高度な山岳登攀、登頂を目指す登山。

自己責任、自己負担の下、パーティを組んで登り、自分やパートナ  
ーにとり順次ステップ・アップする向上性をもった登山。

＜A-3＞ **企画事業形** …… ○○主催(後援、協賛)○○登山

事業化の中でおこなう登山。大規模から小規模に至るまで多様な企  
画を持ち、企画に見合った外部の資金調達を得、成果をもって対価と  
する。成功の確率を高めるため、選抜やスーパースター等の強力メ  
ンバーを選び抜き、事業成功の確実性を担保する。責任は事業主  
催者にあるが、選抜等の条件づけにより、強化を図る一般的な組織形  
登山。

＜A-4＞ **企画公募形** …… ○○公募(企画)○○登山

堅実と見込む企画者(社)へ対価を支払って参加し、企画者(社)側の

リードによって目的達成を図る登山。応募登山者は自らの登山に集中できるが、責任範囲は契約事項等により、海外の場合は、相互理解の意思疎通が難しい場合もある。

＜A-5＞ **交流形** …… ○○ガイド登山（有償 / 無償）、

○○コーチング登山（有償 / 無償）

事業として有償な場合、事業でない任意無償な場合があり、ガイドやコーチ、講師となり、同行登山者への安全確保やアドバイス支援をおこなう。同行者の登山意識や技術レベル向上を図り、お互いの交流によって登山の成果を共有する形態。有償の場合は契約責任を生じるが、無償の場合は自己責任、自己負担が原則となる。

【 B-1 】 **レコード登山** …… **記録更新形**

アルパイン登山と形態・形式的には重なる部分もあるが、単に登ることだけが目的でなく、様々な記録の特定条件を設定し、その結果における「**記録達成**(更新)」を主目的とする登山。

○○最年少登頂、○○最高齢登頂、○○女性初登頂(初登攀)、○○最短時間登頂、○○単独○○登頂(登攀)、○○厳冬期○○初登頂(登攀)、等々諸条件を特定した記録達成をめざす。

【 B-2 】 **メモリアル登山** …… **記念顕彰形**

登山形態・形式は多様となり、単に登ることだけが目的ではなく、様々な記念や顕彰の特定条件を定め、その成果による「**記念、顕彰**」を主目的とする登山。

○○記念(顕彰)登山、○○周年記念登山、○○歓迎登山、等々

【 B-3 】 **コレクション登山** …… **収集蓄積形**

登山の特定事項を収集、蓄積することを主目的に登る登山様式。

ヒマラヤ 8000m 峰全山(無酸素)登頂、7サミット(7大陸最高峰)登頂、

日本 100 名山登頂、〇〇〇〇名山登頂、等々

#### 【 B-4 】ヘルス登山 …… 健康希求形

登山を通じて、健康保持や健康確認を主目的とする登山。

〇〇市民登山、〇〇学校登山、〇〇職場登山、〇〇健康登山、等々

#### 【 B-5 】ツーリズム登山 …… 観光引率形

山岳組織に属さない、多くの一般登山者の登山形態となっている。企画会社の企画登山(カタログ登山)を選択し、対価を払って参加する。引率ガイドのリードにより、カタログ明示目的内容を実施する登山。責任範囲は約款によるが、裁判となるケースも近年は出現。海外登山はもとより、今やエベレスト登山までもがこの範囲に含まれる実体にある。

次のファッション登山同様、大衆化は日常性を山岳に持込み、山岳施設整備は非日常的な山岳自然を日常化させ、消費産業構造化を促進させる経済文化現象。

#### 【 B-6 】ファッション登山 …… 社会風潮形

社会の流行(風)に乗っておこなわれる、大衆化登山。山岳自然の非日常的危機に弱い。大衆社会の日常性を山岳に持ち込み、山岳施設整備は非日常的な山岳自然を日常化させる。ファッションブル、山の食グルメ化、山岳施設整備(トイレ、登山道、山荘のホテル化、等)等々、消費産業構造化を促進させる経済文化現象。

#### 【 C-1 】ワンダーフォーゲル …… 鑑賞自立形

「渡り鳥」を意味するドイツ語で、山嶺を気ままに渡り歩くような登山形態。

戦後の学校教育活動に組み込まれ、山岳部ほどの厳しさが無いゆるやかな登山傾向で、男女混成グループとして人気を得た。現在では高校、高専部活動でインターハイ競技はあるが、大学にワンダーフォーゲル部が残る程度に減少。

しかし現在は低山縦走登山などにより、ワンダーフォーゲルの思想性をもたない、スポーツ・ファッション的な気軽さで復活している。

## 5 章 . 登山の方向性

2013年6月から毎週末の一日、私は表丹沢歩きに復活しました。丹沢を3年間にわたって歩いてみますと、登山者の様変わりを目にします。山スカートは当たり前、積雪のある冬でさえ、山スカート姿を見受けます。山ガールならぬ、タイトに半ズボン姿の高齢男女の姿も当たり前となり、一様にストックを両手に携え、大倉尾根へと向かいます。

「山ガール」という言葉が流行ってから、ずいぶん時は過ぎました。エベレストの女性初登頂者＝田部井淳子さんの造語ということは、以前に新聞報道で知りました。山ガール、山ボーイ、山ジーヤ、山バーヤ、……デジタル時代の造語には、4文字熟語が並びます。この多様化は近代技術の特徴、「**軽・薄・短・小**」そのものを表現します。アナログ時代であったなら、とても手にして操作できないスマートフォンは、まさに「**軽・薄・短・小**」技術の代表です。さらに腕時計形のウェアラブル端末のよう、「**軽・薄・短・小**」技術はますます進歩します。この文明進化の方向性は、誰にも止めることができない人類の性向です。人類の文明史観は、時間軸の流れと同じ方向に向かいます。デジタル技術により、人類は時間を切り刻み、余分な時限空間を圧縮する技術さえ取得しましたが、時間が過ぎる方向性の制御技術は、未だ獲得できていません。つまり肉体を伴った人間個体として、過去や未来へとワープする、時限制御技術までは取得できていません。それゆえに時々刻々の出来事は時間の進む一方向に継続し、都度の記録は歴史として残されます。もし、ドラエモンのドコデモドアがあったとし、任意な時限空間へと人体がワープすることができるなら、人類の世界観は全く異なったものとなるでしょう。だが人間の「**意識の世界**」においては、虚空時限空間を任意に思い浮かべることができません。人体で統合される人間意識はすべからず、各種の感覚センサによって変換された信号が、脳を中心とした信号統合機能によりアウトプットされた「**パターン認識効果**」です。確かに実在を反映しているものの、**信号効果**でしかありません。

宇宙のエネルギー構成において、人間が見、知ることのできる物質はたったの

5%以下で、残りは目に見えず感じることでできない**暗黒エネルギー**や**暗黒物質**で構成されているそうです(『宇宙になぜ我々が存在するのか』、村山斉、講談社、2013)。人類が**科学的、客観的根拠**として証明する物質は、**宇宙のたった 5%以下な存在**でしかないとされます。量子物理学では、量子の確率的位置変位をもって現象の予測、説明をしますが、人間が確認できる**たった 5% 以下の物質**を捉えて宇宙を説明することは、未だ**不完全な世界認識**領域です。宇宙の諸現象を科学として捉え、客観的に説明することの限界、その気づきは、**現代知性の課題**となっています。逆説として、だから科学の進歩はこれからだ、ということもできます。さらに、目に見えない世界を含む**人間の意識思考統合**は、科学の実証限界を超えた意識機構、認知・創発システムの**信号**により、**形而上的に統合**している再認識が必要です。

## 1節. 複素的視野から示す登山様式

本論で提起する思考法が『**複素的世界認識**』です。細かな説明は省略するとして、その構造を【**図-5**】(P-109) に示します。電気技術者や量子物理学者は数学の「**複素数**」を駆使して計算、理解、説明をします。「**複素数 = 実数 + 虚数**」です。「**実数**」は目に見え、数えることができる数のこと。「**虚数**」は目に見えず数えることができませんが、そこに虚な数(imaginary number)を当てはめるとうまく説明することができる数のことです。虚数記号は頭文字をとって、「**i**」(アイ) で表しますが、電気技術者が扱う「**i**」は電流記号を示しますので、電気技術者は虚数記号を「**j**」(ジェイ) としています。実数(X,Y) と虚数(Z i) をベクトル表示すると、【**図-5**】(P-109) のように三次元空間として表現ができます。X,Y の二次元平面は、目にみえ、数えることができる「**現実の物質世界**」を表し、目に見えず、数えることができない**意識の世界**は Z i 軸方向の「**虚な意識世界**」を表します。この物質世界と意識世界を三次元に組み合わせた世界を「**複素的世界**」と仮称しました。

目に見える「**物質世界**」と、目に見えない「**意識世界**」を組み合わせた**複素的世界認識**は、目に見える実相社会を数値で評価する**実数軸**と、目に見えない虚な社会をバーチャルリアリズムとして可視化させるデジタル技術によって、**虚数軸**の

世界までも認識表現の対象として取り込むことに成功しつつあります。しかしデジタル技術のみが先行し、人の意識世界をバーチャル認識として理解する一般論は、未だ不毛な段階にあります。

現実と意識の現象世界を電気現象理論から**フラクタル**に論理構造を着想し、それが人間の脳内統合機能として意識の中でおこなわれることは、容易に理解することができます。しかし文系の人々にとっては、なかなか理解しがたい思考法だと思われれます。「**複素的世界認識**」では、**X** 軸方向を「**文明**」とし、**Y** 軸方向を「**文化**」とし、**Z** 軸方向を「**意識**」とすると、現実のあらゆる現象をこの空間内に位置づけて理解することができそうです。

登山様式を複素的世界認識同様にベクトル表現してみたものが、次頁の【**図-3**】となります。**X** 軸方向を「**文明度**(進歩)」、**Y** 軸方向を「**文化度**(趣味)」、**Z** 軸方向を「**統合意識**(価値)」とします。**X—Y** 軸平面二次元要素を合成するベクトルは、目に見える形での**現実社会**を表します。さらに**Z** 軸方向の個人意識によって統合され、個人的評価意識(価値)となって自らの**価値認識**となります。個人意識が集合したところに社会意識が同期・同調・合成された**澱み**(部分集合)が生まれ、**社会風潮**が生み出されます。いわゆる「**世間の空気**」です。(山本七平『空気の研究』)

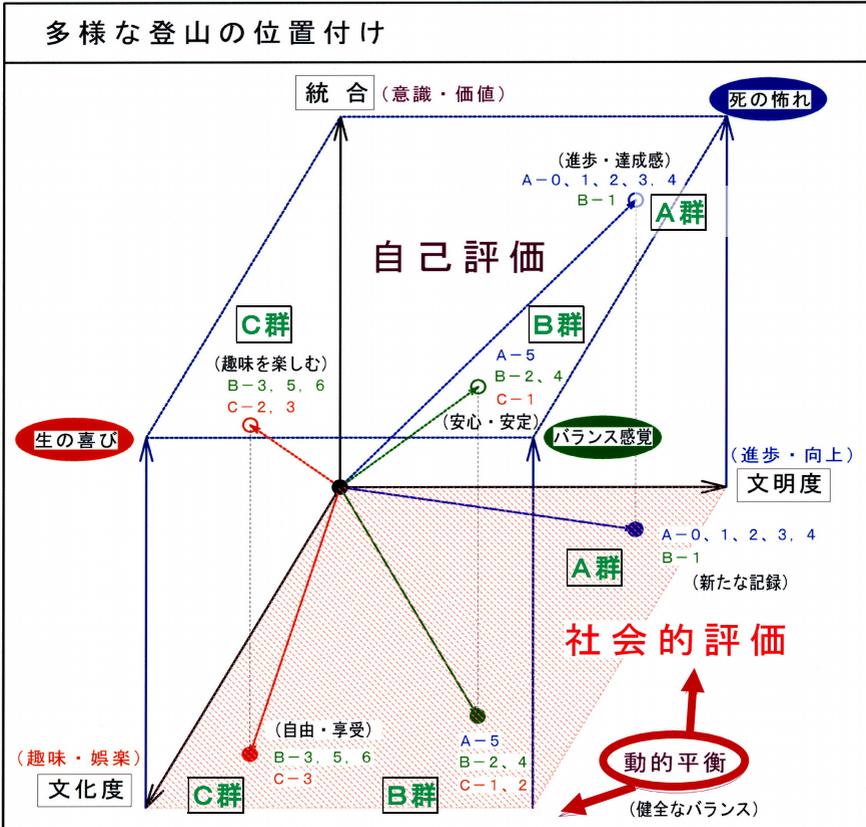
## **A 群 : アルパイン登山、レコード登山**

このスタイルは「**進化と統合**」の方向性が強いことを特徴とし、より客観的なパフォーマンスにより、その評価(評価価値)を知らしめる傾向を表します。進化の方向性は、その時代の社会的要請や自己の根源的欲求の発露という、明確な方向性と強い理念が支えます。個の欲求と社会的要請がマッチングする明確な方向性は、確たる理念や強いリーダーシップとなって表現されます。例えば戦後の高度経済成長社会と、より高くより困難な登山を求めたアルピニズムとの、特性マッチング(同調)がありました。日本を飛び出し、アルプス、ヒマラヤの山々で初登頂や新ルートの初登攀など、平和を象徴する華々しい戦後登山の黄金期がありました。しかし地球のそなえる自然の有限さは、地球環境問題同様、登山様式にあっても例外ではありません。社会が要請する客観的登山評価には、終わり(限界)があるのです。

【図—3】 登山様式のベクトル表現

登山様式	要素ベクトル	スポーツ様式
<p>アルパイン登山</p> <p>A-0 A-1 A-2 A-3 A-4</p> <p>レコード登山</p> <p>B-1</p>	<p>(意識・価値)</p> <p>統合</p> <p>(進歩・達成感) 自己評価</p> <p>(進歩・向上)</p> <p>文明度</p> <p>文化度 (趣味・娯楽)</p> <p>社会的評価 (新たな記録)</p> <p><b>A群</b></p>	<p>競技 スポーツ</p>
<p>アルパイン登山</p> <p>A-5</p> <p>メモリアル登山</p> <p>B-2</p> <p>ヘルス登山</p> <p>B-4</p> <p>ワンダーフォーゲル</p> <p>C-1</p> <p>アルパイントレッキング</p> <p>C-2</p>	<p>(意識・価値)</p> <p>統合</p> <p>(安心・安定) 自己評価</p> <p>(進歩・向上)</p> <p>文明度</p> <p>文化度 (趣味・娯楽)</p> <p>社会的評価 (健全・バランス)</p> <p><b>B群</b></p>	<p>レジャー スポーツ</p> <p>レジャー ウォーキング</p>
<p>コレクション登山</p> <p>B-3</p> <p>ツーリズム登山</p> <p>B-5</p> <p>ファッション登山</p> <p>B-6</p> <p>ツーリズムトレッキング</p> <p>C-3</p>	<p>(意識・価値)</p> <p>統合</p> <p>(趣味を楽しむ) 自己評価</p> <p>(進歩・向上)</p> <p>文明度</p> <p>文化度 (趣味・娯楽)</p> <p>社会的評価 (自由・享受)</p> <p><b>C群</b></p>	<p>レジャー スポーツ</p> <p>レジャー ウォーキング</p>

【図-4】 登山様式の総合ベクトル表現



種別	様式	危険度	形式	代表例
A-0	アルパイン登山	大	超人形(ソロ)	ラインフォルト・メスナーの登攀
A-1			単独形(ソロ)	(初)登頂・登攀・踏破
A-2			複数形(パーティ)	(初)登頂・登攀・踏破
A-3			企画事業形	〇〇(初)登頂・登攀・踏破
A-4			企画公募形	〇〇公募登山、ガイド登山
A-5			交流形	ガイド登山(有償/無償)、登山教室
B-1	レコード登山	中	記録更新形	〇〇条件付(初)登頂・登攀記録
B-2	メモリアル登山		記念顕彰形	〇〇記念・顕彰登山
B-3	コレクション登山		収集蓄積形	7サミット、日本100名山、〇〇△名山
B-4	ヘルス登山		健康希求形	市民・学校・職場・高齢健康登山
B-5	ツーリズム登山		観光引率形	〇〇ツアー登山(ガイド付)
B-6	ファッション登山		社会風潮形	社会風潮(山ガール・山ボーイ)
C-1	ワンダーフォーゲル	小	鑑賞自立形	高校インターハイ、大学ワンダーフォーゲル
C-2	アルパイン トレッキング		鑑賞自立形	〇〇トレッキング(ガイド無し)
C-3	ツーリズム トレッキング		観光引率形	〇〇ツアートレッキング(ガイド付)

人類のパイオニアワークたるアルピニズムには、その終焉の必然性も同じパッケージの中に含まれています。しかし個人的評価となる個の意識の局面にあつては、それぞれの人生という一つのサイクル(周期)が終わると、次なる新たな生命の人生もまた、別な人生のサイクルとなり、一人ひとり個における「**より高く、より困難を目指す登山(アルピニズム)**」は存続し得ることになります。つまりアルピニズムは、人類のマクロな局面から、個のミクロな局面へと相移転することにより、その理念を引き継ぐことができます。アルピニズムの変質です。同様に「**レコード登山**」においてもその記録の意味は、もはや**人類の記録**としてではなく、**個体としての記録**へと相移転されます。

アルピニズムの実践には、「**ステップ・バイ・ステップ**」という段階を経て、それぞれの限界へと挑む手順がありました。その積み重ねの努力の中から、人が自然と対峙して切り抜けてゆく**知恵と経験**が獲得できました。最初は弱かった者が次第に強くなり、やがて自然に対峙できるまでの**知恵や経験**へと「**進化**」していきます。その特性はまさに、**人類が生き抜く方向性そのものと重なり**ます。それゆえに進化の概念は、**文明ベクトル**と方向性が合致するのです。

## **B 群： コレクション登山、ファッション登山、ツーリズム登山**

このスタイルは「**趣味**」の方向性を強くし、主観的なパフォーマンスによってその評価(享受価値)を知らしめる傾向を表します。主観的な趣味の領域ですから、それぞれ個の選択枝は他者相関性がありません。多様なあり方は確たる理念や統一性に欠け、リーダーシップも不要となるからこそ、混沌とした**何でもあり状態**となります。一つの登山には、一つの**物語**として完結させるだけの知識、技術、経験、マネジメントが不可欠です。しかし単なる**趣味登山**にあつては、アルピニズムの順序だった手順による知識、技術、経験を積み重ねた知恵の領域は、省かれます。登山とならぶ他の趣味もあるし、登山は日常生活の中で一つの**生活リズム**の変化でしかありません。そのような**大衆登山者**にとり、最も手軽に活用でき、煩わしさを省けるのが、**商業企画登山**への参加となります。今、戦後第3の登山ブームは、まさに現代の経済産業成長社会の一翼を担っています。余暇とお金と意欲があれ

ば、特別な知識、訓練、経験の積み重ねがなくとも、日常生活の延長として容易に山岳自然環境を楽しむことができます。

登山者は専門ツアー会社の多様な企画の中から、好みのコースを選択します。山岳情報の提示(TV、インターネット、雑誌、新聞、カタログ、パンフレット)、用具の調達案内、交通アクセス、山岳コース案内(ガイド登山)、宿泊・交通手配等々、登山者自身は暇とお金を用意すれば、簡単に参加することができます。登山の大衆化とは、この一連の流れが消費産業構造化され、経済成長社会の文化現象として推進されます。登山者は趣味を享受することにより、物資とサービスの消費者となり、それを提供する産業界やサービス業界も一体となり、文化生活の消費需要者となります。今まさにエベレスト登山でさえこの流れの中にあるといわれ、登山の主流となっています。

一方でオールド・アルピニストから見れば、自然を通して培う人間力の成長にとり、一連の産業化は人間と自然の間に隔たり(人工化=文明)を設け、自然に対する人間の弱体化を促すものだ、と理解します。仲間の生死をともなった、また自身も死の淵から生還した限界体験を経ると、前者の消費登山への魅力はありません。ただ消費するだけの趣味の世界から、人間文化のいかなる価値を生み出せることでしょうか。 エントロピー増大の法則は、消費に使われたエネルギーは再使用できないので、ただ廃棄物と化して溜まるだけになることを示します。

例えば山岳遭難事故は、交通事故に出会うような意識の持ち方です。まさか自身が遭難すると思って登山する人はいなくなり、山岳遭難事故に対処する事前の準備と心構えがありません。アルパイン登山やレコード登山のように、安全限界と危険領域を事前に意識して対処する、ハードな登山形態とは大きく異なります。

### C 群 : メモリアル登山、ヘルス登山、ワンダーフォーゲル

このスタイルは、客観と主観のバランスをとる方向性を帯びたパフォーマンスによって、その評価(価値)を知らしめる傾向を表します。このグループは社会的にも個人的にも、進歩や趣味を極度に主張するものではなく、両者のバランスを図る安定志向の中に、新たな価値を認めようとするものです。



以上の説明は定性的に述べたものであり、調査統計による数値実証説明する量的研究と統合し、新たな説明を試みる必要があります。それら研究は別として、ここでは入口となる概念だけを示すに止めます。

## 2節. トレッキング

「**トレッキング**」は山登りが目的でなく、山を眺望し、山岳自然を歩き巡ることを指しています。ヒマラヤ・トレッキング、アルプス・トレッキング、目的の山域名を付した「〇〇トレッキング」と数え切れないほどあります。

例えばエベレスト・トレッキングの一例では、エベレストの山麓を歩きますが、トレッカーは私物の衣服と貴重品しか背負わず、その他の案内・衣・食・住はガイド(シェルパ)とポーター(運搬)によって運搬、設営、用意をしてくれます。トレッカーはサーブと呼ばれ、まさに大名のような物見遊山です。勿論自前で行なうトレッキングもありますので、大名の物見遊山ばかりと限りません。

類似な行為としては江戸時代後期に始まる物見遊山と通過儀礼を兼ねた「**講**(こう)」があり、今は世界遺産となった富士山を巡る「**富士講**」や、丹沢・大山に詣でる「**大山講**」は、昔から名高いものでした。講は修験道の精進でなく、信仰巡礼や物見遊山＝観光とした、苦行でない楽しみを味わうためのものとなります。講や修験道は、それ自体で独自の発達と研究が成されており、近代登山と異なる別ジャンルに整理、理解されています。

**講の通過儀礼**＝小泉武栄、『登山と日本人』、(角川ソファ文庫、2015年)P.110-111

### 3節. 山岳スポーツ

「山岳スポーツ」における「スポーツ クライミング」は、2020 年東京オリンピックの追加競技種目に決まりました。テレビニュースは、屋内人工壁を登る様子を放映しています。もはやスポーツ クライミングは山岳自然環境とは別な人工壁により、登攀力(クライミング)を競う純粋スポーツとなります。どんなに難しいオーバーハングのクライミングに失敗し、墜落しても、生命の安全は確保される技術とルールに則り、競技します。生死を媒介とするアルピニズムの限界追求と、その山岳自然領域とは全く別物の「人工壁登攀」となります。スポーツ クライミングは単純な登山の定義、「登山とは山に登ること」から逸脱した領域であり、登山と異なる「界」分類として「山岳スポーツ」に分岐します。

スポーツ クライミングの登攀技術は、アルパイン・クライミングに類似します。しかし自然な山の岩壁・氷壁・雪壁を登るアルパイン・クライミングに比べ、屋内外の人工壁や安全を担保して登るスポーツ クライミングは、登山と別世界として考え、取り扱う時節となりました。

本論では、「山岳スポーツ」として独自の分岐、分類をしました。「登山」ではないことから、本論



【日本アルパイン・ガイド協会 facebook より】

の考察対象から除外します。しかし現実の山岳自然において、登山と山岳スポーツの場は共用しています。山頂や山稜をランナーが駆け抜けます。岩壁の確保支点整備と称し、**電動ドリル**で岩壁に穴をあけてボルトを埋込み、安全性を確保した上でスポーツ クライミングがおこなわれています(前頁写真)。

アルピニズムの登攀で**コンプレッサー・ドリル**が初めて使われたのは1970年、パタゴニアの針峰、セロ・トーレです。イタリアのクライマー、チェザレ・マエストリは、1,600mの岩壁に約400本の埋込みボルトを打込みましたが、完登はなりませんでした。別なクライマーによって完登され、「コンプレッサー・ルート」と名付けられます。

**1970年代日本の岩場**においては、コンプレッサー・ドリルの使用は登攀モラルに反するとして、**誰も使いません**でした。日本の岩壁では、登るための埋込みボルト使用を最小限度に自己制限します。埋込みボルトの取り付けは、穿孔キリ(ジャンピング)の頭をハンマーで叩きながら回し、少しずつ岩に孔をあけます。その孔にエキスパンション・ボルトを差込み、ボルトの頭を叩くと孔の中で先端が開いて岩に固定されます。クライミングとは別な腕力、体力を要するため、ある面で職人技と言われます。

今では建設現場で、あと施工アンカー方式が多用されています。コンクリート壁や天井に充電式携帯ドリルで穿孔し、その孔に目的に適う各種、各サイズのホールインアンカーを打込みます。これと同じ用具を用いて岩壁に穿孔し、リングボルトを埋め込めば、容易に堅固な確保支点を作ることができます。しかしかつて日本の岩壁で、**電動ドリルを持って登るアルピニストはいませんでした**。

谷川岳は「**魔の山**」といわれ、2012年までの遭難死亡者数は805名といわれます。その中でも特別に顕著なのが、一の倉沢の岩壁登攀です。私が熱中して登っていた1970年代にあって、埋込みボルトは最小限度に抑えられ、人工登攀はハーケンを中心としたものでした。リス(岩の小さな裂け目)に打込むハーケンの支持強度は一律でなく、ガッチリ固定されるものから、体重をかけると抜けてしまうものまで、様々です。ハーケンに身体をあずけ、もし抜けてしまった場合は墜落となります。同様に不確かなハーケンの場合、確保者も一緒に引きずられて墜死するケースが、ままありました。私は一度だけ、アイスハーケンのリングが外れ、墜落したことがあります。それは厳冬の谷川岳一ノ倉沢滝沢リッジのドームで、オーバーハングの乗

つ越しの時でした。約 10m の墜落でしたが、雪だまりの基部へ落ちたためショックもなく無傷です。ちなみにフリークライミングの本番で、私は一度も墜落したことはありません。

固定ボルトは、一定の強度確保が期待できます。しかしキリで人為的に岩に穴をあけるわけですから、自然(ワスヤクラック)を利用することにならず、人工登攀(アーティフィシャル・クライミング)と呼んで、その**使用制限**に対してクライマーは、一線を画していました。なるべく人工的手段を使わずに登るのが、**アルピニズムの精神**(モラル)でした。

山岳スポーツとしての「**フリークライミング**」は、それら人工的手段を使わない身体能力だけで登ることを旨としています。さらに「**リード クライミング**」における確保用支点には堅個なボルトを複数打込み、リードの途中にも堅個なボルト支点到にカラビナをセットし、ロープを使った落下制動により墜落を止めます。確かに安全性は格段に増し、谷川岳の墜死事故は激減したようです。

この「**山岳スポーツ クライミング**」と「**アルパイン・クライミング**」の違いは何かを考えると、それはたかだか「**感性の違い**」程度でないかと思われます。アルパイン登山は自然に敗れた場合の「死を受け入れます」が、山岳スポーツはそれら自然の脅威たる「死を受け入れず」、安全担保としての施設整備やルート整備を積極的、人工的におこないます。クライミングにおいては、人工支点の整備(固定ボルト)、落下安全装置の設置(クラッシュパッド)、トップロープ・クライミング方式導入(上部からロープで確保)等々です。つまり「死を受け入れる」ためには、哲学や思想、宗教的心や芸術美的な感性等々、「精神文化要素」が多くを占めます。「死を排除する「スポーツ」」にあっては、肉体パフォーマンスの鍛錬と直感、結果の記録性が重要なテーマとなります。また肉体パフォーマンスの最適化は、科学的合理性と訓練によって助長することができます。つまりスポーツは文明と同じ位相にあつて、ひたすら進歩、向上、発展、進化を目指す一方方向性傘下と理解できます。アルパイン登山、レコード登山も同じような位相にあります。大きな違いは、「死を受け入れた上での行動(アルパイン・クライミング)」なのか、「死を排除した行動(スポーツクライミング)」なのか、の差異に帰着しそうです。

## 4節. アルピニズムと生の弁証法

太平洋戦争後、荒廃から立ち直ろうと皆が努力した日本の戦後社会の中で、戦争の死の重さを背景として、「生の弁証法」が成り立ちました。以来70年が過ぎる昨今から未来へかけて、親→子→孫へと3世代の**家族代謝**がおこなわれています。その過程において、「**死生観と生きることの意味**」は、大きく変わってきました。

特に21世紀の文明変化は、18世紀以来の産業革命に匹敵する、大きな社会・産業構造変化をもたらせる、「**電子化革命**」となっています。その考察は随所でおこなっていますが、本節においては「**アルピニズム**」を「生の弁証法」から「**電子脳**」的に考察してみることにします。

21世紀の日本社会は、平和希求憲法の下で「**人の死を遠ざけて**」います。再び戦争を仕掛け、殺したり、殺されたり、人為的**死の文明**こそは遠ざけるべきものですが、その反面で「**人の死を遠ざける文明・文化**」を培いました。多くの人々は老衰の死期が迫れば病院へ隔離され、高齢期にあつては特別養護老人ホームへ隔離され、家族から引き離され、家族が親の衰亡と子へ引き継ぐ**代謝**(世代交代)により継続されてきたことの過程を、遮断させています。そのような「**人の死を遠ざける**」ことにより、逆説的に「**生きることの意味と、生きていることの実感**」を失ってしまった、と理解できます。「**生と死の断絶、そして生の実感**」過程こそが、「生の弁証法」であり、「**生きていることの意味**」を知ることができる、実存的な在り方でした。

終戦翌年に生まれた私自身の今に至るまでが、まさに戦後70年そのものを生きてきたことに当たります。そんな私が青春のニヒリズムに感化されていた時、しがらみの濃い家族の継続は邪魔な負担に感じ、子供を産み・育てることには否定的な理解でした。自身が生きることの意味も分からず、ただ生きることに不安を感じ、生きていく自身の心の余裕もありませんでした。私が青年期で最も恐れたのは、「**死の恐怖**」でした。そんな時私は、18歳から登山を始めます。最も怖いはずの「**死**」と背中合わせなアルパイン登山を始め、山岳自然を通した登山行為の中で、「**死との対話**」を繰り返します。初めて谷川岳一ノ倉沢の岩壁を登った時、食べ物は喉を通らず、ただただ自然の脅威に慄きました。

そんな私でも、体験を重ねるほどに山岳脅威に適応します。山岳脅威を乗り越える体験の積み重ねが生きる自信となり、振り返る楽しさと安堵を楽しめるようになります。そのような体験を10年積み上げた28歳の時、初めてヒマラヤ岩壁登攀に出掛けるまでに成長します。さらに32歳の時、ヒマラヤ大岩壁の氷河崩落遭難事故の中で吹き飛ばされ、「生死の審判」を受けます。結果、私一人だけが生きて残され、死んでしまった3名の仲間を、ヒマラヤ山中に埋葬しました。

この審判がどのように下されたのか、今もって私にはわかりませんが、そこに「神」を持ち出して語る神性を、私は持ち合わせていません。私は神性よりも、量子物理学から導かれる「不確定性原理」に着目し、遭難での生死は「登山の必然な系と、自然の必然な系が、偶然に出会ってしまった結果」と理解しました。そして「死」は恐れるものではなく、「死ぬときは死ぬし、死なないときは死なない」という単純な、「生と死の受容原理」を受け入れます。結果、理性と精神の安定を保てることが分かりました。しかしこの方法は、生と死の極限状態から生還できた場合の論法です。この経験は一種、重度な麻薬の享樂とも似ています。また戦場の兵士が戦闘の極限状態を体験した後に帰還し、その後「心的外傷後ストレス障害(PTSD)」に陥るケースにも、良く似ています。日常生活における、非日常体験との共存の問題です。そのためには、「なぜ？、何のため？」を問い続ける興味と、事前の学習から得る推論(演繹)とが統合された、哲学的確信を要します。

死を媒介とした弁証法は、ニーチェが説く「超人」を導く普遍的原理であっても、日常社会への適用は刺激的過ぎます。しかしながら、極限の非日常体験は、日常社会の精神に「心のゆとり」を生み出すことも事実です。そのことがまた、自然のあらゆる偶然性を受け入れられる【受容の精神】を生み出し、【精神のゆとり】を育むことといえます。この貴重な体験を経た私は「死を媒介した、アルピニズム登山に含まれる〈生の弁証法〉」に気づき、その結果として【受容の精神】と、【精神のゆとり】に気づきます。次に述べる、「意識の経験学」といえます。

弁証法的手法は古代ギリシャ(BC450~BC350頃)において、ソクラテスの「問答法」や、プラトン、アリストテレスによる「弁証術」がすでにあったといわれます。その

後ドイツの哲学者ヘーゲル(1770~1831)により、「テーゼ=正、アンチテーゼ=反、ジンテーゼ=合」へと定式化されます。

「ヘーゲルの弁証法」には、二つの面があるとされます。一つは「意識の弁証法」とし、意識は己の性質(自己インピーダンス)に則って、己が保持する「真・有」意識と知識とのズレを修正しながら、自然の实在のありのままの本質や法則性を概念化する「学知」を高めていく、「意識の経験学」といわれます。もう一つは「弁証法(的)論理学」であり、前記の「正、反、合」三段階の定式化です。

「意識の経験学」は、先に述べた私自身の体験から、本論を展開させていることでもあります。「弁証法(的)論理学」は「死を媒介した、アルピニズム登山の生の弁証法」となり、以下の三段階へと定式化できます。

正 (命題) = 死の領域における登山者として = 人間存在者として死は必然、

反 (反命題) = 主体的に自然の中で、死に抗して生きる = アルピニズム登山

(死を回避して生き抜く心技体と知性による抵抗は、生の最大な充実感が得られる)

合 (統合) = 偶然を受容し、生の充実感性を得る = 自然の真理を受容し自己

統合と自己確認 (生きることの意味を知り、偶然をも受容する)

以上は、ヘーゲルによる意識の経験学とその論法を真似た標記です。

「アルピニズム登山を通じた生の充実感性」とは、「死」を介在させた身体と意識、知性、理性、感性によって人間統合を図る、実存的生き様となります。その生き様は、「神は死んだ」とするドイツの実存思想家、ニーチェ(1844~1900)がいう、「ニヒルな人生を克服すべく、自ら確立した意思により、個人主義を乗り越えるべく至高者となる」、つまりニーチェがいう「超人」に近づこうとする努力の方法論となり、その実践的登山者を「スーパー・アルピニスト」ということができます。

さらにプロイセン(現・ドイツ)出身のマルクス(1818~1883)は、「唯物弁証法」を提示します。「弁証法的に運動する物質が、精神の根源である」として、人間機械論的な発展概念を導き、科学万能、共産主義革命を導きますが、共産主義社会「ソビエト連邦(1922~1991)」の解体により、存在は薄れました。

私は青年期のころに、『弁証法の諸問題』(武谷三男、勁草書房、1966年)、『統・弁証法の諸問題』(武谷三男、勁草書房、1966年)や、『人間機械論』(N. ウィーナー、みすず書房、

1969年第20刷)を読みました。しかし**弁証法**と**アルピニズム**が結びついたのは、2013年に中村純二先生(東京大学名誉教授)が「東京大学山の会」の祝賀懇親会でご挨拶された文書をお手紙と一緒に送っていただき、拝読したときでした。その文書にはヘーゲルという名前やアルピニズムという言葉は出ていませんが、「東京大学山の会」の登山変遷を、「**正・反・合**」に位置づけて述べられます。ヘーゲルの弁証法を念頭に論じられていることは一目瞭然ですが、この「**正・反・合**」の三段階構造は、「**アルピニズム**」そのもではないかという直感的理解でした。究極な登山の中で「死」を超克する「**スーパー・アルピニスト**」は、まさにニーチェのいう「**超人**」となり、超克の過程こそが弁証法と同じ、**正**=**アルピニズム**=**死の領域**、**反**=**登攀**=**死を否定する行為**、**合**=**生の充実感**、であることに気づきました。

ニーチェの「**超人**」思想は、一般大衆を「**畜群**」と称してそれを超越しようとする、「**自立意思**」を強調するもので、先鋭的な登山者には馴染みませんが、大衆登山者に馴染む考え方ではありません。他方、経済・政治優先社会の中では、一握りの大富豪や独裁者を許容する論理を含んでいることにも気を付けねばなりません。

あえて大衆文化に反骨を示す「**変人**」の出現は、物質文化で平準化されている省エネルギー社会の中で、極々少数者となります。この社会的マイノリティな存在を、経済優先グローバル資本は切り捨てていきます。グローバル経済は世界の富を偏在させ、上位たった1%の富裕層の合計が、それ以外99%の人々の富を上回る状況をつくっている。(2016.07.14 朝日新聞報道:バニー・サンダース米上院議員のNT記事抄訳) 富裕層の資本に踊らされ、大衆はひたすら低賃金で働かされ、働く職業さえも得ることができないある者は、アルコールや麻薬で自我を忘れて時を過ごします。

戦後70年を過ごし、平和にドップリとつかった現在の日本社会の中で、あえて「死」を介在させる「**弁証法的アルピニズム**」が、大衆文化となって定着するわけがありません。「**アルピニズムは、死んだ**(本多勝一)」と理解できる要因です。

「**変人**」の一人、小泉純一郎・元首相(2001.4~2006.9)の「**郵政民営化選挙**(2005.9.11)」では、自説の主張を**正**と位置づけ、反対する勢力を「**抵抗勢力**」と決めつけて**反**と位置づけ、**正反**二極対立を煽ります。圧倒的多数を得た小

泉政権は **正** の体制を再構築し、破れた **反** の勢力は圧倒的弱者、少数者となって勢力を削がれます。その結果、**正** ~ **反** を結ぶ中間的勢力が抜け落ちてしまい、**正** の強権政治が始まります。現在のソーシャル・ネットワーク(SNS)における「いいね」の一押しを統計処理し、ランキングに位置づける手法も同様です。情報の深層にあって表現しえない複雑で微妙な真理が欠落し、SNS でつながる人々をパターン化した「畜群」に分け、その「群れ」の中でランキングを与えています。いわば「コップの中での嵐」であり、コップの外の異なった「群れ」との関係性はありません。このことは SNS に限らず、あらゆる統計ランキングについてもいえます。特に「スポーツ」は、都度のゲーム結果にポイントを付し、ポイント数の多少でランキング順位を定めますが、別なゲーム(コップ)との関係性はありません。「登山」と「山岳スポーツ」を区分した主旨の一つでもあります。「登山」には弁証法が適していますが、「山岳スポーツ」に弁証法は合わず、グローバリズムのランキングが適しています。その最高峰が「オリンピック・ゲーム」となるわけです。

選挙は民主主義体制を築き、運営(行政)する現代社会の最良手段であるわけですが、問題は多数決による 49%以下の「反対勢力とどのように対峙するか」が重要です。反対勢力を弱者として切り捨てるか(=死)、他方、弁論会議(議会)によって反対意見を尊重しつつ合意形成努力が図れるか(=生)、弁証法三段階定式による **合** の形成努力は、民主主義社会を維持できる最善な方法ではずです。圧倒的多数を得てしまった権力は、この真理を忘れてしまい、選挙という手段によって民意の多数を獲得した **正** の正統性ばかりを主張します。

昨今の国会は**討論**(ディベート)によって論旨の正しさばかりを主張しています。**正反** 議論(学び合う)を経ることなく、過半数獲得をもって成立としています。会議本来の目的である「国民の代表が集まって相談(議論)し、その上で意思決定(採決)をおこなう営み」という機能の中、異なった意見を学び合う「**議論**」が欠如しています。**正** の主張と **正** の数で意思決定をおこない、異なった **反** の意思との弁証意見を反映した **合** の結論ではありません。つまり、過半数以上の正統性をもって、過半数以下の **反** を切り捨てていることになるからです。

この現象を顕著に助長させたのが、「小泉郵政選挙」であったという指摘です。

**討 論** (debate) : 論破により自己主張の正しさを論証する方法。

異なった意見の持ち主が議論を戦わせ、互いに主張の正しさを論証する営み。

**議 論** (discussion) : 多様な意見を学び合う方法。

異なった意見の持ち主が集まり、お互いの意見を語り合うことにより、多様な意見があることを学び合う営み。

**会 議** (meeting) : 関係者が集まって相談し、意思決定をする営み。

**正**・**反** 二者択一手法は、コンピュータ信号の「0」か「1」かの**二進法**に由来し、中間的曖昧さや雑音を反映しない明確な情報となります。**討論**(ディベート)から**採決**という手法は、**議論**(ディスカッション)を省いた一極(正)の採択となり、対極(反)を切り捨てる**政権運営**手法です。その結果 **正** という体制側への**一極集中**を煽り、弱者、少数者となる抵抗勢力は **反** として切り捨てられたままとなります。

宇宙には物質と反物質の対称的存在があり、**正**(物質)・**反**(反物質)が打ち消し合って**消滅**してしまうのですが、そのうちのたった**5%**以下が打ち消し合うことができずに、「**物質**」(正)として宇宙に残されたと、物理学は説明します。

このたった**5%**以下の「**物質**」を **合** とみなし考察すれば、**合** の中には宇宙原理でも打ち消しえない、**多様な存在**であることに気づくことができます。この**多様な存在**こそが**5%**以下の**物質**であり、人間や**生命体**もその中に含まれます。

宇宙真理の対称性と **正/反** 自己消滅から考察すれば、**正**、**反** の対極からではなく、**合** における**弁証法的統合**こそが**物質的実在**をもたらせ、人類も文明と文化によって**生命の営み**を継続していると考えられます。

政治体制を例にすれば、独裁制や一極専制でない、**民主主義と弁証法**です。しかし**今、この民主主義と弁証法が、世界で破綻をきたしています**。民主主義を代表する代議員制度の間接民主主義体制は、今や代議員が「**民**(個)」を代理するものでなくなり、経済産業社会や地域利得の「**群れ**」を代理するようになりました。結果、民の心は群れの決定と乖離し、民の心のむなしさばかりを助長します。民

の政治的無関心は、アナーキー(無政府主義)で無抵抗な、**無気力社会=畜群**、を助長させます。

一方で**電子情報技術**(コンピュータ、SNS)は、手の平に乗せた端末器を指先で操作し、電波や光ケーブルによって世界の多様な情報へアプローチできます。新世代層にとり、ウェブでつながる**ネットワーク・コミュニケーション**は、**絆**という **合** の手段を容易に得ることができます。しかし平準化社会で生育した新世代層の人々は、検索により**知識は豊富**に得られますが、**体験をともなった知識と知恵**でないために、情報に隠されて表しきれない深層までを知ることができません。検索で得られる情報には、**正**と**反**の中身が乏しく、弁証結果の**合**においても、電子文明の特徴である「**軽・薄・短・小**」そのもの傾向を反映させています。電子文明の虚相世界(バーチャル・リアリティ)からは、スーパー・アルピニストの**生命をかけた決断、判断、その体験をもたらせる人間的統合力(腹が座る)の力強さ**という、**実存力**が育ちません。

「**超人**」をその単純な言葉のとおり理解すれば、大衆と異なる「**スーパースター**」という、異次元な存在となります。**大衆と超人**との落差に含まれている文化的価値は、大衆が望む**コマーシャル価値**に比例し、大衆の多様な欲望を叶える商業化となって、落差の大きさに比例した**交換価値**を生じることになります。交換価値を持たせることを拒み、純粋に**実存の道**から超人を目指すアルピニストならば、「**神は死んだ**」現代社会の中で、もはや存在の社会的意味を失ってしまいます。ニーチェがいう**ニヒリズムの克服**を、純粋に希求するアルピニストは、「**登山と山岳スポーツ等の生態分類表**」生態的種別 <A-0> に示す「**超人型**」のアルピニストに相当します。しかし「**社会的評価の下でのアルピニズムは終わった**」のであり、「**自己評価によるアルピニズムは細々とでも存続することが可能**」な程度となりますが、大衆社会での**コマーシャル価値**は低くなります。

そもそも現代先進国の、資本がより自由な活動ができる**グローバリゼーション社会**において、資本主義文化は**多種多量生産**をおこない、**多種多量消費**を促し、そのギャップは**多種多量廃棄物**となって、**環境資源**を浪費します。中国の古典に登場したという**經世済民**【世を經(おさ)め、民を済(すく)う】は簡略化され**經濟**になったといわれます。資本主義社会では、**交換価値の差益**が資本となり、その**資本力**

の差が更なる差益を生み出し、資本は廻るほどに差益を蓄積します。やがて資本は民の労働対価とかけ離れ、それ自身があたかも群れの実在であるかのような、**虚相の実在**＝会社等に化し、疑似主権者(法人)となって法律に定められ、その位置を獲得します。法人の実相は、法に定める人(個)と同じ位置付けを超え、その経済力、群れの数、施設規模の大きさ等々、法に定める人(個)の権利や位置や評価価値を無視できるほど、はるかに超えていきます。

アルピニズム登山の究極が、自主・自立・自己負担・自己責任の下で、人間(人)の超克を目指すのに対し、ツーリズム登山は資本で群(会社法人)をつくった法人に企画・運営され、登山者は委託・依存・主催者責任の下で相応の負担金(参加費)を支払います。つまり、「自由人の主体的実践」であったアルピニズムは消え去り、「羊の群れ」のようなツアー登山が盛況なこんにちの登山は、エベレスト山頂を含む山岳の世界を、資本にとっての産業会場となってきました。産業に組み込まれた登山は、まさに人工環境のなかでの遊戯(ホモ・ルーデンス)と化しました。

民の生活や大衆の欲望を満たす良き選択とは、他者より「ちょっとだけ」優越性をもたせた差別化の中においてこそ、安心して美意識を感じるといわれます。極端には不安を覚え、中庸な中に安心を感じずる人の意識は、自ら「ニーチェ的超人」を望む意識づけはなく、それゆえに「現代的超人」との落差の価値を、金銭交換商品(サービスを含む)を得ることによって埋めようとします。「現代的超人」とは、情報操作で創り上げられた**虚相の「スター」**であり、オリンピックで金メダルを獲得した「**世界一の記録保持者**」、ノーベル賞に輝く「**選ばれた人**」が挙げられます。今や「**実存的超人**」が活躍できる世界は、無いといえます。

「天国に一番近い男」と呼ばれ、世界中の山々を少人数、無酸素、単独登攀などで今も登り続ける**山野井泰史氏(1965-)**は、近著、『**アルピニズムと死**』(山と溪谷社、2014.11)で次のように述べています。

.....

- ・ 山での死は決して美しくない。でも山に死がなかったら、単なる娯楽になり、人生をかけるに値しない。(P-93)

- ・ 能力の限界を超えないように計画し、また実践してきたのです。(P-132)
- ・ 限界のように思えて一線を越えた瞬間は表現できないほどの喜びがありますが、大幅に限界を超えてまで生還できる甘い世界でないことを知っているつもりです。(P-132)
- ・ 限界線から一歩踏み出すたびに、生命が躍動した。(P-182)
- ・ 登山ブームは「楽しむだけ」の登山者を生んだ。ネット上には無数の「山」があふれ、メディアはこぞって気楽な山を紹介する。……略……僕は彼らを非難するつもりはまったくない。むしろ大いに自然に触れ、山を楽しんでもらいたいと思っている。それにしても……、アルピニズムは失われつつあるのだろうか。「どこまでやれるのか」は必要ではないのだろうか。古典的な考えかもしれないが、僕はいつまでも限界に向かう道を忘れないでいたいと思っている。(P-183)
- ・ 生命体として、いつかはどこかで僕らも消滅する運命です。(P-184)
- ・ 結局、なぜ僕は死ななかつたのでしょうか。それは若いころから恐怖心が強く、常に注意深く、危険への感覚がマヒしてしまうことが一度もなかったことが理由の一つかもしれません。さらに自分の能力がどの程度であり、どの程度しかないことを知っていたからだと思います。二つ目の理由は、山登りがとても好きだということです。……略……いつ何時でも、山と全身からの声を受け取ろうと懸命でした。……山が与えてくれるすべてのものが、この世で一番好きなのです。……だからこそ、今まで生きてこられたのかもかもしれません。(P-184～185)

.....

引用が長くなりましたが、この本の中に「スポーツ」という言葉が登場しないのが、印象的です。山野井氏は、「登山」と「山岳スポーツ」を、無意識の中にも分けられている考え方が読み取れます。つまり「アルピニズム登山」は、「死の恐怖心」と向き合うところから始まるといえます。他方、「山岳スポーツ」は「死の条件を排除」することから始まる、といえます。

## 5節. 山岳スポーツと死の排除

前節のごとく、「山岳スポーツ」は「死の条件を排除」することから始まります。様々な安全対応規則や会場設定をおこない、参加者の安全確保のために資格条件を特定することもあります。チェックポイントに係員を配置して状況確認したり、参加者の異常発生によっては途中リタイアさせ、安全確保の収容施設を設けたりします。つまり、山岳自然という背景の中で、行動する会場や危険なコースの安全確保をするために、係員を配置し、人工的施設を整備し、安全性の確保をおこなう管理体制をとります。参加者は最初から死の危険を危惧することもなく、対人相関競技に没頭します。 遭難を否定しきれない「登山環境」に対し、「山岳スポーツ」における「死の条件排除環境」は、明らかに登山と異なる領域であり、登山とは別な「群」、別な「世界」を形成するものとなります。意識構造、条件設定、行為内容、競技結果が及ぼす文化的価値、等々の検証は、本論の対象ではありませんので、概要のみを巻頭の【別表-1-1】、【別表-1-2】に示します。

「山岳スポーツ」は、「競技スポーツ」と「レジャースポーツ」に分けられます。【図-3】(P-62) **A群** のように、競技スポーツはアルパイン登山、レコード登山、と要因ベクトルは同じ方向を向いています。つまり、「進歩・向上性」を大きな特徴とし、その結果の「記録順位」を重視します。

他方、レジャースポーツは **C群** のように、コレクション登山、ファッション登山、ツアーリズム登山、と要因ベクトルは同じ方向を向きます。つまり、「趣味の享受」を強く表現します。

また「ウォーキング(山岳歩行)」は **B群** のように、メモリアル登山、ヘルス登山、ワンダーフォーゲルと、要因ベクトルは同じ方向を向きます。進歩と趣味のバランスを図り、「健全さ」を維持しようと心掛ける「動的平衡」な行為といえます。

このような分析は、登山そのものに直結するものではありませんが、日本の低山においては登山と山岳スポーツのフィールドが重なるために、相互の関係性を把握、理解する必要があります。

「登山と山岳スポーツのちがひ」については、次の6章とします。

## 6 章 . 登山と山岳スポーツのちがい

【19 世紀の「スポーツ」概念は、『戸外でおこなわれる競技的性格を持つゲームや運動をおこなうこと、及びそのような娯楽の総称』を意味するとされます。さらに 1968 年の国際スポーツ・体育競技会 (ICSPC) の「スポーツ宣言」では、「遊戯性の性格を持ち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動」と定義されたとしています。(井上俊、菊幸一『よくわかるスポーツ文化論』、ミネルヴァ書房、2013.07、P2)】

巨大建築が可能な現代では、19 世紀の「戸外」という条件は当てはまりません。現代は大規模屋内運動場、球技場が建設され、多くのスポーツ種目が屋内競技化されています。クライミング競技のボルダリングは、屋外、屋内双方で実施されていますが、その規模は屋内仕様が当てはめられています。

その他のスポーツ要件については、遊戯性、競争、対決、運動、等々、妥当なところですが、だからといって「スポーツ」の下位分類に、「登山」をまるごと収めることには無理があります。「登山」に含み得る人間力の統合性は、「登山にはスポーツ要素を含む」という、スポーツの上位概念であることが、本論の主旨です。

登山への動機分析を理解すれば分けられますが、動機の多様性が登山の多様化を招き、その多様化は人間がそなえる多様な諸能力の証であり、山を登る行為の中へと実践、統合されていきます。つまり登山は、身体的スポーツ諸要素と、知的な理性諸要素と、情緒的感覚諸要素の統合行為となるからです。

身体的スポーツ諸要素は身体表現により目に見え、速さ＝時間/距離、長さ、高さ、重さ、得点、勝敗、等々の客観的数値データにより、比較、競争、序列化、を公正、公平に理解、判断できる、客観的実相の世界といえます。

知的な理性諸要素は目に見えませんが、身体的スポーツ要素を感知、比較、判断、予測等をおこなう知性、理性による合理化機能であり、その効果は身体に作用して、実相世界を進化させる表現となります。加えて知的欲求本能に適応するか、否か、努力の過程と結果とのバランスによって、さらなる実存的行為へのエネルギー

一を蓄積させます。

**情緒的感覚諸要素**は、好き / 嫌い、美しい / 醜い、快 / 不快、楽しい / つまらない、という **正**・**反** 対極とともに、さらに「**どちらともいえない……**」という曖昧で中庸な感情、等々の**主観に基づく意識**です。そもそも情緒感覚とは、個性を個性たらしめる**個体感覚**として人それぞれ異なっており、目には見えないが感ずることができる**個体の特性**として、**主観的虚相の世界**といえます。虚相であるがゆえに**位相の異なり**があり、同じ土俵(同相)の上で相対的に、比較、競争、優劣序列分布化することが困難な、空間的差異(位相のづれ)にあります。公正、公平に酌量すべく、共通となる物差しや基準が設定しづらく、質的差異(異相)を量的差異(同相)へと変換することができません。しかし視点を代えれば、最大、最小、平均、というグルーピングと統計手法により、情緒的感覚分布傾向を同期化させることは可能です。体操競技やシンクロナイズドスイミング、フィギアスケートのように、感覚要素も含めて**数値化(ポイント)**する手法です。しかし基準の物差しが無い以上、**数値化された値は近似値**であり、**絶対値**ではありません。

本来、情緒的感覚諸要素は質的・量的に計測する物差しがなく、比較単位の絶対性に欠けるため、全てに理解され、納得されることのない「**主観**」として扱われ、学問や科学の「**客観的表現**」に向かないとされています。しかし多様で複雑な関係性を取り上げる「**複雑系**」の視点からは、それら個体の特殊性を複素次元(空間)にそれぞれを位置づける(プロット)ことにより、個体の質的・量的特異性をベクトル表現させることができます。それらは、比較、序列化する性質のものでなく、どの空間に在るかを指し示す、**指標的表現**となります。【図-3】(P-62)登山様式のベクトル表現、【図-4】(P-63)登山様式の総合ベクトル表現、がその例です。

「**ハイキング**」の目的は山を登ることではなく、山岳自然の中を歩くことです。「**トレイルランニング**」の目的は登山ではなく、山岳自然の中を走り抜けることです。「**スポーツクライミング**」の目的は、登攀行為が類似でも、室内や海岸でもおこなわれる人と人との競技です。これら共通点は、身体運動による空間的自由な解放感を楽しむことです。これらの身体体験を「**山岳スポーツ**」として括り、「**登山**」とジャンルを分け、「**登山と山岳スポーツは別な「群」である**」、ことを確認するものです。

## 1節. スポーツの社会性

「死の断絶」は精神性が大きく関わり、多様な文化・芸術様式を生み出しました。自然の中で安全を担保し、死生観を伴わない身体的行為へ展開させると、その行為は「スポーツ」と呼ばれる「界」へと収斂されます。死生観を強く感じる登山(アルパイン)と、死生観の薄い登山(ファッション)との比較は、その位相空間を別にするため、同列に比較することはできません。しかし、死生観をともなわないスポーツだけを考えてみれば、会場を人工施設化することにより競技条件を均質・均等化し、競技者の心身適応能力に絞った競技、競争、習熟度等の数値化をおこない、比較、序列化するスポーツ競技種目として展開します。条件の人工的均等化です。

では「スポーツの定義」とは、いかなるものとなるでしょうか。

まず私が考える定義を、以下に示します。

**【スポーツの定義(私案) = 安全を担保した環境の中で心身をもって、自己と自然と対峙し、あるいは自己と他者との競技・競争をおこない、その過程と結果をもって自己の存在と位置づけを再確認する行為とその記録】**

『よくわかる スポーツ文化論』(井上俊、菊幸一・編著、ミネルヴァ書房、2012)によれば、1968年の国際スポーツ・体育協議会(ICSPC)は「スポーツ宣言」をとりあげ、「スポーツの定義」を【遊戯の性格を持ち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動】としています。さらに【近代スポーツの特徴として、①教育的性格、②禁欲的性格、③倫理的な性格、④知的・技術的性格、⑤組織的性格、⑥都市的性格、⑦非暴力的性格】を強調し、【近代社会における人びとのライフスタイルにとって基本的に望まれること】をあげています。【古代ギリシャ、ローマ時代にも「スポーツ」は存在していたといわれるように、広い意味でのスポーツ的な営みは、あらゆる文明において見出され、それぞれの文明や時代、社会の特徴を帯びながら、文化としての共通性をもって世界中に遍在してきたものと考えられます】と述べます。しかし「文明」と「文化」の、概念の異なりに対する言及はなく、同義語に扱っています。文脈から読み解けば、「ギリシャ文明、ローマ文明」

といった国家や社会という支配圏の総体を称して「文明」とし、法や制度、知識(哲学や科学)、芸術、遊戯など、意識に刷り込まれる個別細分化した価値(意識、無形)の総称を「文化」としているように読み取れます。

さらに「スポーツをめぐる文化」については、スポーツを三段階のピラミッド構造に分けています。最下層は「物質文化」としての物的用具(用具、施設、衣服等)、中間層は「行動文化」としての技術体系(各種目の技術)と規範体系(ルール、フェアプレイ精神、スポーツマンシップ等)、上位層は「観念文化」としてのスポーツ論とします。

スポーツを特徴づける中心要素として、以下三点が考えられます。

- ①=自然の摂理に抗する「記録樹立と更新」の進化向上美学
- ②=人と人が競い、他者に競り「勝つ」優越心の充足
- ③=勝敗が決定的必然ではない、確率的な「遊戯性」

「記録」が意味する、時間、距離(長さ、高さ)、速度(距離/時間)、重さ、回数、等々のデジタル要素は、物理定数そのものであり、競技における客観的比較の公平・公正さを担保します。データを比較し、優劣を競い、その中で優れていたいとする人間の欲望が育まれます。そして「記録を求め、他者に優越したい欲求」は、人間の闘争本能と優越心を満たします。人間の闘争本能は戦争から遊戯に至るまで、様々に類別することができます。例えば、途上国に対する先進国、オリンピックメダリスト、ノーベル賞受賞等々、様々な類別優秀呼称により、優越が表彰されます。

その始源を「遊戯」に求め、その成果を『ホモ・ルーデンス』(訳本:中央公論社、1971.9)にまとめたのがヨハン・ホイジンガでした。「遊戯」の根源を探り、文化の一つに「スポーツ」を取り込んでいます。冒頭の「序説」において、【遊戯は、ここでは文化現象として捉えられる。生物学的機能としてではない。】として、「遊戯 ⇒ 文化」をまず主張しています。ホイジンガが文化現象と生物学的機能とを分けて考えていることに対し、私は「文化現象 ⇒ 欲望の充足 ⇒ 文化」と「生物学的機能 ⇒ 欲求の充足 ⇒ 文明」として、解釈内容を加えてみたいと考えるところです。(人の意識・文明・文化=環境の複素的な世界構造)

部族集団生活の古代から、都市・国家・国民生活に至る現代まで、人間の闘争本能は「遊戯 ⇒ 文化」の範囲において平和裡に活用されてきました。単純に

個と個がジャレ合う遊びから、統治の潤滑油(ガス抜き)に活用されるまで、知らぬ間に日常生活の中に組み込まれています。それが「遊戯」の平和な範囲(文化)を超え、相手を滅亡領域まで追い込むと、「遊戯 ⇒ 文化 ⇒ 戦争 ⇒ 文明の興亡」へと進んでしまいます。「遊戯 ⇒ 文化」の平和裡な範囲にあれば、「遊戯」の活用と尊重・充実は、オリンピック憲章に表現されるよう「戦争 ⇒ 文明の興亡」への抑止力でいられます。

一方で現代文化における遊戯要素の考察において、**ホイジンガ**は【時代感覚の差は、たまたまその人が属することになった世代の差異によっているというだけのものではない。それはその人の所有している知識如何にも、おおいに依存しているのである。一般に、歴史的視野の上に立った人は、瞬間という近視眼的な視野の中で生きている人より、過去というものを〈現代〉〈今日〉というイメージとして、その心に受け止めていることが多い。(P-325)】と述べます。〈知識〉は蓄えるだけでなく、蓄えた知識を活用し、歴史的広い視野で物事を考えて〈現代〉を把握すること、今という瞬間を〈今日〉と捉えて対処すること、〈知識とその活用の差〉によっても時代感覚の差が生じることを述べます。このことを逆説的に考えると、「知識によって物事を考え、理解し、他者へ正確に伝えることの難しさ」、極論を述べれば「発信者の意図と受信者の理解には、両者の知識と知恵の差によって、全く同じように伝わらず、差異を生じる」ことも示しています。

それはさておき**ホイジンガ**は、【**スポーツが社会機能として、社会の共同生活の中で次第にその意義を押し拡げ、次々と大きな分野を、その領域の中へ引き込んでいるのである。(P-326)**】、と指摘します。ホイジンガの指摘から 40 年以上過ぎる現代において、スポーツは益々興隆をきわめています。身体の殺戮をともなう「戦争」でなく、「安全」を担保した**スポーツの闘争**は、オリンピックやワールドカップ競技として、国家や地域の団結と力の誇示の**代理戦争**でもあります。ナショナリズムを戦争へと駆り立てない「**ガス抜き装置**」として、十分に機能しています。

さらに加えて、国際オリンピック委員会第 7 代会長＝**サマランチ**(1980～2001)は、1984 年ロサンゼルス大会から**商業化路線**へとかじを切ります。全世界同時テレビ放映可能な電子技術文明の中で、オリンピック競技大会は「**世界同一市場**」とな

りました。第5代会長＝**ブランデー**（1952～1972）がこだわった「**アマチュア憲章**」を、サマランチは安易に取り外します。それまでのオリンピックはアマチュアによる世界大会（アマチュア憲章）であったものが、**サマランチ**はプロフェッショナルの順次参加を認め、**オリンピック**を**世界スポーツ大会の最高峰**と位置づけます。種目世界一を競うオリンピック競技は、テレビ放映に加え、インターネット・ウェブに放出される**ビッグ・データ**により、リアル・タイムな情報価値をもって**世界市場**へ拡散します。この情報に対価を込めると、**オリンピック競技情報**は世界最大な「**文化商品**（情報価値）」と化します。オリンピックを頂点として、今や**スポーツ**は「**文化商品**（情報価値）」となりました。それを支える**デジタル電子技術**は、21世紀**文化の質**を**根本から変革**します。さらに新自由主義なる**グローバリゼーション**は、**国境なき世界経済**を席捲しています。国境は平面二次元的物質概念から成り立ちますが、電波や光は物質を飛び越え、四次元空間を自由に飛び交います。電子情報は境界のない宇宙空間同様、混沌としたウェブ上を勝手自由に動き回ります。

### 【『ホモ・ルーデンス』の目次と項目ダイジェスト】

- ① 文化現象としての遊戯の本質と意味……文化因子の遊戯、自律的範疇の遊戯、他
- ② 遊戯概念の発想とその言語による表現……遊戯の概念、表現、真面目、他
- ③ 文化を創造する機能としての遊戯と競技……遊戯としての文化、競技は遊戯、他
- ④ 遊戯と法律……競技としての訴訟、権利をめぐる競技、裁判と賭け、他
- ⑤ 遊戯と戦争……闘争は遊戯、戦争の競技性、戦争の祭儀性と闘技性、儀式と戦術、
- ⑥ 遊戯と知識……競技と知識、哲学的思考の発生、競技は祭祀、社交遊戯、他
- ⑦ 遊戯と詩……詩は遊戯の中に生まれた、文化の遊戯相としての神話、他
- ⑧ 詩的形成の機能……形象化、抽象概念、擬人化、詩の諸要素は遊戯機能、他
- ⑨ 哲学の種々の遊戯形式……哲学的対話の起源、学問の闘技的性格、他
- ⑩ 芸術の種々の遊戯形式……音楽と遊戯、舞踏は純粹遊戯、造形芸術と遊戯、他
- ⑪ <遊戯ノ相ノモトニ>見た文化と時代の変遷……古代以後諸文化の遊戯因子、他
- ⑫ 現代文化における遊戯要素……スポーツ、職業、芸術、科学、政治・国際政治、現代戦における競技因子、遊戯要素は不可欠

人間相互の闘争本能は弱められるのか……？ 進化への欲求と等しく、人間(生物)を人間たらしめてきた本能、欲望と知性とのバランスを、現代の社会はもう一度正面から見直さなければならない時節にあります。人類が減びないためには、「文明～文化～人」の意識を宇宙の進化とともに、人類環境を人工化するにあたり、知識の活用、知恵の発揮による「動的平衡感覚」が、今こそ必要となります。

さらにホイジンガは、【スポーツの組織化と訓練が絶え間なく強化されていくと共に、長い間には純粋な遊戯内容が、そこから失われていくのである。このことはプロの競技者とアマチュア愛好家の分離の中に現われています。遊戯がもはや遊戯でなくなっている人々、能力では高いものをもちながら、その地位では真の遊戯者の下に位置させられる人々(プロ遊戯者)が区別されています。これら職業遊戯者のあり方は、もはや真の遊戯精神ではない。そこには自然なもの、自然な反応が欠けています。こうして、現代社会では、スポーツが次第に純粋の遊戯領域から遠ざかっていき、〈それ自体の〉 sui generis (独自の) 一要素となっている。つまり、それはもはや遊戯ではないし、それでいて真面目でもないのだ。現代社会生活の中ではスポーツは本来の文化過程のかたわらに、それから免れたところに位置を占めてしまった。本来の文化過程は、スポーツ以外の場で進められてゆくのである。(P-328)】(論者注:この記述は 1970 年代以前のアマチュア優位時代の考察)と、指摘しています。しかしホイジンガ世代におけるオリンピックは、アマチュア優先思想の時代でありました。1972 年、IOC 会長アベリー・ブランデー退任以降はプロのオリンピック参加が次第に認められることとなり、次なる問題としては“過度な商業主義”が蔓延するのです。

ブランデー時代のアマチュア区分においては、① アマチュア(文化的)、② ステートアマチュア(共産圏の国家支援プロ)、③ コマーシャルアマチュア(企業支援プロ)がありました。アマチュアは貴族や市民の遊戯性を体現する演技者として文化的価値が高く、その貴族や市民の観賞欲を満たす格闘技等の身体競技者は“プロ”として、アマチュアよりも一段下層に位置づけられていました。身体競技の頂点に君臨してきたオリンピック運営は、近代オリンピック創設者、ピエール・ド・クーベルタン男爵の名言【オリンピックで最も重要なことは、勝つことではなく参加することである】

に代表されるよう、**貴族趣味的文化性**があったからです。併せてクーベルタン男爵は、【同様に、人生において最も重要なことは、勝つことではなく奮励努力することである】としますが、奴隷制を残す未成熟社会の上に立った市民の遊び目線からの、文化的スローガン(ソフトパワー)を述べているように受け止められます。

ホイジンガの指摘から40年以上過ぎた**現代スポーツ**は、競技者と指導者、さらに支援組織の**チームプレー**となり、**個人的アマチュア概念**とは別物となっています。各種目競技団体は国際化し、それら頂点の競技大会をオリンピック、ワールドカップ、世界選手権等々として、戦争をはるかに超えた人類社会の一大イベントです。言葉を変えれば「**イベント＝祭儀性**」ともいえます。イベント結果の情報価値は競技者を離れ、送り手のメディア、受け手の市民・国民・民族、それぞれの文化圏を巻き込んだ平和裡な**代理戦争**になり得ます。もはや**遊戯**としての**単純なスポーツ**ではなく、文化による戦争の抑止力、あるいは闘争心の**ガス抜き**ともいえます。【**スポーツを通じて世界は一つになる**】や【**オリンピックは単なる世界選手権大会ではない。それは平和と青春の花園である**】というクーベルタン男爵の名言は、戦争に代わる平和裡な**イベント(興業)**として、世界のビジネスチャンスを満たします。そして“**過度な商業主義**”は、**感性の純真さ(文化性)**を損なっていきます。スポーツの最高峰・オリンピックはこのように、遊戯性をはるかに超えた文化のソフトパワーな存在です。しかしその裏においては、「**純真な感性**」が蝕まれる副作用もあるのです。ソフトパワーが秘める権力、政治、価値等の無形な架空性(虚な世界)は「**情報**」となって伝播し、人々の感性と欲求を満たします。「**実相な社会**」意識の中に、「**虚相な社会構造**」が気づかぬうちに蔓延し、複素的世界を構成します。純粹にスポーツを目指す人々の目標は、自己又は他者との「**記録の比較、更新**」ですが、それは哲学的「**虚無の世界**」、仏教的「**空の世界**」ではありません。むしろ一神教的でデジタルックな、「**全能な神の世界**」に近づくことが目標となります。思慮浅き世界では、「**記録＝神**」と錯誤されます。(8章 = かもめのジョンソン)

ホイジンガは、【古代文化の中では、**競技が常に神に捧げられた祝祭の一部**をなしていて幸をもたらす神聖な儀礼として、不可欠なものとしていた。(P-328)】と指摘しているように、記録中心となった現代スポーツは、“**祭祀への先祖返り**”と

考察することもできます。

波動は周期(サイクル)という性質を持ち、その性質は繰り返し現れてきます。文明～文化の大きなサイクル変動の中で、「スポーツは遊戯の祭祀性」として生態を変え、オリンピック、ワールドカップ、世界選手権、その他多くの国際大会となり、再び現代に神性が蘇っているとも理解できます。しかし私は、神性を得ること(かもめのジョナサン)でなく、神性のその先にある「気づき(星の王子さま)」に発する文化の動的平衡力に期待をするのです。

## 2節. 登山のスポーツ意識普及と第二次RCC

1924年(大正13年)に設立された日本初のロッククライミングクラブ(RCC)は、戦後の1958年1月に、**第二次RCC**として再結成されます。「これに属さないと一流クライマーではない」と言わしめる活躍があり、国内の未踏岩壁を登りつくし、ヨーロッパ・アルプス3大北壁(アイガー、マッターホルン、グランドジョラス)等を制覇して、日本アルピニズムの流れを登山の中心軸に築きました。そして『日本の岩場』という国内岩壁登攀ルート図集をまとめ、グレード評価(1級～6級)をおこないます。時の代表者・上田哲農氏は、同書巻頭へ次のように記されます。

【私たちは、現在、行為される岩登りの現実を熟慮した結果——「近代登山はスポーツ的要素を含む」——という定説のもつ、あいまいな表現を拒否し、それが人と人の競技ではないにしても、さらに一步、スポーツそれ自体の本質に近づきつつあるのが現状であり、また、これとは全く別の次元で登山という感覚から離れて、岩自体を楽しむ、スポーツそのものの岩登りが、別の人達によって誕生しつつある事実をも知っている。この二つの傾向の構成分子は、スポーツ以外のもの——古い装いであるところの情緒的要素を捨て去り、冷厳な岩そのものの上に、片方はアルピニズムをスポーツ的見地から解明しようとし、他は「新しき価値」として、その出発をスポーツから拮げたものである。RCC—IIは、前者に属する。(『日本の岩場 グレードとルート図集』、第2次RCC、山と溪谷社、1965年)】

1967年、当時21歳だった私は「小さな批判 - RCC IIへ -」という一文を書

きました。青年海外協力隊でラオスへ赴任する元クライミング・パートナー、H氏へ  
餞別の書『一ノ倉』に収録。（田中文字夫、1967年、A5版、謄写版刷、96頁、簡易製本）

そこに……、【果たして現代登山には、情緒的要素が不要なのだろうか？ 冷厳  
な岩そのものの上にあるアルピニズムとは、果たしてどのようなものであろうか？ 「ス  
ポーツ要素をふくむ」という定説のあいまいな表現を、果たして拒否する必要が現  
代登山にあるというのだろうか？

しかし僕は思う。彼ら(RCCⅡ)こそ、最も情熱的な人間ではないか】……、と。

さらに……、【「近代登山はスポーツ的要素をふくむ」—— それで良いではな  
いか。そして、「ならば、それ以外にどんな要素がふくまれるのか。その間の関係  
は、それが僕らにとってどれほど必要なことなのか。どうして山は、僕らと呼ば  
び続けているのだろうか……」と、アルピニズムの行為を通して思索し続け  
ないのだろうか。捨て去ることではなく、論証することこそ、現代登山家のなす  
べき道程ではなからうか。そして山は、そんな僕らに関係なく、いつも、そこ  
に、存在しているのだ。

僕は山に登り、哲学へと導かれた。美と芸術へと導かれた。宗教を考えさせ  
られ、心理学も教えられた。そして今、生活の主要な一部となっている。

山登りは文明ではなく、文化の所産なのだ。そして文化は、文明によって支  
えられている。（拙著『若き日の山々』2014年、私製版、A5版、162頁、再収録）】……、と。

引用が長くなりましたが、登山とスポーツの関係は、古くて新しい問題であり、登  
山界では誰も整理をしてこなかった、古い問題です。そして前記のように RCCⅡ  
の実績と思想が、日本登山界の主流となります。社会人山岳会が活躍し、大学山  
岳部は衰退していきます。1960年に日本山岳協会が発足しますが、アルピニ  
ズムとスポーツが一体となった「スポーツ・アルピニズム」は、今も続いています。  
フランスの名アルピニスト、ガストン・レビュファの名著、『岩と雪』、『星と嵐』  
等々では、アルピニズムに含まれるロマンを文芸作品として表現し、若かった私  
たちに憧憬を与えてくれました。しかし日本では、RCCⅡが切り捨てた「情緒的  
要素」をもって「登山」を考える思想は、今もって発展しませんでした。

半世紀あまりを過ごした今再び、「第三次登山ブーム」と言われます。1,000  
万人を前後する登山者が、山々を賑わしています。高齢者から若年層に至るまで、

「登山の多様化」現象は、「何でもあり」の混沌状況を呈しています。混沌はエントロピーが高まった無秩序状態をいい表します。無秩序ゆえに自由度は高まりますが、実存的「個」が「個」の意識によって秩序を形成することは、とても至難な業です。それゆえに大衆は、要約された情報（ジャーナル = journal）をもって判断基準としますが、情報となるメディア(media)の質と量により、個の意識は大きく作用されます。大衆が好むとするメディアを大量に伝搬(売れる)させると「ある傾向」に収斂され、そのことを利用した治世をポピュリズム(populism)といいます。ポピュリズムにおける情報(ジャーナル = journal)は、権力の裏面と化します。ジャーナリズム(journalism)の本質は、権力の自己増殖作用を監視、批判するものでしたが、ポピュリズムに一体化となった現代の情報(ジャーナル = journal)は、政治権力ばかりでなく、経済市場(欲望のマーケット)までも影響を及ぼします。そのような社会の中で、「多様化された個」の意識とは、パターン化された「群れ(登山者)」の共通項として吸い上げられます。「何でもあり」なのだから、少数の個性的アルピニストが、細々と存在し続けることは可能です。しかしアルピニズムが目指した「自己統合による個の確立」は誰にでも出来ることではありません。「大衆登山者」は「山の日」を祭日(2016年8月11日施行)と定め、経済・産業社会の中に組み込まれていきます。今年(2016年)から施行される「山の日」には、「登山の本質」を考える「登山文化の日」になってほしいと願うものです。

前記 RCCⅡ代表・上田哲農氏による巻頭言の記述、【全く別の次元で登山という感覚から離れて、岩自体を楽しむ、スポーツそのものの岩登りが、別の人達によって誕生しつつある事実】とした「スポーツクライミング」は国体種目となり、2020年東京オリンピックの追加競技種目となりました。しかしスポーツ・クライミングをおこなう人口は約50万人と推計され、1,000万人登山者のたった5%でしかありません。他方、RCCⅡが目指したスーパー・アルピニズムは成長の限界を通り過ぎ、衰退の一途をたどります。加えて現在は第3次登山ブームといわれますが、スーパー・アルピニズムにほど遠いツーリズム登山やファッション登山がその中身です。

近年は大学生の卒業論文や大学教授の論文テーマとして、「登山動機の心理研究や行動パターンの調査等」が、学問対象として登場しています。

※ 2012年の登山人口 = 860万人 (2013年レジャー白書)

2009年の登山人口 = 1,230万人 (2010年レジャー白書)

登山用品市場 ≒ 1,860億円 (産経新聞 : ビジネスの裏側)

スポーツ・クライミング人口推計 ≒ 50.2万人 (内: 常連 ≒ 2.2万人) mickipedia.blog113

### 3節. アルピニズムの衰退

RCC II が、近代登山はスポーツの本質に近づくとしたはずの**アルピニズム**は衰退し、別次元なものとして切り分けた**スポーツ クライミング**がオリンピック種目となった半世紀後において、「**アルピニズムの衰退の原因**」は一体何であったのでしょうか。その答えに、かねてからの持論を述べれば、以下となります。

**第一** に、RCC II が中核となって展開させた“**アルピニズム = スポーツ = 登山**”という関連付けにおいてアルピニズムには限界があり、その先には衰退がある当然な論理を欠如させていました。山頂やバリエーション・ルートは有限なものですから、形而下における地球環境には「**限界がある**」、ことの当然な認識欠如でした。

**第二** に、登山をスポーツの下位概念に押し込めてしまった結果によります。登山の動機は多様であり、勿論その中にスポーツ要素も含むわけですが、そのスポーツ要素の「**記録性**(進化)」だけを目指し、情緒要素を意識的に切り捨てたからです。その一方で、身体クライミングを純粹に追及する「**スポーツ クライミング**」を別次元として切り分けますが、「**アルピニズムの記録性**」と、「**スポーツ クライミングの記録性**」とは、どこが異なっているのでしょうか。前者は文明論的な実存の対自欲求として、山岳自然の中で自己の展開(登山)を通して自己統合を図る、人類史的結果の記録となります。後者は、文化的欲望の下、社会や群れの中で即自欲求となる他者との相関(運動=競技、競争)における優位性を獲得したいと欲する対他欲求の記録となります。その違いの要件が何かを考えると、「**アルピニズムは死の間際に接近しつつも生還することが要件であり、スポーツ・クライミングは死の要件を排除、規制するルール、施設の下で人と人が競技、競争をする**」ことにあります。

スポーツ・クライミングは自ら展開を果たし、現在の盛況を迎えます。一方でアルピニズムは探検、冒険、開拓場所を失い、パイオニアワークを発揮することができません。そのことは 1953 年にエベレストが登頂された以降を指して、本多勝一氏が「山は死んだ」と述べました。RCC II の展開はその後の登山ですから、彼らの主張には当然、「賞味期限」が内蔵されていたことにほかなりません。

**第三** に、戦後日本は先進国の仲間入りを果たして文明度が上がります。物質的豊かさの中で、非日常的山岳環境を開発し、日常生活環境を山岳に持ち込んだ ことにあります。アルピニズム登山の非日常的体験は、日常生活途上の災害や危機対応へと応用できるのですが、近年は逆に、日常生活そのものを山岳へと持込み、それに呼応する経済・産業界が追従した結果、山岳の非日常性は日常生活の周縁として組み込まれてしまったのです。その結果、2011 年 3 月 11 日の東日本大震災のような自然災害においては、個々の自主対応能力が劣化しました。代わりに行政機関を柱とした日常社会システムの中に、災害時の非日常対策を組み込むこととなります。文明社会の日常性の中に、非日常的災害対策等を組み込むことは、大いなる難題です。文明の人工的手段で予防措置を講じれば講ずるほど、環境破壊と社会コストを肥大化させます。自然を利用して棲み分けるのではなく、自然を破壊して人工都市を造って利便さを享受する、文明の進化過程そのものの負債です。文明進化の流れに抗すること、それが文化の文化たる役割であるのですが、日常の便利さにかまけ、現代人は文化の劣化に気づきません。

そもそも登山とは、「自然の摂理に抗して」高きへ登る弁証法的自己統合であり、その過程が「文化の文化たる由縁」であったはずです。「自然の摂理に抗する」ことにより、自らの欲望の浅はかさ気づくこと(登山)は、人間が獲得した発達知能の果たせる、「文化」という知恵による、文明進化に対する制御能力です。便利さにかまけて文明進化を偏重する現代社会の未来は、人類絶滅モードに陥っているのではないかと理解することができます。登山におけるアルピニズムの衰退は、その一つの証拠でもあります。

今から 10 年前、2005 年を反映する 2006 年『レジャー白書』において、【レジャーの中で日常よりも非日常を楽しみたいとする人は、全体の 38.3%に留まる

(P.94)】という記述があります。10年前すでに、およそ6割の多数派は、日常の延長で余暇を楽しむ結果が示されていました。さらに同白書の第2節では、【団塊世代と「これからの10年」の余暇】で、以下の特徴を挙げています。

- ① 自宅よりも外で 60～70%
- ② 価格よりも感動重視 60%超、特に女性
- ③ 男性はのんびり志向 50%程度、女性の60%以上は行動志向
- ④ 男性は仲間志向 50%程度、女性の60%以上は仲間志向
- ⑤ 日常派は60%以上、非日常派は40%未満
- ⑥ 気軽な余暇志向は男性79%、女性65%
- ⑦ 新しい楽しみチャレンジは33%

団塊の世代が定年退職を迎えた2015年の昨年、数字はともかく、傾向は全てその通りの結果を示しています。子育てと組織・管理社会の中で働きずめから開放され、以後の人生に自己実現を図ると見るのは一般的です。しかし別な考えを述べれば、「生き方の違い(生き様)」を指摘することができます。アルピニズム的の人生とは、子育て、仕事、趣味、これら全てを自己の人生と覚悟して過ごす中で、「悔いを残さぬ時の過ごし方」に全力を尽くすこと。子育て、仕事、趣味、を分けて事に当たるのではなく、全てを一緒に統括した中で、それぞれの課題に向き合っ  
て挑むことの継続、それを人生と受け止める、という生き方です。アルピニズムという思想はなにも登山だけにあるのではなく、何事においても「より進歩、向上」をめざす様態は、人類進化の方向性として必然な「文明的性向」そのものです。

還暦、定年退職……と、確かに区切りや転換点がありますが、そこで大きく変節するのではなく、人生は一本の竹のごとく連続の中で、それぞれの節目を通過点とみる考え方です。一本の竹は、真っ直ぐ天に向かって伸びるか、節目で大きく曲がるか、環境と人の相乗作用の効果です。志は一本の竹のごとく、節目で大きく曲がることなく、真っ直ぐ天に向かって伸ばし続けられたら幸せです。アルピニズムにおける反骨への<sup>こころざし</sup>志は、なにも登山の中だけにあるではありません。一人ひとりの人生を貫く志は、文明が進化した現代社会にあっても、人として生きる意味を悟る文化の華を咲かせます。そのことを忘れ去らなければ、アルピニズムの生き

方の中に、人類の希望が見出されるはずです。反骨の手法が弁証法なのです。

アルピニズムの衰退とは、そのように生きる必要がなくなった人々が増えたという、文明と文化の位相変化にともなう必然ともいえます。レジャー白書の統計からは、そのような傾向を読み解くことができます。

## 4節. アルピニズムへの希望

時の社会風潮、「高度経済成長社会」という視点に重畳して展開させてきた「戦後アルピニズム」は、有限な地球環境の中で「人類初や世界初」という地球規模概念での臨界を迎え、以後は衰退に陥りました。

「新たなアルピニズムの希望」を考えるならば生命のように、「代謝の視点」から考えることになります。人類が続かぎりにおいて、生命の「代謝」は繰り返されます。1サイクルの生命個体体験は、世代交代により新たに繰り返すことができます。「新たなアルピニズム」の概念は個体体験という1サイクルの視点から、新たに展開することができます。その時節とは、1953年5月29日にエベレストが登られた以降なのですが、登山界での論議は深まらず、今もって状況は変わりません。

「新たな個体体験」という概念は主観的とされ、客観的概念を基盤とする科学的論考からは排斥されます。つまり再現可能な事象を証明、説明、論理化させるのが科学的手法であり、再現できない1回限りの個体体験であるならば、証明不能として科学の対象から除外されるからです。

個体体験とするアルピニズムの成果は自己統合が可能であっても、他者相関での比較、競争は無意味となります。他者との比較競争にさらされるのではなく、多様な個性として「それぞれの人生」という天に向かって伸びる一本の竹のような存在であるからです。つまり、個が多様であるならば、それぞれの人生も多様な存在であり、竹林のごとく並び立つことになります。その1本1本を竹自身は、比較、競争する対象と見ていません。このような人間の特徴をボーボワール流に表現すれば、「女性度」といえます。しかしながら人間は、有形で目に見える存在になると相対的力学、つまり相対的な力関係を意識し、権力、支配、序列化(競争)等を重んじま

す。この人間的特徴をボーボワール流に表現すれば、「**男性度**」といえます。

人間ばかりでなく、宇宙におけるあらゆる**物質が相対**すると、その間に何らかの**力学**が作用します。アインシュタインは**一般相対性理論**と**特殊相対性理論**により、その関係性を説明しました。しかし無形で目に見えない非物質的とする人間の「**心**」のように、**信号**が寄せ集まって構成・機能するその**効果**は「**虚な世界**」として、相対性理論では説明できません。**心**は必ずしも合理的動作の出力ばかりでなく、「**抵抗や愛**」という**非合理的選択や判断**を出力する場合もあるからです。心が行動に作用をする人間行動は、宇宙の合理性ばかりでない**対極行動**を含めた「**対称性**」により、**安定に向かったバランス**を図ります。この「**動的平衡**（『動的平衡』福岡伸一、木楽舎、2009）」を図る難しさに、人々は個体として生存する人生に、安堵することができません。多様な世界で自立し、一人でいること不安定さよりも、同類なパターンの人々と群れているほうが安堵を覚える、生物個体的弱者です。しかし同類パターンの群れには**対極**となるべく**対称性**に欠け、その存在は平板的で求心力にも欠ける「**烏合の衆**」といわざるを得ません。

動物が「**対**（雄雌）」で生きることは、「**性の対称性**」によりかろうじて個体代謝を継続するからです。また人間の発達した知能は実存的個体体験に踏み込み、個体の「**生と死の対称性体験**」により、自身が生きる意味、生きている意味、生かされている意味を知ることとなります。それを知ることにより、他者への、「**抵抗や愛**」の関係性も気づくことができ、**実存**ばかりでない**他者性、社会性**が育まれます。

アルピニズム登山とは、自然の摂理に抵抗して高みへと登る行為となります。動物の一種である人間は、自然の摂理に含まれる一方で、それに**抗する知能**を持ち、従順と抵抗の対称性の下で、**動的平衡を保つことができる心・技・体の統合存在**があります。**経済合理性**からみると無為な純粹登山行為は、心・技・体の統合の動的平衡手段として**バランス調整機能**を果たし、実存哲学におけるそれぞれの「**解答**」を示唆してくれます。登山をスポーツと割り切ることはあまりにも断片的となり、深い人生哲学を学ぶ契機を失ってしまいます。

各種スポーツ競技者も、その先には「**道**」があります。剣道、柔道、野球道、○○道、……。そのことは競技、競争と別次元の世界観を生み出します。「**道**」

とは、心・技・体の統合を目指す**動的平衡過程の軌跡**であり、その先を展望し生の哲学を創発する**愛の軌跡**を導くものとなるはずです。登山をスポーツ種目で終わらせず(かもめのジョナサン)、その**道の先を照らす希望への眼差しにより、自然事象の必然性と偶然性に気づき、抗する体験を経ることによって自らの限界にも気づき、宇宙の真理を受容する、小さな哲学者**となることもできます(星の王子さま)。そのような登山作為が、「**新たなアルピニズム(真の登山)**」とした半世紀前からの提言です。

しかしアルピニズムは誰にでも適用できることでなく、大衆にとっては苦手な手法です。人々の性格は多様ですが、大きく二分法的性格分類をおこなうと、「**山型**」と「**海型**」に分かれます。その特徴は、**山型＝内向的・自省的性格、海型＝開放的・外交的性格**、と大雑把な表現です。この二つの気質は持って生まれた性格として、遺伝的必然とゆらぎの偶然によって生じる差異でもであると理解できます。

どちらが良い、悪いといった相対論ではなく、双方が補い合えばより完全に近く**相補的統合**が可能です。お互いの感性が分かり合えないにしても、その存在意味、存在場所は許容できるはずです。相反する二つを「**対称性**」とすれば、宇宙の物質存在の基本原理、「**CP対称性**」に類似(フラクタル)してきます。

人類は**文明作用(人工化)**によって自然の**対称性を破り**、エネルギーを加えて人工物を造りあげます。そして文化も**相補的対称性を破って競い、戦い、勝者の価値へと収斂**します。しかし生と死を媒介する個体体験としての「**新たなアルピニズム**」は、**自らの心の内の戦い**ですから、他者を収奪することがない平和裡な自己との戦いです。敗れたところには自らの「**死**」を許容する、**危険な思想**ともいえます。それだから誰にでも薦めることはできませんが、**適格性をもった登山者には、最高な人生舞台となり得る**ことを忘れてなりません。21世紀の多様化社会の中で、まだ有効に機能し得る登山の役割であると考えるのです。

**登山はスポーツに属するのではなく、登山の中にスポーツ要素が含まれる**のです。登山と山岳スポーツは別な「**群**」に分離し、登山の本質に文化的意義の理解が見い出せるよう、登山者の位置づけを再認識できることが大切です。登山のスポーツ要素(実相)と文化要素(虚相)は複素的関係を構成し、お互いが位相を違えて補完し合えば、アルピニズムの個体体験に「**希望**」は見出せることでしょ。

<b>【表—5】 進化 = 正 ⇒ 反 ⇒ 合 への変遷 (中村先生の分類から)</b>			
状態	正	反	合
1953年5月	エベレスト初登頂(イギリス)		
20世紀後半	ヒマラヤ初登頂(8000m峰)	岩登り、人工登攀、ボルダリング(アルパインクライミング&フリークライミング)	
から	未踏の高さへ:初登頂	未踏のルート:初登攀	正・反こだわりのない
現代へ	極地法登山	速攻登攀、競技登攀	
	心技体の練磨	個人の能力・趣味	学業優先
	世界・国家目標達成の時代 単一目標(世界初)	個人目標達成の時代 多様化(自己充填・満足)	新しい世代
東京大学山の会の例	バルトロ、キンヤン、アラスカ、 チューレン	シヴリン、K7、ヨセミテ	ヒマラヤからボルダリングまで
	正・反の交流・支援 ⇒		新世代の育成
<b>進化 = 正 ⇒ 反 ⇒ 合と新の理解 (田中の分類)</b>			
呼称	正 ⇒ 文明	反 ⇒ 文化	合と新 ⇒ 複素な世界
次元	1次元 : 直線的	2~3次元 : 空間的	多次元 : 多次元、多局面
意識	無意識のままに ⇒ 自然のままに一方的に進化 (科学、技術、生命、記録)	意識的に ⇒ 自然に意識的に逆らう (思想、文芸、スポーツ、遊戯)	意識と無意識の複合 身心 = 体と心 [知性(意識) + 感性(無意識)]
進化の方向	一方向な宇宙時間の中で技術 的適応が進化を図る(直線性) ~物質の性質	一方向な宇宙時間の中で同質 性が繰り返し現れる(周期性) ~波の性質	多次元世界(少なくとも4次元) を理解し、過去と未来を統合す る今(脳と身体)
評価・比較	絶対評価・比較 1局面での強者/弱者	相対評価・比較 多局面での強者/弱者	評価・比較は無意味 異なる次元・局面・世界相互の 比較は無意味
	絶対的単一要素	多様性の中で要素の条件設定	多層構造化(なんでも有り)
人間の条件	生命 : 自然の中	生命 : 自然の中	生命 : 自然 ⇒ 人為的
	自然な欲求(本能)	意識的欲望(心=理性+感性)	局所化と統合(心身と世界)
	必要条件(生存に不可欠)	十分条件(生存の付加価値)	適正条件(生存の最適化)
	探検・冒険・発明発見	開拓・開発・創造・模索	局所(部分)化と統合(全体)
	人類史観	個人史観	宇宙史観
	鳥の目(自然)	虫の目(心)	宇宙の心眼(目と心)
数式表現	実数 = a	虚数 = b i	複素数 = a + b i

## **CP対称性** ( C = charge conjugation P = parity transformation )

素粒子物理学では、左右だけでなく、上下や前後を反転させても物理法則は変わらないことになっていて、そのように空間を反転させることをパリティ変換(P)といいます。そして、左右や上下を入れ替えても物理法則に変化がないことをパリティ対称性とよぶのです。

このパリティ対称性がCP対称性のPの部分です。では、Cは何を意味するかといえば、粒子と反粒子の入れ替えのことで、電荷共役変換といえます。この変換によって粒子を反転すると、その粒子に対応する反粒子になります。つまり、C対称性が保たれていれば、粒子から反粒子に変換することができるのです。

(村山斉『宇宙になぜ我々が存在するのか』講談社、2013年、P.48)

※ 1964年にK中間子でCP対称性が破られてしまう現象が見つかった。

### **CP対称性の破れ**

「小林—益川理論」 ← ノーベル賞受賞

この理論では、クォークが3世代6種類あれば、CP対称性の破れが説明できるといいます。…(省略)…

この宇宙がはじまった直後に、粒子が生み出されると同時に同じ量の反粒子も誕生しました。粒子と反粒子はペアで生まれて、ペアで消滅するので、完全の対称性が保たれているならば、すべての粒子は反粒子とともに消滅して、この宇宙には何もなくなってしまったはず。ところが、いつの間にか反粒子はこの宇宙から姿を消して、粒子だけが残っています。この粒子だけが残っている理由にCP対称性の破れが関係していると考えられているのです。小林—益川理論は、単にクォークの数を予言しただけではなく、この宇宙に物質が残った理由を理解するためにも大切な理論なのです。(同上、P.51-52)

# 7章． アルピニズムの変貌

## 1節． 世界の背景から

『歴史の巨大な曲がり角』という標題で、朝日新聞は社会学者＝見田宗介＝東京大学名誉教授へのインタビュー記事を掲載しました。

「深刻な環境問題を抱えつつも、経済成長を求め続ける」—— ことに、「ならば成長をやめればよい」—— と明快な答え。

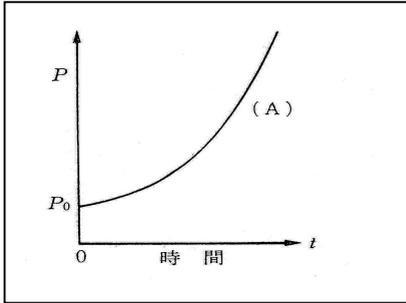
(朝日新聞 2015.5.19 朝刊)

成長の限界を見据えた世界の動きは 1968 年 4 月、世界各分野の学識経験者 100 名がローマに集い、会合を持ちました。その会合は 1970 年 3 月、「ローマクラブ」として正式に発足し、世界問題についてのグローバルな研究をおこないます。1972 年、マサチューセッツ工科大学(MIT)のデニス・メドウズを中心とした若手グループにより、第 1 レポート『成長の限界』がまとめられます。さらに 1974 年 10 月、西ベルリンで開かれた総会に、M・メサロビッチ / E・ペステルによる『転機に立つ人間社会』が報告され、こちらは第 2 レポートと呼ばれます。

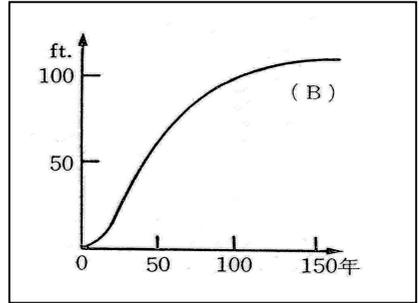
『転機に立つ人間社会(Mankind at the Turning Point)』は、大来佐武郎、茅陽一氏の監訳による日本語版が 1975 年 2 月、ダイヤモンド社から出版されます。当時私は、経済成長全盛の日本社会の中で、成長至上主義に疑問を持っていました。成長一色の一本道ではなく、一人一人の個性を活かす多種多様な在り方こそが、来るべき社会ではないか・・・と。この本を読み、「成長の限界」という視点をさらに強く意識づけられます。そして「成長」の思想は、「アルピニズム」の「より高く、より困難な登山」という思想と、ベクトル方向が一致していました。

成長の特徴として、次の 4 パターンのグラフが提示されています。

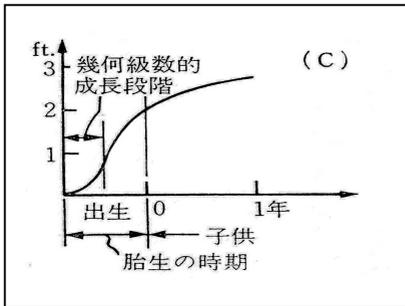
(A) 幾何級数形成長曲線



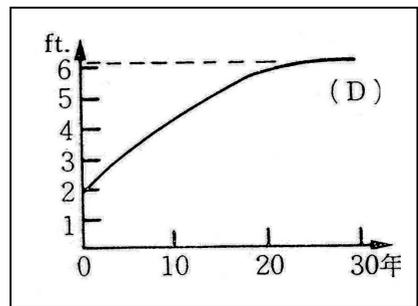
(B) 樫の木形成長曲線



(C) ロジスティックな成長曲線



(D) 人間の成長曲線



経済成長至上主義は (A) の幾何級数的成長 となり、やがては自然資源を食い尽し、人類相互も食い合って、最後に残った強者もまた、自然の中へと食い尽くされ滅亡することが推測できます。

(C) のロジスティックな成長 は、最初は急激に成長しますが、成長につれてスローダウンし、やがて成長が止まり飽和に達します。

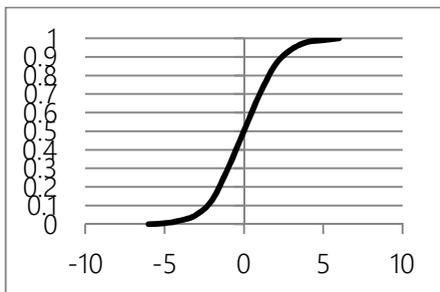
朝日新聞記事の見田先生は「ロジスティックな成長曲線」を採り上げられています。生物を生存に適した環境に放つと、ある時点から爆発的に増殖しますが、環境の限界に近づくとスローダウンして、安定した平衡状態に達する、という考え方です。このとき生物は環境に適応できたわけですが、「平衡状態」を持続することは至難であり、知性なき生物は、環境を食い尽くして衰退、絶滅していきます。

物理学の法則から考えると、飽和状態を持続し続けることは不可能であろうことが

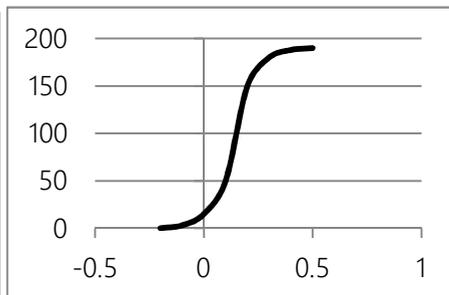
理解されます。宇宙の熱エネルギーを支配する二つの法則には、「**第1法則＝エネルギー保存の法則**」、「**第2法則＝エントロピー増大の法則**」、があります。物質は形象を換える中でエネルギーを要し、**仕事量**となって**消費**されます。消費された仕事量は再びエネルギーとして活用できず、「**消費が増大**」していきます。仕事量での消費は、形象を換えた物質のエネルギー・ポテンシャルを減少させ、エネルギー活力を減少させていきます。そのようにして物質は、仕事量としての消費を増大させながら形象を換え、活性エネルギーを失って平衡状態へと変貌します。活性エネルギーを失った消費仕事量のことを「エントロピー」といい、「閉じられた系**において、エントロピーは増大する**」というのが、「**第2法則＝エントロピー増大の法則**」であります。人類が活動を続けてゆく中でエネルギー消費を累積すると、地球という閉じた系の中にあるエントロピーは増大を続け、最後は平衡状態となって活動エネルギーを失うことを意味します。そのことはまた、**生命**(人類)の**滅亡**を示すわけですから、滅亡の手前で止める「**成長の限界**」という考え方は必然的に出されてきます。

「**成長の限界**」をどのように理解するのか……、つまり、『**生命とは何か……、生命現象とは何か……**』、との問いに、分子生物学者＝福岡伸一氏は『**動的平衡**』(木楽社、2009)という概念で説明します。【生体を構成している分子は、すべて高速で分解され、食物として摂取した分子と置き換えられます。身体のあらゆる組織や細胞の中身は常に作り変えられ、更新され続ける。分子が流れる環境の中で、分子の一時的な**淀み**(滞留)が**身体を作り出し**、死してふたたび環境へと戻されてゆく。分子がかりうじて一定の状態を保って**身体として平衡を保っている状態**を、「**生きている**」といい、この特異な状態を「**動的な平衡**」と名付けたのが、ドイツ生まれの生物学者、ルドルフ・シェーンハイマーだ】、といます。「**生命とは＝動的な平衡状態にあるシステムである**」とし、「**生命現象とは、生命の構造ではなく、効果である**」とされます。さらに福岡氏は、生命現象を含む自然界の仕組みの多くは「**シグモイド・カーブ**」という非線形性をとる、とされます。

【シグモイド曲線の例】



【ロジスティック曲線の例】



見田先生の**ロジスティック・カーブ**と福岡氏の**シグモイド・カーブ**とは類似な特性を示します。右側に傾いたS字カーブで、定常値へと収斂します。この制御を電気回路上でおこなうのが**自動制御**であり、**帰還**(フィードバック)回路によって出力を定常状態へ収斂させるよう、増幅作用(または入力信号)の調整をおこなうわけです。定常状態へ収斂する定数を**環境要素**に置き換えると、それぞれの要素がもつ「**環境容量=環境定数**」へと置き換えられます。

「**定常状態**」を見定める視点には、**第一に、科学**による観測・実験・定量的定性的規則性の確認は勿論のことです。**第二に**、定常状態を「**山頂**」に例えるならば、山頂を見上げ、山頂へ登り、山頂に立った**人間目線**からの視点です。

山頂に立ち自然を「**征服**」したと見るか、自然の大きさ・美しさの畏敬とともに、人間活動のたわいなさに気づいて「**無限の境地(空)**」となるか、さらに深く考えずに「**自然とともに**」あるか。前者は**欧米中東型**(アリア系)、中間は**東洋型**(シュメール系)、後者は**中南米・ラテン型**、大雑把な民族気質分類を例に分けてみました。私は新たに山頂から俯瞰する「**複素的視点**」を提言するのですが、詳論はまだ途上にあります。

近代に始まる民主主義社会と経済成長路線の資本主義体制にあっては、魅力ある商品作りとともに生産量を増大し、コマーシャルによって消費欲望を煽ります。消費が増大するに比例して税収も増大しますから、増大した税の再配分を上乗せすれば所得が上がり、さらなる消費の欲望を満たそうとするウイン＝ウイン(win=win)関係となる成長政策がとられます。そこで問題なのは、「**有限な環境容量の中で**、

無限な win=win 関係は持続しない」、という自明なパラドックスの認識です。

2016 年の今、自由民主党、安倍政権は「アベノミクス」をかかげて日本経済を煽り、国民所得を増やし、消費拡大にともなう消費税率アップをねらい、まさにこの win=win 手法を実行しています。生活者の消費欲望を煽り、それに応える産業を拡大成長させます。しかしこの手法が適用できる範囲は、「無限な資源、エネルギー調達が可能」な外界に向かって開放された系の中であります。しかし閉ざされた系の中とする地球資源には、「限界」が存在します。閉ざされた系として有限を認識する系にあっては、だれもこの「限界を超える」ことはできません。

一方で「虚な世界＝心」を思い浮かべてみると、人間の「欲望」はブラックホールによく似ています。思い描く欲望のイメージネーションは、限界を知りません。その欲望に限りある限界を知らせるのが、「理性」の役目です。人類が生存を持続する基礎的な「欲求」をベースに、より良く、楽しく、美しく、快適を求める「欲望」は車のアクセルのようなもので、欲望を深めれば意欲は加速されます。他方、車のブレーキ役は「理性」が果たします。社会の周囲を見渡し、加速しすぎていれば抑制の信号を送り、減速しすぎて渋滞していれば加速の信号を送り、適正速度で走行維持を図る役割が「理性」となります。生活者の消費欲望を煽るアクセルを踏み続けければ、生活者が乗った車は地球の淵を転げ落ちてしまいます。だれでも分かるこの単純な仕組みを知りながら、ブレーキをかけられない「欲望」の魅力は、一種の麻薬とも言えそうです。アルピニズムの段階的向上心は、欲望の享楽を満たす妥当な手順となりますが、その行き着く先は「死の世界」です。「死の環境に立ち入り、体験の中から死の恐怖を克服する・・・(生還)」、誰にでも勧めることはできません。自ら選んだ人のみに最適なのですが、「他者や信仰にすがりつくことのない、自由な意思で、自立する」、現代社会最良な「道」です。

世界は今になってようやく、地球環境に限りあることの認識が実感されています。ローマクラブの指摘から、はや40年余を過ぎますが、人類史の時間軸で見れば、まだ現代の出来事です。「欲望⇒成長⇒より高く、より困難な科学的合理性追求の到達点＝最高の価値」とする近代精神の高み(プラト-)を維持しつつも、その結果がもたらす環境破壊と人格破壊を手前で抑制するためには、進化から開放された

自由で豊かな感受性が培った知性をもって、最適運転へと定常化させるフィードバック回路を作動させなければなりません。 ポジティブ・フィードバック (正の帰還) をかけると、成長はより促進されてしまいます。 ネガティブ・フィードバック (負の帰還) をかけると、成長は減速されます。つまり、フィードバック(制御)する要因は 環境限界 を見据え、無限な欲望を抑える豊かな 感受性のイマジネーション (価値観) が必要です。 人間が科学によってロボットミ化される前に、地球の豊かな自然とともに生きる感受性の喜びを知性に加え、人工知能と対峙していきたいものです。

「登山」とはまさに、そんな感受性を育む始原的な行為であることを、改めて強調するところです。 「たかが山登り」のスポーツに収斂させることでなく、「されど山登り」の感受性を育み、その素晴らしさを次なる世代へと繋ぎとめたいものです。

見田先生が指摘される【日本の社会は、世代が消滅しつつある】ことへの対処として、コンピュータ上のバーチャルな世界ではなく、山岳の自然にまみれる 登山体験を通した感受性こそが「新たな人間的感性と知性」を生み出し、次の世代へ引き継がれる「人間教育の場」となれることを期待するものです。

アルピニズムの変貌は、マクロな人類の視点を終焉とし、ミクロな個の視点から発する山岳自然との感受性にまみれ、培われた知性をもって人類の視野へと、ふたたび帰納・演繹させること、だといえます。 個の視点から山岳自然を通して自らを見返すことは、「哲学的思索」となります。また、自らを無に帰して自然に帰依すれば「信仰」や「思想」となります。しかし私は 個と個が共鳴、共感、協調する宇宙での基本的な在りようである対称性への「同期・同調 (蔵本由紀、『同期する世界』、集英社、2014、=マッチング) こそが、人間の自然な在り様 と考えるのです。人間の関係性で述べれば【人と人の心を結ぶ無償な愛と真・善・美】とする無形な価値(虚な部分)において、非対称的存在を対称的關係へと動的平衡(統合)を図りつつ安定化させる、自然な人間固有インピーダンス(特性)の同期・同調 に期待するものです。つまり、アルピニズムの変貌は答えの出ない個々の心の変遷の中に DNA のように組み込まれ、億人億様、様々な関わり方によって表現することができますが、「生きる」そのことへの情動が、アルパイン登山表現 となって表出されます。その行為が人間の必然と理解されるならば、アルピニズム登山 にまだ希望は残されます。「リ

スク」を乗り越える過程で、**成長の実感と成長の限界**(主観的限界と客観的限界)を知ることができ、**幸福の実感を真に味わうことができる**ことを知ってほしいものです。

**成長の限界**は二種類に分けられます。**第一は「主観的限界」**で、自らの自覚によって「もうだめだー！」と諦める限界点。**第二は「客観的限界」**で、自然の摂理に基づいて決められ、科学的検証により確認される限界点。体験的感覚でいえば、「**主観的限界は客観的限界のおよそ 1/3 をもって自覚される**」、と感じます。例えば困難な中で「**もう死にそうだー！**」と思っても、まだ死んでいません。生物機能が停止し、分子交換(代謝)できなくなる生命体の死に至るまでには、まだ 2/3 程度の余裕があるのではないかと。健康自覚限界を 1/3 程度とすれば、それから疾病や精神活動の低下を招き、全ての代謝機能が停止に至るまでには、まだ 2/3 のゆとりがある。そうでないと、**人は簡単に死んでしまう**からです。システムチックに述べれば、疾病や活動意欲低下は死の前段階での警報信号(アラーム)であり、機械であれば部品交換すべき部位を知らせてくれます。人体の場合は、他者から部位調達すると生命倫理問題が、また調達できたとしても相互の生体適合性が適っているか、検証を要します。一方でips細胞技術等の再生医療においては、どこまで、何のために、生命維持を図れば良いのか、再生医療技術の**生命倫理問題**等、簡単ではありません。他方機械においては、壊れたパーツを交換するか、不都合なパッケージを交換するか、全部を新品に取り替えてしまうか、倫理不問なテクニカルな問題と、コスト・バランス(費用対効果)によって、選択枝判断(設計)がおこなわれます。

「**限界克服の再帰性**」においては、「**リスク・マネジメント**」と「**クライシス・マネジメント**」の考え方があり、様々な意思決定の**判断基準**(リーダーシップ)を設定することとなります。その応用として、山岳遭難対応や、原子力発電所メルトダウン等々への対処がありますが、拙著考察を参照下さい。(『登山の総合人間学』、私製版、2015)

人類視点からのアルピニズムは終焉ですが、**個体視点からのアルピニズムは世代とともに生まれ変わり、その様態を変遷しながら文化的生活の中で継承されていきます**。そしてなによりも、「**今を生きる！**」、その時々**の“生命の輝き”**が反映できるはずで、**新たな文化がそれを失ってしまうならば、誠に残念**でなりません。

## 2節. 登山の弁証法的再認識

人類進化の方向性は、無意識な欲求から生じる進歩・向上指向であり、アルピニズムの方向性とマッチングするものでした。第二次 RCC は情緒を捨て去り、身体のエネルギーと技術を用い、より明確で客観的記録を求め、初登頂・初登攀を実践しました。その山岳世界が無限であるならば持続できますが、地球の山岳自然にあっては、やはり有限な「閉じた系(世界)」であることを否定できません。

アルピニズムの進歩・向上をめざす悟性的側面を「正」と定立すれば、以下の「文脈 ①＝無意識な欲求」で述べる「正の登山」となります。次に正の定立を否定する文化の側面を「反」と定立すると、「文脈 ②＝意識の欲望」が取り上げられ、「反の登山」が多様に展開されます。さらに対立する正・反両者を肯定的知性により統合すると、「文脈 ③＝複素な多次元世界」にたどり着き、「合と新の登山」では何でも有りとなり、全く自由な反面、無秩序な混沌ともいえます。何でも有りとなる多様な登山展開を、新旧世代はどのように理解し合えるか、難しい課題が横たわります。

そこで次の三つの文脈から、順次考えてみることにしましょう。

### 文脈 ① = 無意識な欲求 (正の登山＝文明進化の方向性＝絶対的単一要素⇒成長)

「自己あるいは人類初として記録を求める欲求」は、文明進化と方向性を同じくする生存の必要条件に属します。この欲求は自然人として持って生まれた、未知なるものを知りたいという知的欲求本能であり、自己または人類とする単一視野にたった「即自欲求」でもあります。この即自欲求は、自己及び人類の限界へと迫り、限界を知り、その限界領域を次々と拡大更新する、文明の位相に同期するものとなります。いわゆる「正の登山」の立場です。

近代登山の展開として、最初の段階では初登頂の時代といえますが、もはや現代登山にあっては、終焉を迎えています。しかしながら、自己の立場としては残されたおり、自己進歩の即自欲求は、いかなる世代にあっても人類の普遍的な欲求と考えることができます。

## **文脈 ② = 意識の欲望** (反の登山=文化享受の方向性=多様な中の条件設定⇒競争)

「記録によって他者に優越する欲望」は、文化として価値の多様な表現様式でもあり、生存にとっての**十分条件**に属します。他者と共生する社会の中で、他者との比較(競争)によって他者よりも優越したいと願う欲望(意識)を満たす感性(心)をとまないます。この「**対自欲求**」は「**欲望**」という言葉に置き換えたほうが、その意味を適切に反映します。「**反の登山**」の立場です。この「**欲望**」が抑圧される社会にあつては、**教条主義的フラットな文化**となり、「**欲望**」を自由に発揮できる社会にあつては、**多様な文化**が花を開かせますが、その末路に**混沌**が見えます。

現代日本は、後者の自由な領域にあると云えます。さらにつけ加えると、「**人が感じる美とは、他者よりもほんの少し優れている**」ことの中にあるといわれます。大きくかけ離れてしまうと周囲から孤立し、優越感よりも不安を駆り立てるからです。

近代登山の展開としては第 2 段階で、**バリエーション・ルート**の時代といえます。現代において、文明視野からは限界に達しましたが、**個体視野**にとっては**いつの世代**にあつても「**初体験**」は残された、**文化要因**といえます。

## **文脈 ③ = 複素な多次元世界** (合と新の登山=幸福の方向性=なんでも有り⇒居場所)

文脈①と文脈②の、文明要素と文化要素は「**実な世界**」として二次元平面(東西南北=実社会)に現れます。さらに他者から見えず伝えにくい「**知的本能**(理性)や**感性**(心)」という「**虚な世界**(抽象な意識の世界)」は隠蔽されています。「**正・反**」の目に見える実利的社会(二次元平面構造)と、目に見えない「**虚な世界**(意識の世界)」を加えた「**合と新**」の現代社会認識は、デジタル電子機器とそれを動かすプログラミングによって、4次元立体構造(東西南北～空・時)な**物質**(リアル)と**意識**(バーチャル)が混じり合った「**現実 + 仮想 = 複素世界**」という、複雑な世界を生きることになりました。その複雑な世界を「**複素な多次元世界**」と考えると、【図-5】(P-109)となり簡単には説明ができません。

外部から見えず、他者に伝え理解しにくい「**理性と心**」の「**抽象的世界**」は、私たち一人ひとりの心身の内にあります。その一人ひとりによって**家族、職場、地域、国家、世界意識**が構築されます。それら「**複素な多次元世界**」は、目に見え

身体によって体现される「**実な世界**」と、目に見えない「**意識**(知性+感性)」によって統合される「**複素的 4 次元世界**」の構図となります。その構図を複素的ベクトルにより、立体可視表現を試みたのが次頁の【**図-5**】となります。

「**合と新の登山**」は、この「**複素な 4 次元世界**」を理解することにより、その行為と意識の位置が見極められるものと考えられます。それゆえに「**正・反**」の「**実な世界**」からだけでなく、「**合と新**」の「**虚な世界**」、見えない、伝えにくい、意識の世界の位置(ポジション)を、いかに他者と共有(同期、同調)できるのか、**新人類社会**への説明と理解が、今後重要な課題になると考えるのです。

「**合と新**」による登山記録の複素な表現は難しく、また「**正・反**」の人々にとっては理解しがたいものとなります。**心性と身体性が複合する記録とは、一体どのようなものになるのでしょうか。**短絡的に述べれば、「**なんでも有り**」ということです。

ある時はアルパイン・クライミングをおこない、また別な時はボルダリングをおこない、季節によっては詩情豊かな景色とふれあうヒマラヤの麓を歩いてみるような、**アナログ的連続性でない、デジタル的不連続で間欠のかつ突発的な行為となり、その中心では心身の統合を図るバランス感覚が作用している……、そんなイメージが湧きますが、ではどのような生態となるのでしょうか……。**

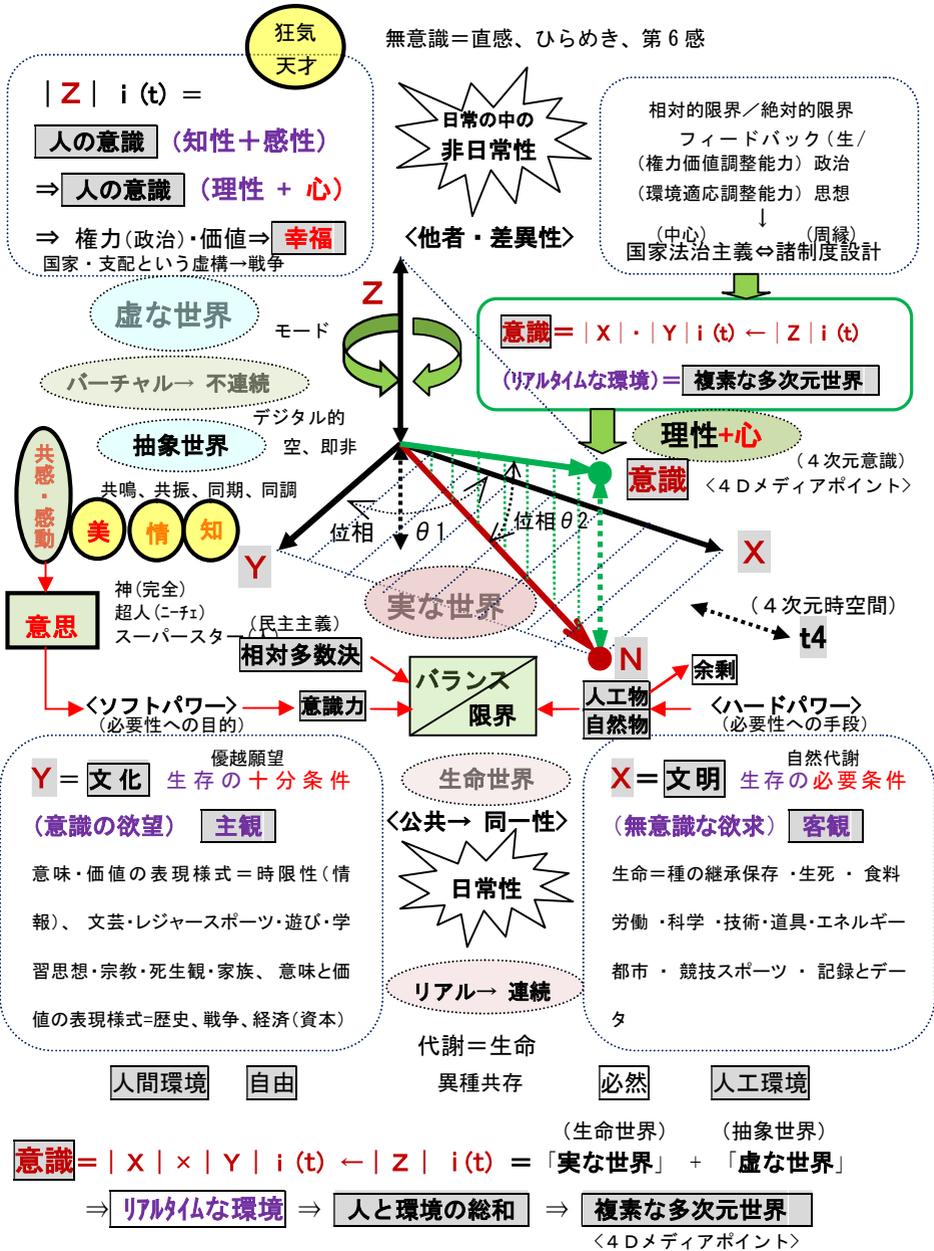
「**異なった次元での比較・評価は無意味**」となり、「**なんでも有り**」な状態です。その理性、感性に同期・同調するすると「**イネ**」となってそれに群がり、「**イヤネ**」の場合は簡単に離散する。しかし個体でいることには不安を覚え、ふたたびどこかの群れにつながろうと試みる。軽い乗りで、情報操作の離合集散を繰り返す。弁証法による正反の合意形成努力もなく、理性、感性の即自的同調を予測します。

では「**正・反**」による実存的体験と弁証法の**合意形成**は、もう役に立たなくなるのでしょうか。このことへの論考こそが、本論の主題となります。つまり、18世紀以降の社会をリードし、今なお進化を続け、生命操作や人工知能を生み出している**知性に対し、体験して得る感性を取り込み、幸福という心の状態に到達できる三段論法(弁証法)により、「動的平衡」を図ることが「生きている」**ことへの理解と普及です。

巻頭の【**別表-1-1**】、【**別表-1-2**】に「**登山と山岳スポーツ等の生態分類**」をまとめてみました。そこに、「**自分の居場所**」が見つかれば幸いなのですが…。

[ 図—5 ]

人の意識・文明・文化 = 環境の複素的な世界構造



### 3節. アルピニズムの終焉とフロ意識の錯誤

#### (1) アルピニズムの終焉

##### (デジタル映像とSNS文化)

21 世紀文明の特徴＝「**軽・薄・短・小**」は、人が人として生きることの中身を軽くし、薄っぺらなものと化し、刹那的(デジタルノイズ的)な生きざまを見せています。それ以前のアナログ世代からの連続性は途絶えます。「**デジタル思考とアナログ思考**」、両者の特性の違いは、表象を変え、思考も変えます。現代の電子・情報化文明は、人類の文明・文化を複雑微細かつ多様化に向かわせています。そのことに連動して「**登山の多様な分化**」も進展しています。

第一次登山ブーム時代との違いは、「**地球環境問題(限界)意識**」があります。言葉を代えれば「**地球環境(自然)と文明(人工化)の限界問題**」であり、「**成長(人工化)の限界認識**」を、人類として真剣に考えなければならない現代にあることです。山岳自然に分け入る登山にあっても、…**しかり**です。

今、「**登山とは何か…?**」、などと考えながら山を登っている人は、極めて少数派となりました。水と少しの食べ物を持ち、スニーカーをはいて徒歩で登る山は、「**たかが山登り…**」と気やすく出掛けることができます。少し慣れてくると自然の中で心身開放の心地良さに気づき、「**登山のスポーツ性**」を楽しむようになってきます。まだ「**たかが山登り…**」の範疇といえます。

それから先、進歩の段階に至ると「**登山とは…**」、「**スポーツとは…**」等々と考え始め、だんだんにその道の深みにはまり込んでいきます。「**されど山登り…**」の世界への入口です。

20 世紀の太平洋戦争末期、巨艦重砲の象徴「**戦艦大和**」は、小さくて軽く、そして速い航空機群に、いとも簡単に敗れ去りました。戦艦大和、武蔵という「**重・厚・長・大**」文明が、アメリカの航空機群の「**軽・薄・短・小**」文明に敗れ去った事例が顕著です。さらに航空機を打ち落とすため、高射砲の弾道計算に用いようと開発されたのが「**コンピュータ**」の始まりといわれます。高射砲弾道計算はミサイル(ロケット)軌道計算へ進化し、さらに人工衛星、宇宙ステーション、宇宙探査へと進

化していきます。

21 世紀「**軽・薄・短・小＝技術**」への移行は**文明**ばかりでなく、**文化**においても当てはまります。20 世紀末までの「**アナログ思考**」は、21 世紀からの「**デジタル思考**」へと、一気に変わっていきます。このこと**の理解は文系人には難しく、理系人が文系人を説得させる論法が、上手くはかどらない現実にあります。**そのこと**の解消は理系と文系の統合であり、さらに科学技術と学問分野を統合する、「複雑系」の理解、説明、知識普及が難しいことにありそうです**

つまり、**科学・技術分野の実相な面と、感性や心といった虚相な面を統合させる「総合人間学」が、未成熟な段階だからと考えられます。**その構造を「**複素的世界構造**」と称して提示しても、未だ論理的稚拙さゆえに説得力に欠け、さらに**実社会はその「気づき(意識)」に欠けます。実相で目に見える「科学・技術」の進化は進みますが、虚相で目に見えない「感性や心」は混沌に陥っています。**

さらにまた、目に見えなかった虚相の世界が、「バーチャル・リアリティ」として可視化技術が進み、視覚表現されるようになりました。まさに**実相の現実視野(リアル)**と、**虚相な感覚視野(バーチャル)**を合成し、**人間の脳内世界を可視化する技術**です。しかしそこに、人間の体験を経て得られる「経験からの気づきを反映(帰還＝フィードバック)」した、「新たな学習発想プログラム(＝創発)」は組み込めるのでしょうか。

深く真理を掘り下げる**哲学**は不要となり、人生は**ゲーム**のごとく、**軽薄短小**な何万種類の**パターン**の中から、一つを選択することに「**自由さ**」を感じるのでしょうか。生きることの相克は**3K**のごとく、「**ダサイ**」現象と受け止められ、もはや過去の遺物でしょうか。**連続的思考**(因果→アナログ)からの判断と、**瞬間刹那的ひらめきの感性**(ノイズ→デジタル)は同期できるのか。**デジタル思考の新人類**が多数となれば、**アナログ思考な旧人類**はもはや**古代人**となり、**アナログ化石文化**となるのでしょうか。

アルピニズムの「**死を介在する弁証手法**」は新人類にとって、面倒な、時代錯誤な遺物と感ずるのでしょうか。**蘇生医療、再生医療、遺伝子操作、クローン生成、等々、「生命そのものが人工物」として扱われ、「天命や寿命」という自然サイクルの言葉は死語**となります。さらに**人工知能(AI)**を搭載したロボットに至れば、「**エネルギー供給＝生命**」となり、**身体(ボディ)**は部品交換可能な**不死身**となります。し

かし部品交換は面倒で非効率となるので、丸ごと新品交換となるのでしょう。人体が有機細胞の代謝により身体を持続させるのに比べ、ロボットはパーツの交換となりますが、それよりも新型ロボットへの丸ごと交代となるのでしょう。人体が食物摂取で細胞の代謝を図りながら生命を持続するのに比べ、ロボットは電気エネルギー供給により活動機能を継続させます。人間の食物摂取に等しいエネルギー供給が、ロボットでは電気エネルギー供給となります。人体の有機細胞代謝が、ロボットでは無機質なパーツの交換へと変わります。

現代の知見において「心」は、人間個体の意識統合機能と理解されており、特定部位による特定機能の働きではない、とされています。つまり、「ハート＝心臓＝心」ではなく、「**脳の特定部位**」を指すものでもないといわれます。ましてや人間が**気づき、意識されるには、事象の 0.5 秒後**であるとされます(ベンジャミン・リベット、『マインド・タイム』、2006 年、岩波書店)。バーチャル・リアリティの**ゲーム研究**においても、人間意識によって**識別できる時間は 0.02 秒**とされています。つまり、現実認識≒視覚認識における 0.5 秒や 0.02 秒という時限の遅れは、人間が認識できた時限の事象は、すでに過ぎ去った**過去の事象を脳機能は追認**していることに他なりません。ちょうど人々が星座をみているようなもので、現在見ている星は、すでに数万年前の過去の事象が今届いて見ていることに似ています。**数万年が 0.5 秒、0.02 秒と短縮される**だけです。「**今＝現在**」と認識した人の意識は、その時限に相対する現実事象としては「**今→過去**」という理解です。人間の意識はすべからず、「**過去か未来**」を対象化していることになり、**現在**という意識の時限に一致する事象は無いといえます。量子物理学の「**不確定性原理**」から考えると、あらゆる事象は**確率的正しさ**において述べるのみであって、「**唯一絶対的正しさはない**」とされます。そのことを指してニーチェは、「**神(＝絶対者)は死んだ**」といったのでしょう。

果たしてそこで、**ロボットに哲学は可能**でしょうか？ アナログ世代の人間にとり、従来の考えから答えを導くには至りませんが、推考してみればもはや哲学や宗教は不要なのかもしれません。ロボットを作動させるプログラミングに、どのようなフィードバック機能を織り込み、判断、創発できるか、という問題となるのでしょう。適正値に収斂させるフィードバック回路は容易ですが、適正値そのものに人間的倫理や

新たな価値(創発)を反映した判断ができるのか…、人類文明の最大な問題です。

1974年、ヒマラヤ7,835m峰の岩壁登攀へ出かけ、さらに1978年も同じ岩壁登攀へ出かけましたが、3 隊員遭難死亡事故となってしまいました。登山隊長として計画の立案から事故処理に至るまでの全てをおこないましたが、これら一連の体験を経ると、「登山にはスポーツ的要素が含まれる」という理解はさらに深まり、「登山の総合人間学」へと向かうことになりました。「されど山登り…」の領域です。

これらの体験を通して私は、「生きることの意味と人生」について学びました。喜びや悲しみ、反省を踏まえた、次なる**思考と判断**をより良き方向へ導くための**経験**となって蓄積されます。これら一連の過程が人生となり、その過程の中で生きていくための「**自信＝適正值**」が確立されます。そして生きることの意味や、何のために生きるのか…と、これまで哲学や宗教を考え、探しまわっていた**命題**に対し、一定の答えを得ることができました。「**アルピニズムの弁証法**」とは、個体体験における**記録の進歩**だけではなく、**心の安定を図るために経験・学習文化(登山)**がもたらせる**最適制御方法論**の一つであり、**まだまだ終焉には早過ぎます**。

そして人工知能(AI)は、**体験**を経て学ぶ**哲学的解答(倫理)**を含めた**思考と判断回路**が織り込めるでしょうか。アナログ世代の頭には、もう限界の先の思考です。

## (2) プロ意識の錯誤

### (スペシャリストとプロフェッショナル)

戦前、戦中までの登山は大学・高校山岳部と日本山岳会が中心となる、ある面では**自由と孤高**を尊ぶアカデミックな印象があります。戦後の高度経済成長時代に入り、余暇の充足活動は拡がり、「**第一次登山ブーム**」といわれる活況でした。余暇と小遣いが増えた社会人は、ハイキングから岩登りまでに活動範囲が広がり、「**三人寄れば山岳会**」という風潮の中、一杯飲み屋に同好の志がたむろします。

すでにその頃から、「**登山はスポーツである**」という定説がありました。この文脈は現在も引き継がれていますが、今ではその先へと進化をとげ、「**スポーツ クライミング**」となって2020年東京オリンピックの追加種目となりました。

しかし私は当時から、「**登山にはスポーツ的要素が含まれる**」と理解し、「登山

はスポーツである」と割り切る考え方に対し、異論を述べていました。戦後日本の先端クライマー集団がかかげた「スポーツ・アルピニズム」に疑問をいただき、私が小さな批判文を書いたのは1967年、今から48年前のことです。さらに日本の山岳界を束ねる日本山岳協会の差別的な業務処理に対し、憲法に反するという「日本山岳協会への批判」を山岳同人雑誌に発表したのは1973年、今から42年前のことです。しかし反響は、片手の指を折るほどしかありませんでした。

その原因は当時のオリンピック競技にプロフェッショナルな人々の参加が許されない「アマチュア規定」があり、「アマ / プロ問題」があったからです。オリンピック参加種目でもない登山あっても「オリンピック参加アマチュア規定」が適用され、ヒマラヤのような海外登山において、登山隊隊長がアマチュアでなければならぬという日本山岳協会の業務判断は、憲法に反すると指摘しました。ヒマラヤ登山のような生死を賭ける登山にあつて、登山者は皆プロフェッショナルであつたほうが良いとするのが、私の主張であります。また登山に生死が絡むならば、「登山者はよりプロフェッショナルであるべき」、というのが私の論旨です。

では「プロフェッショナル」とは、どのような存在なのでしょう。現代社会では「高度な専門的職業人」として幅広く理解され、その分野で生計を立てている経済概念として用いられています。半世紀前には「プロボラー」という言葉に驚きましたが、現代では高度な専門的スポーツ職業人は皆等しく「プロスポーツマン」と称され、契約金、賞金、賞品、報奨金、等々の金品対価を得て生活しています。他方でその行為を職業とせず、金品対価を受け取らない人々を「アマチュアスポーツマン」と呼ぶことから、それらの呼称は経済概念によって区別、理解されます。

一方対義語として、「エキスパート(熟練者)」や「スペシャリスト(専門特化者)」という言葉がありますが、こちらは「その分野の高度な専門家」、「熟練に長けた専門家」としてのメンタル(知的)、テクニカル(技術的)な専門性が強調された、社会的価値としての権威概念があります。学者やエンジニア等にみられるよう、その成果を直接金品対価と交換するのではなく、その知識や技術が社会に有効とみなされたときに、社会的価値が生じて権威となり、場合によっては対価も生じます。

「プロフェッショナル」と「エキスパート」や「スペシャリスト」を合体する全能な

人格を考えると、古来人々は「神」のような抽象概念を思い描きます。このことに関連する良い記事が、2015年12月18日の朝日新聞朝刊に載りました。少し長くなりますが適切な文章ゆえに、以下に引用します。

2015年12月18日の朝日新聞朝刊

神里達博（千葉大学教授）

日本語でいう「プロ」とは「プロフェッショナル」の略語だが、英語の「Profess = 召喚する」から派生した言葉だ。これは元々、キリスト教世界において、特別に神から召喚されて就くべき仕事、すなわち、聖職者、医師、法曹家の三つを指していた。そこでは専門的な訓練とともに、職に伴う倫理が求められたのは言うまでもない。そして、それを担保するのは、個人の自律もあつただろうが、同業者の相互チェックも重要な意味を持っていたと考えられる。自分たちの仕事のいわば「品質保証」は、職能共同体による自治によって担われてきたのだ。

この点は伝統的な「職人」の世界も似ている。欧州の職人は、主に徒弟制度によって教育を受け、ギルド的な仕組みの中で、職業的な倫理も保たれてきたといえる。そこは日本も似ているだろう。また倫理を下支えするのは、技に対するプライドというべきものであつたはずだ。

だが近代に入ると、さまざまな仕事が社会的分業によって行われるようになっていく。これはまさに、「専門家=エキスパート」と呼ばれる人たちの増大を意味するのだ。典型例は「科学者」であろう。奇矯な貴族の好奇心に基づく営みから離れ、職業としての科学者が出現してきたのは、19世紀の欧州である。

このようにして、多数の専門家によって社会が運営されるようになってくると、伝統的な職能共同体に属する「プロ」や「職人」の倫理は、社会の背景へと退いていく。このような社会構造の変容に対して、最も早く警告を発した者の一人に、スペインの哲学者、オルテガがいる。彼は、大衆の出現とは、誰もが専門家となり、しかし自分の専門以外には関心を持たない、「慢心した坊ちゃん」の集まりなることだと看破した。そうやって「総合的教養」を失っていくヨーロッパ人を彼は「野蠻」と嘆いたのだ。……(今年を振り返り～杭データ偽装、建築免震ゴム性能偽装、血清療法不正、東芝不正会計)……

今、日本で起こっていることは、そのさらに先を行くものに見える。素人には分からない狭く閉ざされた領域に住む「専門家」が、いつの間にか社会全体の規範から逸脱し、結局は自己利益の増大、あるいは自己保身のために、社会を欺く。この事態は実に深刻だ。

とはいえ、この状況はいずれ、世界中を悩ます共通の難問となるかもしれない。なぜなら近代の重要な本質が「分業」である以上、この世界は専門分化によってどこまでも分断されていく運命にあるからだ。世界を驚かせた「フォルクスワーゲン」の大スキャンダルは、この悲劇的予測の、一つの根拠になるだろう。

ならば、この流れに<sup>あ</sup>抗う方法はあるのだろうか。

おそらく鍵となるのは、かつての「プロ」や「職人」が持っていた「プライド」と、失われた「教養」であると考えられる。すなわち、「目先の利益」や「大人の事情」よりも、自らの仕事に対する誇りを優先させることができるか、そして自分の専門以外の事柄に対する判断力基礎となる「生きた教養」を再構築できるかどうか、ではないか。

そのために私たちにもすぐできることがある。それは利害を超えた「他者」に関心を持つこと、そして、その他者の良き仕事ぶりを見つけたら、素直に敬意(リスペクト)を表明することだ。人は理解され、尊敬されてはじめて、誇りを持てる。抜本的解決は容易ではないが、できれば罰則や監視ではなく、**知性と尊敬**によって世界を変えていきたい。

上記のことを登山に当てはめて考えてみましょう。

登山においては2012年3月21日、公益社団法人「**日本山岳ガイド協会**」という職能団体が、内閣府を主務官庁として認定され、その内部規定により認証された会員を「**認定ガイド**」として、「**自然ガイド**、**登山ガイド**、**山岳ガイド**、**登攀ガイド**、**国際山岳ガイド**」に分類しています。さまざまな登山形態に応じて**有償ガイドする職能**により、呼称を「**プロガイド**」としますが、「**エキスパートガイド**」や「**スペシャリストガイド**」とは言いません。「**プロガイド**」という呼称は、「**認定〇〇ガイド**」という**品質保証的な有資格者**である、と理解することができます。山岳ガイドの品質保証職能共同体として、「**日本山岳ガイド協会**」の公益的有用性は理解できます。

しかし日本の山岳における近代登山にあっては、山岳ガイドを必要としませんでした。大学山岳部や社会人山岳会等において、それぞれのリーダーが指導、教育係を受け持ち、私設ガイド役を果たしていました。その機能を強化し、不特定の登山者へ拡大を試みたのが、1971年4月、社団法人「**日本アルパイン・ガイド協**

会」の設立となります。それ以前の「山案内人」は登山ガイドでなく、地元の剛力達が山道案内や荷役分担する登山補助員的な役割であり、あくまでも登山者が主体者となっていました。20世紀末までのヒマラヤ登山における、「シェルパ」の役割と同様なものでした。(シェルパ=シェルパ族=ヒマラヤ登山の荷揚げ等の協力者)

岩、雪、氷の山々を登るのがヨーロッパ・アルプスの近代登山であったことから、ヨーロッパ・アルプスにおいては当初からガイド登山が登山の一般概念でした。日本の無雪期登山では、特殊技能を持たない普通の登山者でも容易に登頂することができたため、登山ガイドを必要としません。

「現代文化の多様性」は、もちろん登山生態にもおよびます。学校山岳部や社会人山岳会で地道に訓練するよりも、対価を支払い、ガイド付き登山をおこなうほうが簡便です。交通手配、宿泊手配、山岳ガイド、山岳保険等々、自ら歩き登る以外の様々な手配やリスク管理を、金銭対価を支払って代行する時代です。さらに行く先々の山岳コースもパンフレットに整理され、対価を付した一覧表となり、その中から選び出すこと(チョイス)が、唯一の自由裁量領域となります。それを「羊の群れ登山」と揶揄することは、「今どきの若い者は……」的な、古き時代錯誤なのでしょう。オールドクライマーにとっては、登山がもたらせる最大な意味、「自然と対話する自由な精神」を、お金に換えて売り渡しているとしか思えません。

これら、前記の神里氏が指摘するように、登山社会も分業が発達し、山岳ツアーエージェント、山岳ガイド団体、登山用品業界、山岳雑誌業界、各種保険業界、山岳施設事業者、運輸機関等々の「登山産業化」は進化する一方です。一番大切でありながら未発達な点は「遭難対策」なのですが、一重に公共頼みとなり、警察、消防機関が中心となっています。独自に登山団体が遭難救助体制を確立することは少なく、わずかに東京都山岳連盟傘下で試みられている程度です。

もはや自分で衣・食・住を背負って登る登山は、古典となってしまいました。これら山岳ツアーエージェントがすべてを取り仕切ることに、自由を売り渡した抵抗感覚を感じない新世代が主流の現代です。旅行エージェント、シェルパ・エージェント等々の協働は欠かせません。登山開始地点(ベースキャンプ)へ至るまでの交通、宿泊、食料・装備輸送もまたパッケージ化され、対価の支払いによって交換されます。

ある種の登山生態にとっては割り切って考えることもできますが、大多数がその流れの中に飲み込まれた昨今の登山状況を顧みると、登山を通して人間が育てられる大切な機会を売り渡している、残念といえる過程が浮き上がります。

私が青年期の時、登山を通して死の淵で悩み、考えていたことは、32歳のヒマラヤ遭難とその対処の中で、一挙に心眼を開かれた思いがありました。つまり自然の中で偶然に「死と出会う」も、それは「偶然な時空の重なり」として受け入れる、心の寛容さを知ることができたからです。もし登ることだけを考えていたら、遭難登山隊長の職務はおろか、自分自身の心の整理もつかずに、パニックに陥っていたことでしょう。登ると同じくらいに心が求め、本を読み、考えを巡らせていたことが、一瞬のパニックを経たすぐ後に、即座に冷静さを取り戻せた要因だったと思ひ返せます。ヒマラヤ大自然の中で身体は疲れ切っていましたが、頭脳はとてもクリアな状態にあり、冷静に大局を見渡しながらかん断することができた経験です。

この体験をもとに書いたのが、【3.11 とクライシス・マネジメント】（『登山の総合人間学』、私製版、2015）です。「リスク・マネジメント」と「クライシス・マネジメント」の対処の違いを述べています。日常ほとんどの出来事は「リスク・マネジメント」で対応します。しかし、非日常的な「死」や原子力発電所炉心の「メルトダウン」のように、一回限りの重大事象がもう元へは戻せない危機状態にある時、「クライシス・マネジメント」として、即座に対処しなければならない、ことの説明です。その判断の責任がトップリーダーの主たる任務であることを、トップリーダーは常に危機意識の中に備えていなければならない、ことを述べたものです。「たかが山登り」の遭難事例から導き出した、「されど山登り」への展開例です。

「たかが山登り」の領域で収まるならば、登山のスペシャリストやヒーローに収斂されます。そして「されど山登り」の領域に踏み込んでからは、登山のスペシャリストであることは勿論ながら、登山に含まれるあらゆる素養を学びつつ「その道」を確立すべく研鑽を積み上げ、あらゆる存在とともに生きる……、そのような人格者を指して「プロフェッショナル」といえましょう。素養を身に着けず、単に対価を受け取る職業人（テクノクラート = technocrat）であるならば、「スペシャリスト」の理解が適切であると考えるのです。

## 8 章 . 星の王子さま(登山)& かもめのジョナサン

### (山岳スポーツ)& 山岳文化

2016.05

中郡大野町四之宮(現=平塚市四之宮)で生まれた私は、少年期を毎日、富士山と大山を見て暮らしていました。地元の神社は「延喜式内社 相模国第四之宮 前鳥(さきとり)神社」で、主祭神は**菟道稚郎子命**(うじのわきいらつこのみこと)です。さらに、**大山咋命**(おおやまくいのみこと)と**日本武尊**(やまとたけるのみこと)も合祀しています。

菟道稚郎子命は人皇第 15 代=応神天皇の第 6 皇子で、命の資質と学殖に秀で、立太子(29才)以前から高句麗、百濟、新羅との外交政策に努め、帰化した工人を庇護し、産業振興を図ったとされます。応神天皇崩御による皇位継承で、第 4 皇子(後の仁徳天皇)と譲り合い、決着がつかず、長幼を重んじる儒教思想もあって、菟道稚郎子命は 412 年、32 才の若さで自ら命を絶ったとされます。第 4 皇子、後の仁徳天皇は弟の亡骸を葬り、鎮祭されたところが現在の京都宇治市にある宇治神社といわれます。(『前鳥神社ものがたり』より)

しかし私の生誕地、四之宮に残る伝承は、次のようなものです。

**菟道稚郎子命**は皇位を譲るため密かに身を隠され、一族を引き連れて海路を東にとった。苦難の末に相模灘に入り、金江の入り江(現在の花水川河口)に着岸。陸上を北東に進路をとりますが、相模川に行く手をはばまれます。一行は渡河をあきらめ、「さきとり」の地に宮を定めます。

そして命の亡骸を安置したところが「**前鳥神社**」となり、葬ったところが「**真土大塚山古墳**」といわれます。

「さきとり」は→崎取→前取→前鳥へと改名されますが、この地が砂丘列の東端であったこと、その後砂丘は海に向かって南へと拡がり、現在の地形となります。

(『前鳥神社ものがたり』より)

前鳥神社は 1909 年(明治 42 年)、四之宮大火で社務所が類焼し、社宝や縁起書一切を焼失します。



前鳥神社正面 2014.06.01 撮影

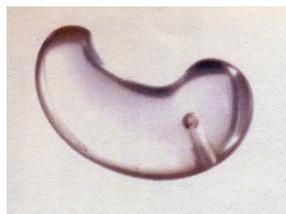


前鳥神社の紋章

15 菊花紋は天皇家への遠慮か？



獅子像(左側)



勾玉(平塚市HPより)



社会クラブ 大塚山古墳発掘に参加しました

1960 年、大野中学校社会クラブで部長を務める  
(卒業アルバムより)



三角縁四神二獣鏡  
(ここにこ写真館掲示板から)

1960年、私が大野中学校3年生の時でした。平塚市により、真土大塚山古墳の発掘があります。近隣地であることから、大野中学校社会クラブ(前頁写真)も参加しました。その時に発掘されたのは、前頁の写真のような勾玉を見た記憶は残っていますが、前鳥神社との関連は全く知らされませんでした。

真土大塚山古墳は土着豪族の墓ともいわれますが、自らの意思で天皇継承を辞退した菟道稚郎子命の墓であるならば、勾玉や神獸鏡の出土とともに、前鳥神社の紋章が**15 菊花紋**であることの整合がとれます。儒教思想に秀で、長兄に敬意を払って自ら身を引いたことが、天皇家の**16 菊花紋章**よりも1葉少ない、15 菊花紋であることの理解は容易です。菟道稚郎子命の処世は、「譲り合いの美德」として日本人の精神形成に影響を与えたとされますが、日本人の「内向き志向」が見事に読み取れます。「内向き志向」の精神はこの私にも大きく作用し、アルピニズムの自己統合へ向かう性格に合致します。

さらにもう一つ、天皇家の16 菊花紋章は、シュメール王家の紋章に酷似しているという話があります。

岩田明=著の『**16 菊花紋の謎**』(潮文社、2003)によりますと、BC600年頃バビロンのカルデア王朝のころ、ヌブカド・ネゼル2世が築いたといわれるイシュタル門の両壁には、ライオン像が多数画かれ、その周囲を「**王家の紋章**」といわれる16 菊花紋が取り囲んでいるさまを、現地に出掛けて確認してきたと書かれています。

一等航海士として世界を船で廻った岩田明氏の見識から、「航海民族でもあったシュメール人の王家の**16 菊花紋**は、航海計器の**16 方位盤**(コンパス)をデザインしたものではないか・・・」、と推測されてもいます。しかし定説としては、太陽神をシンボル化したものとされます。ユーラシア大陸東の果て、日出国(ひいづるくに)日本でも、天照神話や国旗に見られるよう、太陽を神と見たてる関係は深い。それはともかく、16 菊花紋は古代イスラエル、エルサレム神殿の城壁にも見られ、ライオン像(神社では獅子像)は玉座の両側に立っていた、とされます。BC722年、北イスラエル王国の10部族は国家を失い世界へ離散、「**失われた10部族**」と呼ばれます。それから半世紀以上を過ぎたころ、アジアの東端、日出国=倭国の皇室が幕を開けます(BC660=神武天皇元年)。今も天皇家が参拝し、神道の総本山ともいえる伊勢神

宮の構成・構造はエルサレム神殿に似ており、その参道の石灯籠にはダビデの星が刻まれている、と諸書に写真付きで示されています。

それらの仔細は論旨を外れますが、16 菊花紋はシュメール王家に発し、古代イスラエル神殿に残され、世界中に離散した「**失われた 10 部族**」によって、倭国＝日本の天皇家へと引きつながる**物語**として理解できます。さらに一葉少ない 15 菊花紋は、立太子でありながら皇位継承を兄に譲り、前鳥(さきとり)の地に隠匿されたとする、地元四之宮伝承の**古代物語**を重ねてみると、さらに大きく合点がいきます。

古代イスラエル「**失われた 10 部族**」の離散経路にシルクロードを思い浮かべると、その途上で「**徐福** (正しくは徐市(じょふつ))」の**秦氏**が加わっても不思議ではありません。秦の始皇帝から不老長寿の薬草を探す命を受け、BC219 年、童男童女や百工 500～6,000 人(古文書により差異)を従えて九州、佐賀地方に上陸したといわれます。また一部は黒潮に乗り、日本列島に沿って日本海沿岸を北上し、男鹿半島や津軽半島小泊へ達します。一方、太平洋岸は常陸⇒鹿嶋や八丈島へと達します。その主力は九州から四国、紀伊半島⇒新宮⇒熊野⇒東三河等を経て富士山麓へと達します。しかし富士山噴火により安住の地ではなくなり、やがて丹沢山塊を越えて秦野⇒伊勢原へと拡がります。**秦野**の「**秦**」は秦氏にちなむ由来があり、丹沢から大山にかけては薬草を探す「**蓬莱山**」と呼ばれたそうです。これらの物語は『**徐福**』(池上正治、原書房、2007)や、『**徐福王国相模**』(前田豊、彩流社、2010)にあります。それら仔細への言及は論旨を外れてしまいます。

つまり、丹沢～相模平野にかけての古代史は、大きく二つの流れがあります。

① **菟道稚郎子命伝承**(四之宮)、② **徐福伝承**(秦野)、です。さらにそのいずれもが古代イスラエル～シュメールへとつながり、ひょっとして私のルーツに関わるのではないかと思うと、古代物語から丹沢を読み解く楽しみが増します。

ちなみに**古代イスラエル人の特徴**は、次のようなものとされます。

① YAP(-) 遺伝子(真面目、勤勉、親切、自分を捨てて他人に尽くす、縄文人固有の遺伝子でなく古代イスラエル人と日本人に見られる、Y染色体DNAのD系統は日本人・チベット人・中近東のセム系)、② 黒目・黒髪(縮れ毛)、③ 褐色の肌、④ 背が低く日本人とそっくり、⑤ 鼻が高い、等々。誤解を恐れずにいえば、その多くが私にも当てはまります。さらに自立心

が強く、集団に馴染みにくい性質までもが似ています。少年期の私は頭髪の縮毛に悩み、長男も同様な悩みを抱えていたようです。さらに長男の長男(孫)もまた、同様な悩みを抱えるかもしれません。その兆候は少しずつ現れ始めています。DNA 検査をすればよいのでしょうか、ロマンが消えてしまいそうで、未だかつて DNA、RNA 検査はしていません。

私は 18 歳から丹沢の沢登り(滝郷沢)を始めましたが、丹沢山塊はただ、登山対象の山としてしか見ていませんでした。以来、日本の主要な山の岩壁を登ります。32 歳でネパール・ヒマラヤ岩壁登攀中、千メートル上部からの氷河崩落雪崩で、四人が吹き飛ばされます。三人が死亡し、私一人だけが生きて残されます。このときまでが、私の第一の人生となります。第二の人生は仕事と子育てに没頭し、山岳界から遠のきます。そして子は独立し、生計仕事を終業とした今が、第三の人生の始まり、「おまけの人生」です。

今年(2016)で 70 才を超え、今再び丹沢に還ると、富士山から丹沢山麓～相模平野には、日本の古代史や紀元前に遡る古代イスラエルやシュメールへと、自身の民族ルーツの新たな探索が楽しみとなります。

**山岳の高峰は鍛錬や修行、信仰の対象ばかりでなく、その高峰からは神の目線**を意識できます。人間脳がもたらせる、小宇宙へのビューイングポイント。そんな意識を秘めながら、知性の香りとともに丹沢山麓季節の変わり目の花々を愛でるのも、「おまけの人生」の一駒です。2016 年 4 月 9 日、日本山岳文化学会・会員有志と、偶然な出会いから広がった近隣方々 80 名が、丹沢大倉・秦野戸川公園パークセンターに集いました。講演会とチューリップ鑑賞、日本庭園「おおすみ山居」で仕出し弁当を食べ、抹茶を飲んで憩います。

主講演は中村純二先生(東京大学名誉教授、第 1~3 次南極観測隊員)のカラコラム・ヒマラヤ「**チャラクサ氷河探索の旅**」。前座講演は私のネパール・ヒマラヤ「**P29 南西壁登山**」(ツラギの会 P29 南西壁登山隊長)。間のショートスピーチは岩楯岳一、志帆夫妻(ジャパン スカイ・ランニング チーム)の「**スカイ・ランニングとは**」。

参考資料の一つに「**現代登山と山岳スポーツ等の生態分類表**」を配布し、簡単な説明を加えます。登山と山岳スポーツの区分原理を述べ、スカイ・ランニン

グの説明へとつなげます。「登山」とは、最悪死に至る場合を意識する登山行為とし、途上で自然の脅威及び自己変調からのリタイアが困難です。「山岳スポーツ」とは、死を排除する人為的コントロールの下で競技し、安全確保体制と、自己変調による途中リタイアが可能な行為と位置付けます。「死の危険を排除した競技がスポーツ」の位置付けです。

登山は趣味の展開として知性、遊戯性、芸術性、社会性から高じて自己統合へ向かうと、死を媒介としたアルピニズムへといきます。山岳スポーツは安全担保ルールの下で、人と人が競技・競争する、自他相関の結果(記録)比較となります。さらに競技・競争とした結果(記録)を求めず、非競技、非競争な自己身体運動もあり、健康スポーツに位置付けることができます。

フランスで郵便飛行機乗りだったサン＝テグジュペリは、1943年に『星の王子さま』を著しました。毎日の些細な仕種に気づきの愛情を唱え、それでも「心で見なければ、本当のことは目に見えない」と、実相と虚相の視点を統合する、新たな意識づけ(哲学)を示します。神様って？いる？いない？……分かりませんが、神の目線です。

他方アメリカの飛行機乗りだったリチャード・バックは、1970年に『かもめのジョナサン』を著します。厳しい飛翔訓練を重ね、ジョナサンは「神の領域へ到達しようと努力」します。アルピニストの原型を感じさせる内容ですが、死生観を主題とするものでなく、厳しい鍛錬により神の領域に近づくことを主題とします。アスリートに共通する、身心強化とテクニカルな厳しい訓練です。戦後、第二次 RCC は登山の情緒性を捨て去り、スポーツ登山を主張しました。その行きつく先は、オリンピック追加種目たる「スポーツクライミング」となります。しかしスポーツクライミングはもはや登山でない、別種(ジャンル)です。スポーツランニングを加えて「山岳」で括ると「山岳スポーツ」となり、登山から分岐した別な世〈界〉の展開です。

「神はサイコロを振らない」というアインシュタインと、「量子の位置は確率的に決まる」とするニールス・ボーアとの論争は、ボーアに軍配が上がったとされます。

アインシュタインは「**相対性理論**」を、ボーアは量子力学から「**相補性理論**」を唱えます。

現実世界の多くは、アインシュタインが唱えた**相対性理論**から、実在の**相対的力関係**で決められます。その極論は**新自由主義**の弱肉強食経済にいきつき、オリンピック競技に代表されるスーパーアスリートの**金メダル**となります。まさに**目標を定め、鍛錬を重ねて神の領域へ近づく、「かもめのジョナサン」**です。

子供にヤル気を起こさせるスイッチが、三つあるといわれます。① 競争したがる(スポーツ)スイッチ、② 真似したがる(学習)スイッチ、③ 認められたがる(評価)スイッチ、そして後は自主性にまかせる。では大人になると、どうなるのでしょうか。それらの欲求を客観視でき、抑制と制御ができるようになるのですが、子供(人)の時の自然な欲求(スイッチ)を忘れてしまい、社会規範が前面に押し出されてきます。

他方、ボーアが唱えた**相補性理論**、素粒子(電子)は粒子(個体)の性質と波動の性質という二つの側面を同時にとめない、この二つの性質は互いに**補い合う関係**にある、というものです。そしてボーアは宇宙を丸ごと理解しようとする、東洋思想の陰陽を取り入れた易経にはまったといわれます。陰陽を図解したものが「**太極図**」で、数学でいえば「**オイラーの公式** ( $e^{i\pi} = -1$ )」に類似します。私は無宗教者ですが、キリスト教的解釈からオイラーの公式に使用される記号を説明すると、 $\pi$  = 御父、 $e$  = 御子(イエス)、 $i$  = 聖霊、という説があります。人格的表現に代えると「 $\pi$ 」は求心的で偉大な唯一の創造主、「 $e$ 」は創造された自然の性質にある全ての基準を定める方、「 $i$ 」は無限の力を持つ超越した変換者、「 $-1$ 」は与える神の愛を表す、とされます。本質的な三位一体を表す最も美しい数式、と言われます。

量子力学は実数と虚数を組み合わせ、複素数で表す**波動関数**が自然の本質である、とします。量子のような極小世界の観測は、観測そのものが現象に影響を与えてしまう不確定性な関係として、**人知で知ることの限界**を示します。しかしその結果は確率的に予測できるとします。観測によって目で見、数えることができる実数は、科学の実証データとなります。しかし目で見、数えるということは、五感(視覚、聴覚、味覚、臭覚、触覚)のセンサで捉え、体内信号に変換されてニューロンとシナプスを経て脳内で統合され、初めて**実在**として認知される仕組みにあります。しかし目

には見えない第六感や、人間の脳内思考回路や情報処理・蓄積場所、さらに夢などは、実在を伴わない虚相として、脳内で**イメージの世界**を構築します。いずれも人間の脳内コンピュータは、信号によって処理します。つまり**人間が認知する世界とは、脳内で実相と虚相が組み合わせられた複素的情報信号処理の結果**（出力）である、と考えるのが「**複素的世界認識**」です。部分詳細からフラクタル（相似形の概念）思考を用い、宇宙の全体像を理解・再構成しようと試みる**人間脳の世界**です。

宇宙を科学的に理解・表現したとしても、それを科学として証明する「**物質**」は宇宙のエネルギー構成のたった「**5%**」以下でしかなく、その他は暗黒物質や暗黒エネルギーとされてわからない、といわれています。そのことは文明社会における**物証主義の論理的限界**を示し、**複素的世界**（複素共役）において**人類の文化は、まだまだ進化できる余地が残されている**といえましょう。

茫洋とした話しになりましたが、**実証科学の限界、スポーツ記録の限界、物証主義社会の限界、つまり実相の世界とは、「宇宙の中でたった 5%以下の真実」という枠の中の、狭い世界でしかない**と考えられます。

実相と虚相を組み合わせ理解できる**人間脳**は「**小宇宙**」ともいわれるように、自ら統合意識をもつことにより、**部分から全体を統合**（演繹）することができます。コンピュータ活用技術において、フラクタル（相似形の概念）思考により部分的真（帰納法）を拡大・組合せし、複雑な全体的真を表現する**演繹手法**が用いられます。宇宙を理解することは、一人ひとり人間脳の**小宇宙意識からフラクタルに全体像へ迫ろうと**、人類は日々努力進化の途上なのでしょう。人間脳を信号処理の結果と考えると、人工知能の進化は人間とロボットの境界を曖昧にしつつあります。

世界の山頂はことごとく人類の足下にされ、その山頂に立った**神の目線**からは虚相が薄れて実相が浮き立ちます。創造の思考は薄れ、現実のリアルな可視的実相世界が拡がります。そこは生身な人間が立ちつくす現実以外の何物でもなくなりました。すでに多くの登山生態は山岳環境に日常性を持ち込み、もはや山岳は非日常の特異な世界ではありません。唯一、荒れ狂う風雪や風雨、雷という、自然の脅威がむき出しになった時だけが非日常世界となり、日常環境に浸っていた人々

は手も足も出ません。 自己防御する手法は、非日常環境(自然の脅威)の中で、日常環境(施設整備)を強靱化(自民党法案)して守り抜くことになります。 自然の脅威に一時を耐え、過ぎし後に復活する自然と共生する知恵と体力は弱体化しました。

リアルな視線は思考の抽象力を弱め、人間が備えている六つの感性(視覚、聴覚、触覚、臭覚、味覚、第6感覚)の中から、視覚認識が突出してきます。 物質が存在することを認知する視覚、「見える」ということは、物質が光を反射し、その光が視覚信号となって形象を確認する。 視覚の目に代わる電子カメラにより、人体と視線は分離されます。 人体に代わるロボットやドローン、衛星、探査機等々に搭載された電子カメラは、人体という認識ユニットを離れた視覚(目)の空間移動体となり、それ独自で宇宙空間に飛び出して、視覚認識対象化できるまでになりました。 そして、人体という有機体認知ユニットは、どこまで無機体ロボットに代替可能となるのでしょうか。

登山にあっても電子機器の普及は目覚ましく、特にスマートフォンとインターネット・ウェブサイト接続が登山形態を変えつつあります。 まず希望の山とルートをインターネットで事前に調べ、おおよその概要をつかみます。 山に入り、スマホの GPS 機能は位置、高度、時刻、歩数等が記録され、地図を広げることなく画面で検索・視認することができます。 併せて内臓カメラで撮影し、SNS へライブ発信もできる。 これらのことはかつて「俺たちや街には住めないからに・・・」と歌った岳人の、情報から遮断された非日常世界の山岳は、今や日常社会と連携され、山岳の非日常性を失いました。 併せて衣・食・住、全てを背負って登った登山は、今や小さなホテル並みの山小屋と、そこにガイド付きで案内するツーリズム登山やファッション登山により、すべからく経済・産業社会の中に組み込まれています。 登山者自身の基礎知識、基礎訓練が成されないままに山岳に突っ込み、行動に行き詰ると安易に消防・警察への救助要請を発信し、ヘリコプターが出動して吊り上げる。 人命救助の美名の下で公的機関は救出しますが、訓練を経た岳人ならば当然の事、山中でビバークし、自力歩行によって下山する力量をもって山へ入って行きました。 今日(2016.05.02)夕刻のTVニュースは、奥穂高岳で男女 5 名をヘリで救出と報道しています。 歩いて下山できる力量のない人々が、判断の難しい春山(雪またはミソレや雨)へ安易に突っ込んで、山嶺で行き詰まってしまふ。 高齢になってから登山を

始めた人々に、よく見られる傾向です。登山者が日常環境を山岳へと持ち込んだ結末は、登山を経済・産業化させて日常性に組み込み、それによって生計を立てる一連の人々たちを生み出しました。 個体として生きる知恵を、山岳環境から学習する機会を失ったのです。

高度が低い日本の山岳では、日常と非日常の切り分けが難しい、複層した山岳環境にあります。それゆえに登山者の多様な生態は、ぐちゃぐちゃに混在することになります。もはや山岳はアルピニストの独断場でなく、観光もレジャーもファッションも、記録収集マニアもまた、同じような場所に混在しています。その中で、経済・産業化に踊らされる一団が、対価の支払いに物を言わせて、集団で闊歩しています。自然の美に感動を覚え、時には自然の脅威に畏敬を覚えながら、もう少し真摯に、自主・自立・自己責任・自己負担の心を携えて山の自然と対峙し、「生きることの意味」を学んでほしいと願うものです。(ウェブ世代は「ウザイ」という)

一方で無雪期の日本の山岳は、山岳スポーツのゲレンデと化しています。スポーツランニングは一般登山者と相まって、山路を走り廻ります。スポーツクライミングは電動ドリルで岩に孔をあけ、確保用固定ボルトを堅牢に埋め込み、万一墜落しても確保者が一緒に引き込まれないよう安全を期します。アルピニズムにおいては、電動ドリルで穿孔などもってのほかであったものが、スポーツにおける安全確保手段のために、アルピニズムの自己規制(倫理)はもはやありません。記録を競い、美感(フィーリング)を楽しむ身体運動のスポーツからは、もはや死生観の相克に悩む思索性はなく、生きることの意味を問う哲学や宗教の必要もありません。

類似した行動であっても、登山と山岳スポーツの間に明確な一線を引いて区分することは、多様な全体構成の中にあり、各々の立ち位置が明確に理解できるであろう、と考えます。つまり山岳スポーツは「死の条件を排除する」規則や監視、支点や用具を用いて安全を確保し、その会場で競技者間の記録や美感や遊戯性を競い楽しむこととなります。そのような安全確保体制を整えるのであるから、競技者の自己変調があれば、途中リタイアが可能となります。しかし登山においては、自然の急激な変節や自己変調において、避難や休憩はできても、その場からリタイアすることはできません。登山においては最悪、遭難死亡事故を除き得ることができ

ません。それゆえ……、登山における死の感性が薄まっていくほどに、アルピニズム登山は観光・流行登山へと移ろい、また登山者が対自性（自己統合）から自他相关性（スポーツ）へと関心と評価が移ろうことになり、登山は山岳スポーツ化への道をたどります。

もはや登山における「アルピニズムは終焉を迎えた」状況にあり、益々レジャー観光化は進み、山岳スポーツへと移行するのでしょうか。アルピニズムでの非日常環境での体験から振り返り、日常何気なく有ることの大切さに気づき、登山を全身全霊で受け止めるような理性と情緒（プロフェッショナル）、つまり「星の王子さま型」は日ごとに薄れています。 それに代わり、局所の記録や結果に秀で、だれも簡単に到達できない領域でのスーパーヒーロー（スペシャリスト）、つまり「かもめのジョナサン型」へ評価と価値は移行しています。

スポーツへの進化は、電子文明の進化にともなう、必然で不可逆な一方向性と理解できます。しかしアルピニズムの文化的価値評価においては、文化の再帰性（繰り返し現れること）により、以前と異なった様態で復活を遂げるかもしれません。不可逆で一方向的文明の進化は、物質的変容の特性であり、その瞬時、瞬時にあってはパルス信号のような、量子化によるデジタルデータと理解することができます。他方で価値評価は時間の経過とともに変質し、時には白黒反転するような、アナログ信号の連続性の中で、大小強弱色相の別などが繰り返し現れて、文化の変容を示します。この文明要素と、文化要素は、光の粒子と波の性質と同じく、「対」の構造となって共に存在します。文明は実相（見えるもの）、文化は虚相（見えないもの）、その位相差をもって統合する複素的認識により、より深い人間の相補的理解に至ると考えるのです。

ではこれからの山岳環境に関わる「人（意識）・文明・文化・時間＝環境」という、人間的諸能力の自立展開はどのように示し得るのでしょうか。その一例として、『現代登山と山岳スポーツ等の生態分類表』に整理・位置付けてみました。そして「山岳文化」とは、登山や山岳スポーツそのものの結果を記録するだけでなく、その道程や結末を通した二次的～多次的な再帰性、つまり論理的帰納や、思考的演繹による物語性をもって再表現された、「二次的～多次的な作品」となります。

## おわりに

この3年間、表丹沢を毎週のように歩き回りました。渋沢駅で乗るバス満載の老若男女は、終点＝大倉に到着すると、そのほとんどが大倉尾根と鍋割山へ向かいます。それらの人々に背を向け、「風の吊橋」を渡ります。三ノ塔尾根や戸川林道から水無川方面に向かう登山者は、少数派です。さらに水無川流域のバリエーションコースに向かうと、ほとんど他の登山者に出会いません。森林の原住民、鹿や日本カモシカ、テンなどには、時々出会うことができます。それらの原住民に話しかけるのですが、返答はありません。もちろん人間の言葉など分かりようもない動物たちですから、私が話しかけるのは、敵意がないことを伝えたい言葉の音容です。原住民たちは立ち止って振り返りますが、まだコミュニケーションはとれません。

沢や尾根のバリエーションルートに登って表尾根や大倉尾根に出ると、電車やバスの乗客だった人たちと再会します。山スカート族に出会った最初は驚きましたが、3年間も歩き廻っているうちにこちらが順応し、見慣れてしまいました。山登りを始めた半世紀前では、山でスカートををはくことなど考えられません。機能タイツと半ズボン姿も同じです。今私に、機能タイツと半ズボンを与えられても、それを着用した姿で山に登ることは、絶対にできません。歩くだけに限れば機能的に優れていることは理解できますが、登山はスポーツ要素を含んだ総合人間力だとする理解からは、流行(スポーツファッション)に組みません。

半世紀前の登山スタイルは時代とともにアレンジされますが、さりとて現代の登山スタイル(生態)が良い方向へ変わってきたとも思えません。その変化を理解し、都度の登山の位置付けが確認できるように、と綴ったものが本作品『登山の生態分類(学)』です。時間の推移は登山に限らず、人類文明と文化においてこそ先導的変容をきたしております。マクロな局面からは文明と文化の変容が先にあり、登山の生態は追従します。現代のデジタル文明は、文化のリアル(実相)とバーチャル(虚相)を組み合わせた複素的表象となります。アナログ文化のもつ物語性(因果の連続性)は、デジタル文化の特徴である断片的散逸性(分散的な不連続性)へと変わり、そのままでは量子の自由運動のごとく無秩序な混沌を招くだけとなり、未来は確率

的に予測することとなります。人類は確率的予測を「ゲーム(遊戯)」として楽しむことにより、古代から「遊戯文化」としていました。その中に戦争やスポーツがあります。遊戯性(ゲーム)を楽しむヒトを称し、人類学者＝ヨハン・ホイジンガは「ホモ・ルーデンス(=遊戯人)」と名付けました。

登山の遊戯性は自らの戦い(実存)を矮小化させて、他者と競争・競技するスポーツへと向かわせます。その性向はすでに、剣道、柔道においても殺生や護身を究める「求道」とは別な、オリンピック競技種目となり、金メダル獲得が最大目的となりました。相撲道は「神事」を離れた「興業(日本相撲協会)やスポーツ(アマチュア)」と化しました。野球道は「野球の神様」といわれた川上哲治(日本シリーズ9連覇の巨人軍監督)以外には聞こえず、相撲道と同じく「興業(プロ)やスポーツ(アマチュア)」となっています。

日本の山岳登攀は「(近代)登山」よりも「修験道」が先にあり、槍ヶ岳の初登頂(1828年)者といわれる播隆上人<sup>ばんりゆう</sup>は修行僧でした。つまり山岳登攀の呼称(定義)が「修験」から「登山」へと移ったように、現代における「登山」は「山岳スポーツと遠足(観光ハイキング)」に移行しています。「登山道」は「登山路(コース)」そのものを言い表し、求道的な「道」の意味を表しません。それらいずれも、「道」が意味する求道的な精神修養性から離れ、遊戯性を楽しむことによります。

現生人類は「ホモ・サピエンス(=英知人)」と呼ばれ、他の動物にないずば抜けた知能を有します。別な位相においては、「ホモ・ファーベル(=工作人)」と呼ばれ、道具を用いて自然を人工化する文明を築きます。さらに遊戯を楽しむ心の機能は、「ホモ・ルーデンス(=遊戯人)」と呼ばれて文化を築きます。人間(ヒト属)が引き継いでいる、人間たる三つの特性です。ホモ・ファーベルは地球環境の限界に行き当たり、自然と人工化との持続的バランス調整が課題です。ホモ・ルーデンスは21世紀の主役となるのでしょうか、地球規模で展開される遊び場の重複が課題となります。もはや人間活動にとって地球は狭くなり、独自の領域を確保することができません。活動の舞台が重複することによる、摩擦、制限、争い、疎外、排他、を生じさせます。ホモ・サピエンスの知恵は、進化の、向上・発展・進歩、の位相と異なり、人類を人間として位置づける文化統合により、それらの課題調整をおこなう

役割と理解できます。現代社会にあつて、ホモ・サピエンスの**知能を知恵に変換させる過程**が、おろそかになっていると指摘できます。その変換過程とは、まさに「**人間体験**」を通した「**気づき(アウアネス)**」の内省から、創発される「**新たな人間原理(複素的世界観)**」へと見直すことではないでしょうか。知識として帰納させた真理から、新たな世界観を演繹展開させるばかりではありません。体験を通した人間的  
内省からフィードバック(帰還)することにより、ホモ・ルーデンスや、ホモ・フアーベル  
の性向を文化統合する、ホモ・サピエンスの新たな知恵が必要と考えるのです。

自身の『**登山体験**』を通して私は、本書の通り人間力の統合を思いつき、『**登山の総合人間学**』を先に著しました。さらにその時々におこなう登山や山岳スポーツの多様な存在に気づき、それらを『**登山の生態分類(学)**』として考察してみたのが、本書となります。本書をお読みいただき、その時々**の登山がどのような位置づけにある行為となるか、ご理解のお役にたてれば幸いです。**

さらに、登山の弁証法的理解により、人生もまた登山とフラクタルな様相であることに、気づいていただけましたら幸いです。

## 【田中文夫・著作印刷物】

**青春のヒマラヤに学ぶ**、文芸社、2001.1.1、ISBN4-8355-1085-2-C0095

**頂きのかなたに**、文芸社、1999.3.25 廃棄処分、ISBN4-88737-505-0--C0095

**頂きのかなたに**、日本文学館、2003.8.15、ISBN4-7765-0055-8-C0095

**若き日の山々**、私製版・非売品(A5版カラー 162頁)、2014.8.15

**老いの道標**、私製版・非売品(A5版カラー 218頁)、2014.6.10

**登山の総合人間学**、私製版・非売品(A5版カラー 266頁)、2015.12.7

**登山の生態分類(学)**、私製版・非売品(A5版カラー 133頁)、2016.8.30

## 【中村純二 先生からのコメント】

2016.7.16 付 & 8.23 付



日本の宝物のような自然が人間によって潰されることなく、次代に引き継がれていくことを望んでおります。その上からも、今回の『登山の生態分類(学)』には基本的に大賛成です。特にスポーツと一線を画した点を、大いに評価しており、わかりやすい表現で教科書のようになったら最高です。

何とか我が国の素晴らしい登山道や自然を、スポーツや多人数の入山から守るため、スポーツや多人数歩行の道で必要な場合、必要な場所では、別にして作っても登山道や良き自然を残せれば、と期待するものです。

鎌倉あたりでも静かに自然を楽しむ人々のための遊歩道を造ったり、大勢で通過する道を別にしたり、と提案している方が何人かいるようです。そのような配慮まで必要になって来た時代ではなかろうかと、今、考えているところです。

それらを理解するためにも、『登山の生態分類(学)』は役立つことでしょう。

**中村純二** = 東京大学名誉教授、第1次～第3次南極観測隊員、元:東京大学スキー山岳部長、元:日本山岳会副会長、日本山岳文化学会理事

## 登山の生態分類 (学)

= 非 売 品 =

2016年8月30日 最 終 稿

著 者 田 中 文 夫

[ホームページ公開] [http://home.catv-yokohama.ne.jp/55/f\\_tanaka](http://home.catv-yokohama.ne.jp/55/f_tanaka)

日本山岳文化学会 正会員

総合人間学会 正会員